

平成十二年度～平成十四年度
科学研究費補助金〔基盤研究(C)(2)〕研究成果報告書

課題番号 一二六一〇四四六

女訓書の研究

平成十五年三月

研究代表者 榊原千鶴
(名古屋大学文学研究科助手)

平成十二年度～平成十四年度
科学研究費補助金〔基盤研究(C)(2)〕研究成果報告書

課題番号 一二六一〇四四六

女訓書の研究

研究代表者 榑原千鶴
(名古屋大学文学研究科助手)

名古屋大学図書



20106762

研究組織
研究代表者 榊原千鶴（名古屋大学文学研究科助手）

研究経費
平成十二年度 一、一〇〇千円
平成十三年度 五〇〇千円
平成十四年度 七〇〇千円
計 二、三〇〇千円

研究発表

(一) 学会誌等

「女性が学ぶということ
—女訓から考える軍記物語—」
『日本文学』平十四・十二。

「虎と遊女たち」

『曾我物語の作品宇宙』平十五・一。

(二) 出版物

『源平盛衰記 (六)』三弥井書店、平十三・八。
『伝承文学資料集成 女訓抄』三弥井書店、近刊。

目次

一	研究編	
	女性が学ぶということ	
	—女訓から考える軍記物語—	三頁
	虎と遊女たち	十二頁

二	資料編	
	徳国文庫所蔵『女訓抄』	
	凡例	十七頁
	本文翻刻	十八頁
	校異	六十六頁
	類話一覧	六十九頁

女性が学ぶということ
— 女訓から考える軍記物語 —

一、はじめに

明治二〇年、女子教育に資する道德書『婦女鑑』が、華族女学校をはじめとする各女学校に頒布された。ときの皇后美子が編纂を命じた本書は、和漢洋の孝女、烈女、賢母ら一二〇人の、近代国家にふさわしいとされる女性像を採録したとするもの、序文「人妻になりては則ち其夫を扶くるに才徳を以てし、人の母となりては則ち其子を教ふるに義方を以てす」に明らか通り、主たる目的は「婦徳」の涵養にあった。美子はかつて若江薫子より漢学を学んだ。若江は明治一六年『和解女四書』を著し、中国の代表的女訓書の普及に努めた女性である。やがて皇后となった美子は『女四書』を精読し、自らの指針としたという。明治二六年刊の『女四書』は女子高等師範学校生に頒布され、翌年には『婦女鑑』から欧米およびキリスト教関係の挿話を除いた『幼年教育婦女鑑』が刊行された。

ところで、この『幼年教育婦女鑑』の表紙に描かれたのは、『義経記』をはじめとする義経物でよく知られた静御前であるという。一方『婦女鑑』を繙けば、土肥実平妻女、楠正行母といった軍記物語が描く女性に出会う。彼女たちの採録ははたして偶然か。少なくとも彼女たちが、夫を扶助し子どもを教諭した「婦徳」によって取り上げられたというだけでなく、それが「戦」という状況下での行いであったことに留意すべきだろう。明治五年発布の学制に始まる国家政策としての女性教育において、『婦女鑑』『女四書』は、皇后を介して女性に与えられた規範である。明治という近代国家の形成にあたって、女性の国民化に果たした皇后の役割の重要性はすでに説かれてい

る。彼女が体現した女性像とその精神的基盤は、近代以降の女性教育を考える上で欠くことのできない要素と言えよう。本稿の目的は、軍記物語の女性像が意味したものの、そしてそれが女性教育に果たした役割を明らかにすることである。軍記物語はなぜ、女性に関する記述を有するのか。軍記物語の享受のありかたを手掛かりとして、女性が何をどのように学んできたかを考える。

二、女訓とへ色好み

女訓書というジャンルの性格を美濃部重克は次のように評した。

王朝物語の世界とそのへ色好みを解体してその碎片を日常の生活と人生に対応させ、その手本としての生活全般の中に拡散させ浸透させるのが女訓の世界である。

たとえば、『伊勢物語』や『源氏物語』が描くところのへ色好み⁵をいかに評価し享受するかが、女訓書としてのありかたを端的に示す指標となりうる。そして、評価の背景に思想的傾向あるいは政治的思惑が存することは言うまでもない。

女性の側の色好みを罪悪視する儒教的道德（「貞女両夫に見えず」など）と仏教的女性観（「女人地獄使、能断仏種子、外面似菩薩、内心如羅刹」など）によって色好みを淫行と貶しめる思想が第一義的に作用すると王朝物語は淫書の評価を得ることになる。

へ色好み⁶の女の変容を、時代を経て造型された小野小町像を通して辿る今関敏子は、『平家物語』の一節に言及する。平通盛の求愛に応じようとしない小宰相への諫言に、反面教師として小町が引かれることを指摘し、小町の生き方が女訓として機能していた例証とする。今関が規定するへ色好み⁷の男女の

原型とは、へ行動し、働きかける男と、へ待つ身で選び、拒む女とという図式であり、歌詠みであることはへ色好みへの重要な条件である。だが、拒む女の心強さはやがて驕慢と解され、その報いとして小町は零落を余儀なくされたとする。ここで注目したいのは、小宰相の挿話を通してへ拒む女としての生き方に警鐘を鳴らすのみならず、妾としての身の処し方に言い及ぶ『源平盛衰記』（以下『盛衰記』と略す）の存在である。以下の小宰相をめぐる記述は、中世におけるへ色好みへの衰退とともに、軍記物語が試みた女訓の内実を示す。

アマリ二人ノ心ツヨキモ、警トナル者ヲヤ。此世ニハ、マノアタリ青鬼ト成テ、身ヲ徒ニナシ、又後世ノ障トモナル。今ノ世ニハ又、独行道ニシモ合テ、情ナキ事ヲ宛トモ申伝侍。人ヲモ身ヲモ鬼ニナシテ、何ニカセン。繫念無量劫トカヤモ罪深シ。中比、小野小町ト云ケルハ、容顔人ニ勝、情ノ色モ深カリケレバ、見人モ聞人モ肝ヲ働シ、心ヲ傷シメヌハナカリケリ。去共、其道ニハ心ツヨキ名ヲ取タリケルニヤ、人ノ思ノ積ツ、ハテハ風ヲ禦便モナク、雨ヲ漏サヌ態モナシ。空ニ陰ラヌ月星ヲ涙ニヤドシ、人ノ惜物ヲ強テ乞_ヒ、野_ノ辺ノ若菜ヲ摘テ命ヲ継ケルニハ、青鬼コソ床ヲバ並ケル。一夜ノ契、何カサホド苦シカルベキ。

（巻第三八「小宰相局、慎夫人」）

「鬼」、「後世ノ障」、「繫念無量劫」といった表現に仏教上の罪を回避させる教導の強調を認めることは容易である。仏教的な女性観を前面に押し出すことでへ色好みへの道は塞がれる。さらに『盛衰記』は、相思相愛であったはずのふたりがひととき危機を迎えていたと記す。他に心を移した通盛の心を取り戻そうと小宰相は歌を贈り、それは功を奏する。歌の力によって回復する男女の仲は、たとえば「筒井筒」の挿話によって知ら

れる『伊勢物語』第二三段が描くところの「待つ女」を想起させる。だが、志向されているはへ色好みを尊ぶ王朝的世界ではない。つづけて『盛衰記』は、通盛の最愛の人であるはずの小宰相は実は妾であり、西海にあっても同じ船に乗ることはなかったことに言い及ぶ。相思相愛の男女が死を迎えるという彼らの物語を解体し、女性に教訓を垂れるという目的によって物語の断片化を図る。嫉妬の思いを抑え、男を取り戻すために心を尽くす小宰相は、己の分限を弁えた妾であった。正妻の存在を暗示し、小宰相を妾と規定することで、男と女という個の結びつきを越えた「家」の存在が浮かび上がる。

かつて中島美幸は「祇王」の章段を取り上げ、作品全体のかなかで果たす意味を『平家物語』における「家」意識と連関させて説いた。すなわち、「家」の物語である『平家物語』にあつては家父長の描写が求められ、そのために「祇王」の挿入が促されたのであり、私的領域としての「家」内部で清盛が行使する家父長権は、そのまま彼の公的世界での権力の裏づけであるという。たとえば『盛衰記』の場合、清盛一家の栄華を象徴するものとして娘八人の挿話に筆が割かれる。そこに描かれる容姿の美しさ、情の深さ、信仰心の篤さ、あるいは絵、琵琶、琴、和歌、連歌、書、詩作など諸芸に優れたさまは、望ましい女性像の一覧といった様相を呈している。だが、第五女が比類ない歌才を発揮するのは、詩歌の会に臨む夫に恥をかかさないよう代作を試みる場面であった。彼女たちの才芸は、へ色好みではなく夫との家庭生活を円滑にすすめるために寄与するばかりである。さらに幸運に恵まれて清盛の栄華を彩る娘たちの中にあつて、第七女の薄幸な人生は見逃せない。

七八安芸ノ巖島ノ内侍ガ腹ノ娘也。指タル才芸ハナカリケレ共、美兒ハ人ニ勝給ヘリ。（中略）此御娘、十八ノ年、

後白河院へ参給へり。更衣ノ后ニテゾ御座ケル。入道サ
シモナキ事セラレタリト申合ケリ。其上程ナク失給ニケリ。
母ノ内侍ハ越中前司盛俊 ガ賜テ具シタリケルガ、盛俊、
一谷ニテ討レテ後ハ、土肥次郎実平ガ具シタリケルトゾ聞
エシ。
(卷第二「清盛息女」)

父清盛の思惑に翻弄された娘、そしてその母も、清盛の庇護を失った後は男から男へと頼り歩くことでその身を養なった。この母娘の軌跡を、清盛の個性のみに引きつけて理解すべきではない。そこにあるのは家父長としての清盛である。父権の行使により娘は嫁ぎ、妻となりえず制度から排除された女は流浪せざるをえなかった。

脇田晴子は、源平争乱期の結婚形態について、嫁取婚による夫婦同居の結婚形態が一般化し「家」と家族の成立がもたらされた。そして一夫一妻制（厳密には一夫一妻多妾制）によって正妻の座は安定し、それまで分断されていた「母性」「家政能力」「性愛」が理想的建前的には一人の妻に集約されることとなったと説く。男を受け入れた小宰相は小町のようには流浪しなかった。嫉妬の思いを抑えて心を尽くしおかげで、疎まれ棄てられることもなかった。妾として男に殉じた女性像が顕彰される。そこにたとえば『曾我物語』の大磯の虎、『義経記』の静御前に相通じる要素を認めることができよう。遊女あるいは白拍子という身でありながら、ひとりの男に貞節を尽くしたことで、「貞女」としてその名は後の世に残ることとなる。

軍記物語は、女と男との出会いに「色好み」の要素を残しつつも、結果的にはそれを抑圧する。女たちは、その身を賭した生き方を実践することで、戦う男を背後から支える。女たちを描くことで軍記物語は、暴力による他者支配の構造に実は女性も根源的に関わっていたことを明らかにする。「色好み」の衰

退の裏側で、儒教的な教えに沿いながら武士的世界を生きる女性たちが育成される。このことは、次に取り上げる「母性」や「家政能力」が強調される女性像によっても確認できる。

三、女訓といくさ

死を目前にした夫から、「母性」と「家政能力」を求められた妻がいる。『盛衰記』が描く佐奈田与一は、最期を覚悟して、遺児の養育と己の供養という「家」への貢献を第一義とする人生を妻に求める。妻子との別離に恩愛の情を切々と語り、妻に再嫁を勧める平維盛のような男性像の一方で、『盛衰記』は家長としての与一をも描く。こうして残された妻たち、後家として「家」を守り父の遺志を子に継がせる賢母像の代表が、たとえば楠正成の妻、正行の母であろう。父正成の後を追って自害しようとする正行への諫言と、それに励まされての正行の活躍は『太平記』が描くところであり、『本朝女鑑』『比売鑑』といった近世の女訓書、さらには近代の『婦女鑑』も次のような賛辞を贈る。

それより後も母よろづにこゝろを配りてそだてあげ、一族家人をも懇になさけをかけ、るより、正行廿三歳におよびける時、軍をおこして朝敵をうちなびけ、父におとらぬ武略をあらはし、大いに南軍の武威をかがやかし、は、またく母の教訓によれり。

さらに、新たな要素が付け加えられた巴御前の例もある。木曾義仲の妾として戦場に常に付き従った巴は、最期を悟った義仲により戦場を追われる。『盛衰記』はそこに、義仲から巴への説諭のみならず、木曾に残した妻子に自らの最期を語り後世を弔うようにとの願いを加える。巴は主命を忠実に守ったのち、東国で新たな人生を始めることとなる。和田義盛に嫁して男子

を生み、その子に先立たれた巴は、尼となって男たちの後世を弔う。妾でありながら、結果的に「家」に取り込まれ、貢献を余儀なくされる女性像を、『盛衰記』の巴は体現している。母性、性愛、家政能力を相互に補完しつつ、女性たちが「家」の存続に寄与してしまいうがそこに伺える。

ところで、『平家物語』のなかでも本稿がとりわけ『盛衰記』にこだわるのは、この伝本が近世に至って大いに享受されたことによる。その影響は仮名草子女訓物と称される一連の女訓書においても顕著である。この点についてはかつて論じたことがあるのでいまは多くの例を挙げることはしない。一、二を言えれば、明治期に至ってもなお、『婦女鑑』にその事跡を伝えられた土肥実平の妻女に関する挿話は、『盛衰記』に見い出せるものであり、『本朝女鑑』『比売鑑』といった近世の女訓書も記す。『盛衰記』が詳細に記した清盛の娘たちも、『本朝女鑑』が脚色を加えて取り入れ、『比売鑑』も第四女を取り上げる。石橋山合戦で大敗を喫し進退窮まった頼朝らを救ったのは、土肥実平の妻であったと評する。敵の目を眩まして食糧を調達し、かつ戦況を伝えて援軍との合流を可能とした。彼女の内助の功は、近世を経て近代にまで語り継がれる。第四女である冷泉隆房妻女の場合は『盛衰記』が添えた「御子数多御座キ」の一節によって、近世女訓書に採録されたと推測できる。平家滅亡の後も隆房の子孫の四条大納言家が繁栄したのは、彼女の多産が一因であるとする。儒教思想を背景として、女訓書の多くが説くところの「七去」、その筆頭に挙げられる「石女」に相対する女性像である。

ここで確認しておくべきは、女性が「母性」によって尊重される目的である。脇田の言に従えば、「父権を世襲化し、それを継承する子孫を得ること」こそが目指されたのであり、同時

に、「この母性尊重は、女性に対する貞操観の強制をとまっていた」と言える。「貞操」の重視という点から、多くの女訓書がひく『平家物語』が描くところの「袈裟御前」説話を想起することは容易であろう。彼女の死は、盛遠の恋慕の激しさによって危機に瀕した己の所有権が、夫のもとにあることを自らの命を懸けて明らかにした行いと理解できよう。一方『盛衰記』が記す建礼門院徳子の醜聞が、近世初期の『本朝女鑑』においてことごとく否定されたことを思う。安徳天皇の出生に纏わる異聞、実は兄宗盛との近親相姦により生を受けたという醜聞や、生け捕りとなったおりの義経との醜聞を退け、彼女の大原隠棲が実は後白河院の求愛を逃れるためであったという裏話を記す。この記述を、皇統に関わる重大事を忌避するためだけの措置と片づけるべきではない。父権の世襲を揺るぎないものとするために、子どもの父が誰であるのか、男の死後も自分は誰の所有に帰すのか、まさに「貞女二夫に見えず」に徹する女性像を描くことで、『本朝女鑑』は「後家」としての身の処し方を世の女性に示したのではなかったか。

ところで、中世公家的女訓書から近世の儒教的な女訓書への過渡期の作品に、『女郎花物語』がある。この『女郎花物語』には、文禄・慶長頃に成立したと考えられる写本と、万治四年に刊行された版本とがあり、両者の内容は大きく異なる。改編に際して朱子学的倫理の修得が暗に意図されていたとの指摘がなされ、その過程で『盛衰記』が利用された可能性もまた指摘されている。改編によって新たに登場した女性たちには、軍記種の袈裟御前、北条政子、巴、静、そして神功皇后が含まれている。たとえば北条政子や神功皇后は、一条兼良が日野富子に向けて記した啓蒙書『小夜のねざめ』にも取り上げられ、その卓越した能力が評価されている。ただしそれは、頼朝の挙兵と幕

府草創、頼朝亡き後は「尼將軍」と称されるほどの統率力を發揮して將軍の「家」を維持した行い、あるいは新羅征討説話に描かれる戦う母としてのありかたへ、つまりは、夫や家、あるいは国家への貢献度に基づく。神功皇后に関しては、歴史上その存在が注目を浴びる時期として、武家の台頭を反映した八幡信仰の影響や蒙古襲来による外敵との戦いから中世期が挙げられている。新羅征討に際して皇后には応神天皇が宿っており、応神天皇が八幡菩薩と同一視されたことで皇后は、「八万神の母、武神の母」という新たな性格を付与されるに至った。その説話は歴史物語や縁起類、室町時代物語、説話集、謡曲など中世期のさまざまなジャンルが描くところであり、『平家物語』や『太平記』、真字本『曾我物語』といった軍記物語も例外ではない。近世の女訓書にあっても神功皇后説話は絶えることなく、近代に至っても「神功皇后札一円券」以降その表象が使われた。若桑みどりは、明治期における神功皇后の表象に、「国家的母性（戦士の母）」という、国策上もつとも重要な女性規範が埋め込まれたと指摘する。同時に、明治のはじめから中頃にかけて紙幣や絵画が神功皇后を描いたいまひとつの理由を、美子皇后との関係、すなわち「皇后像の神格化」という政治的意図に求める。目指すは新たな国家建設に臨んでの女性の国民化であり、結果的には家父長制の再強化と国体の護持であったと結論づけている。

軍記物語が描く女性をめぐる挿話を、たとえば「叙情性」という評語に収斂させ、叙事と叙情による作品内の均衡の問題へと還元する理解がある。おそらくそれは、恋愛あるいは夫婦愛に纏わる内容、和歌などを含んだ和文調の文体に由来するのだろう。だが、男女のありかた、その関係性がいかに描かれているかをまずは問うべきではないか。軍記物語が戦う男を描くも

のである以上、そこには男を送り出す女、残されて生き続ける女がいる。そして戦時でなくとも、「家」存続のために夫を支え、子孫を生み育み、家族の安寧に努める女性は必要とされた。女訓書の世界が繰り返し軍記物語の女性像を取り込む理由のひとつは、いまここに必要な女性像を提示することによってその育成を図ることにある。「三従」という語に象徴的な儒教思想に従う生き方が、生死に関わる戦という状況下でいつそうの純化を遂げる。軍記物語と女訓書の近接は、そうした武士的世界に求められる女性の生き方を、より広い層へと浸透させる可能性をもたらすものではなかったか。

四、女訓書の領域

女訓書と称される作品はどのような内容から成っているのだろうか。歴史上の人物に纏わる挿話を通して教訓を垂れたり、女性として身につけておくべき教養や芸能、対人関係を円滑に進めるための処世術、身体の養生に関わる注意事項など、内容は多様である。ただしここで留意しておきたいのは、王朝物語との間にどのような関係をどの程度の距離で結んでいるかという尺度によって、中世の女訓書を大別できるということである。美濃部は、「女訓書の出発点となる伝阿仏尼作の『にはのをしへ』」と「仮名草子として扱われる『女訓抄』」とがその二様の代表であるとして、前者は「王朝物語を内なるものとする精神」によって、後者は「王朝物語の外側に位置する」立場によって、書かれたものであるとの展望を示した。前者は「今この存在であると同時に彼方の世界にも身を置く者として、物語を生き物語にそして物語の」主要な登場人物に仕える精神によって、後者は「今このことという歴史社会の日常を生きる者であり、現実に繋がれながらも物語の世界を」求める精神によって、そ

れぞれ成立する作品世界であるという。この展望からすれば、軍記物語の女訓的要素が、後者に繋がる性質のものであることは明らかだろう。このことは、『女訓抄』の作品世界に軍記物語に相通じるところの中国種の説話が取り込まれ、その結果として貞女像のみならず烈女像までもが登場すること、あるいは、儒教的な言辞が織り込まれることによっても確認できる。たとえばお伽草子『乳母の草紙』は、左大臣のふたりの姫君の教育を任された乳母たちの対照的な姿を通して、女性にとつての望ましい教養の中身が『源氏物語』『狭衣物語』に象徴される王朝の物語世界を背景とした古典的教養であることを示す。平家琵琶の腕前を自慢する乳母の教育方針が左大臣によつて退けられることで、芸能としての平家琵琶、そしてそれを生み出した軍記物語も、女性向けの教養としては劣つたものとの評価が明らかとなる。前述の女訓書のふたつの流れのうち、軍記物語が前者に連なり得ないことは明らかである。軍記物語は描くところの恋愛譚を介して王朝の物語世界を再現しているわけではない。問われるべきはそこに意図された戦略、それを覆い隠す仕掛けである。

へ色好み〴〵的世界を装う場面に巧まれた仕掛け、その重要な要素は和歌であろう。すでに指摘したところであるが、軍記物語はそのジャンル名から連想されるところとは異なり、『平家物語』や『太平記』をはじめとして、多くの和歌および和歌に関する素材を有している。弓削繁は『盛衰記』が多くの和歌を引くこと、その多くが人口に膾炙していた名歌であり何らかの説話や伝承を伴うものであることを指摘する。そして、「一見総花的、平面的で集約性欠いて弛緩しているかに見える」『盛衰記』の世界が、南北朝や室町期の時代相になつていたのでないかと推測し、そうした傾向は『太平記』にもあることを指

摘する。久保田淳は、『太平記』にも古歌が多く含まれていることを指摘し、和漢の故事を豊富に引用するところに啓蒙の意図を認める。軍記物語が有する和歌および和歌的素材へのこうした関心は、軍記物語から和歌を抜き出して一書とした作品や歌徳を説く挿話を紹介して作歌を勧め、詠歌上の注意事項にも配慮した和歌説話集に認めることができる。『和歌威徳物語』『和歌徳』などを繙けば、出典として軍記物語が利用されたことが知られる。軍記物語を、その総体ではなくいまの要求に応じて解体し、己の興味に供する者たちがいた。女訓書の作成を目論んだ者のなかにも、そうした享受のありかたを試みる者がいた。たとえば貞女烈婦の和歌とそれにまつわる挿話を要約して添えた『烈女百人一首』には、約一割に及ぶ一首の軍記種の女性が採録されている。

女訓書の世界では情操教育の一環および男女の仲を円滑に運ぶ手段として和歌の重要性が説かれ、それは必須の教養とされてきた。初心者にはまず評価の定まった名歌を学び、国々の名所や季節の推移、植物に関する知識を育成させるといふ教育的観点から、歌枕の学習を勧める。『乳母の草紙』のなかで望ましい教育係とされた乳母は、和歌を詠む上での心構えを、「歌の趣、夜の鶴に細かに見へ申候。御覧じ候へ。又、古今、新古今の歌、よく覚へさせ給へ」としている。作歌上の心得を初心者向けに説いた阿仏尼の手になる『夜の鶴』を挙げるとともに、勅撰集を熟読し味わうことの必要性を指摘する。こうした女訓書の方針は、和歌および和歌的素材を介しての軍記物語への近接を可能にする。もちろん、女訓書は和歌および和歌的素材によつてのみ成立しているわけではない。いま試みに、『女訓抄』を例にその構成および作品世界を一覧してみよう。まず、一〇の項目を立てて論と説話をあわせもつ形態から、中世の説話

集『十訓抄』が思い浮かぶ。論に説話を援用する点は伝一条兼良作の教訓書『寢覚記』の体裁に近いとの指摘がある。説話の典拠および類話に関しては、『宝物集』『今昔物語集』『十訓抄』といった説話集、『平家物語』『曾我物語』といった軍記物語、『和漢朗詠集』や『白氏文集』といった詩歌集、『朗詠注』『蒙求注』『古今注』『伊勢注』といった中世の注釈書に連なるところにある。なかでも注目すべきは『因縁抄』との関係であろう。一〇を越える類話の存在、展開の類似性から『因縁抄』が『女訓抄』の影響下に成立した可能性は高い。この事実は何を意味するのか。かりに『女訓抄』という書名を剥ぎ取り、六〇歳を迎えて出産した女性が娘の行く末に向けて書き残す教訓であるとの序文の断りを除けば、それは説話集として流通しうるだろう。重要なのは作品世界が「女訓書」として立ち上がり、流通し享受されるということである。明確な方向性を帯びたメッセージが日常に浸透していく。そうした現場を思い描くとき、軍記物語の存在は女訓書というジャンルの根幹に影響を与えるものではなかったか。

かつて指摘したことであるが、『平家物語』『太平記』『曾我物語』といった軍記物語は婚礼のお道具とされることがあった。『伊勢物語』や『源氏物語』、あるいは勅撰集といった仮名書きによる王朝の文学作品が、いわゆる「嫁入り本」として仕立てられたことはよく知られている。だが、和漢混淆文に代表される多くは漢字仮名交じりの軍記物語もまた、婚礼のお道具とされたことに注目したい。『盛衰記』にあっても装丁などから嫁入り本と推測される写本が存在する。慶長古活字版系の本文の写しと考えられている近衛本の場合、ほとんどが平仮名書きで漢字が極端に少ない。こうした現象は何を意味するのか。女性による享受を指摘することは容易である。だが同時に、そ

れが婚礼にふさわしい書物として詠えられた事実にはこだわらざるべきではないか。平仮名書きという形態を読者層としての女性に結び付けるだけで済ませてはならない。嫁ぐ女性が読むにふさわしいという世の価値観、お道具として装われたことが重要である。たとえば貝桶が婚礼道具の第一であることには、一対というその形態から再嫁を忌む呪いと戒めの意味が込められている。人はそこから何を学べと女性に迫ったのか。女訓書の存在を介在させることで、軍記物語が女性教育に及ぼす戦略の一端は明らかだろう。それは、儒教的な思想に基づいて、夫ひいては家に献身を強いる教えを内包している。和歌および和文には、そうした教えに王朝風の装いをもたらず仕掛けとしてのほたらきを認めることができる。

五、まとめ

近代のはじめ、「国文学史」を立ち上げようと試みた芳賀矢一は、「国民性十論」「一、忠君愛国」において武士道の忠義を最も認めうるものとして軍記物語を挙げる。デイヴィッド・バイアロックは、「この評論を端緒として、忠義という武士の倫理を、天皇と国家に対する忠誠として定義し直す動きが始まった」と位置付けた。ここで確認したいのは芳賀にこうした発言を行わせた政治的背景である。たとえば、明治五年に起こった徴兵令頒布という出来事を想起することは不当ではないだろう。国民は皆兵として元帥である天皇の指揮に従うという新国家建設に伴う制度の誕生に際して、軍記物語の世界は範となりうる人材を抱えていた。芳賀は同時に国民が自国の文学史を知ることの重要性を提唱し、その構築にあたっては『平家物語』等で達成された和漢混淆文の優秀性を評価する。王朝の和文という「女性的」な基盤を吸収し昇華させた中・近世期の文学の

もつ力強く「男性的」な面を「国文学（および国家）」の進歩として理解し強調した。明治という新国家の成立が文学のジャンルと文体にもたらした評価のありように目を向けるとき、国民の半数を占める女性教育にあたって、それ以前の女訓書の世界を介して軍記物語への目配りがなされたことは十分理解できよう。もちろん明治期にあっても中世以来の女訓書の系譜はふたつながらともに受け継がれていた。たとえば前者に属する『仮名教訓』、明応四年に三条西実隆が嫁ぎ行く娘に宛てた消息とされるこの女訓書を始祖とする消息型女訓書のひとつである『からすまる帖』は、明治二五年刊行本に至るまで一二部が知られる。題名や内容に変動を生じながらも刊行が継続されたことに、中世から近代に連なる女訓書の重層的世界が確認できることも事実である。ただ見逃してならないのは、近代の幕開けに臨んで、文学史上の要請からも、軍記物語というジャンルが注目を浴びる状況が出来たことである。

美子皇后の命を受けて編纂された『婦女鑑』に軍記種の女性像が採録されたのは、故なきことではなかった。明治という新国家建設に際して試みられる女性教育の一相が、軍記物語という作品世界が抱える政治的思惑を浮かび上げさせる。軍記物語は戦なくしては成立しない。そしてその戦は戦う男とそれを支える女の関係性を抜きにしては語りえない。身を挺して夫や子、家や国に尽くせという教えのなかに、家父長制を背景とした力による支配を議論む戦略が見え隠れする。死に直面する緊迫した状況下だからこそ、それぞれのありかたはより鮮明な像を結ぶ。軍記物語の女性たちは時を超えて「献身の美德」へと人々を誘う。伝阿仏尼作『にはのをしへ』に始まるとされる女訓書が軍記物語との近接を試みたとき、女性が学ぶことに表現を与えるうえでひとつの転機が訪れた。女訓書の分派に繋がる

結節点に軍記物語の存在は欠かせない。女訓という視点は、軍記物語というジャンル、さらには文学史のなかでこれまで見過ごしてきたもの、見過ごすようしむけられてきたことに光を当てる。そこに覆い隠された問題性と政治性を顕在化させること、その可能性をもたらすこの視点に、われわれはもっと敏感であるべきではないのか。

注

- 1、『婦女鑑』の成立および受容に関しては若桑みどり「皇后の肖像 昭憲皇太后の表象と女性の国民化」（二〇〇一年、筑摩書房）第三章「皇后のモラルー女訓書と儒教」によった。
- 2、『婦女鑑』本文は奈良女子大学電子図書館画像原文により私に書き下した。
- 3、関口すみ子「『女四書』と近代日本」（『季刊 日本思想史』、二〇〇一年九月）。
- 4、若桑みどり前掲書第三章「皇后のモラルー女訓書と儒教」。
- 5、美濃部重克「テキスト・祭り　そして女ーお伽草子の論ー」（『国語と国文学』一九九二年五月）。
- 6、美濃部前掲論文。
- 7、今関敏子「へ色好み」の系譜　わたちのゆくえ」（世界思想社、一九九六年）、「へ色好み」の流浪ー小　野小町の運命」（『文学』二〇〇二年一月・二月号）。
- 8、『源平盛衰記』本文の引用は慶長古活字版により、私に句読点、濁点を施した。
- 9、中島美幸「平家物語を読むー女性の物語をとおしてー」（『平家物語研究と批評』一九九六年、有精堂）。
- 10、脇田晴子「中世に生きる女たち」（一九九五年、岩波書店）。
- 11、神原千鶴「よみものとしての『源平盛衰記』」（『平家物語 創造と享

- 受」一九九八年、三弥井書店）所収。
- 12、脇田晴子「中世における性別役割分担と女性観」（『日本女性史 第二卷中世』一九八二年、東京大 学出版会）所収。
- 13、渡辺守邦「女郎花物語」考―写本における典拠と女訓など―（『大妻国文』一九七一年三月）。
- 14、森山茂「女郎花物語の諸問題―出典攷を中心として―」（『国文学攷』一九六二年三月）、「女郎花物語 語の諸本について―天理図書館蔵写本と万治四年刊行本―」（『国文学攷』一九六七年十一月）。
- 15、多田圭子「中世における神功皇后像の展開―縁起から『太平記』へ―」（『国文目白』一九九一年一月）。
- 16、多田前掲論文。
- 17、若桑前掲書第六章「皇后像の神話化」。
- 18、若桑前掲書第六章「皇后像の神話化」。
- 19、とくに近世期に成立した女訓書に関しては青山忠一「仮名草子女訓文芸の研究」（一九八二年、桜楓 社）がその概要をまとめている。
- 20、美濃部前掲論文。
- 21、美濃部前掲論文。
- 22、「女訓抄」の内容と特質については美濃部重克「天理本『女訓抄』論―お伽草子論に視座を置いて―」（『説話論集第八集』、一九九八年、清文堂）がまとめを記している。
- 23、榊原前掲論文。
- 24、弓削繁「平家物語の和歌に関する一報告」（『名古屋軍記物語研究会会報』一九七三年五月）。
- 25、久保田淳「平家物語と和歌」（『国文学 解釈と鑑賞』一九六七年九月）。
- 26、「盛衰記」の場合、たとえば『太平記夏哥』と題された書でありながら中身は『盛衰記』中の和歌を 抜き書きしたものなどがあり、流布本『平家物語』にあっては和歌の抜書の実態は夙に説かれている。

- 27、「乳母の草紙」本文の引用は『新日本古典文学大系 室町物語集下』所収本文により、括弧は私意に よりのぞいた。
- 28、美濃部前掲論文。
- 29、阿部泰郎「因縁抄」（一九八八、古典文庫年）に付された説話番号によって示せば、一、二、三、四、五、六、七、八、四四、四六、四七、四八、五五の各条。
- 30、「因縁抄」四「貞女ノ事」において、「なよ竹物語」を引いた後「ヨキ女」の満たすべき三要素として「ミメ形、フルマイ、心ヅカイ」の良いことを挙げる展開は「女訓抄」と同様である。
- 31、「女訓抄」と「因縁抄」の関係については、すでに美濃部前掲論文にも指摘がある。
- 32、榊原前掲論文。たとえば寛政五年（一七九三）刊「婚礼道具図集」「書物寸法」の項には「吾妻鏡」「源平盛衰記」「太平記」「太平記」「曾我物語」といった書名が記されている。
- 33、「貝桶」を婚礼の第一の道具にすることについて「貞丈雑記」には、「貞女両夫に見えず」という儒 教的道徳を背景に、一対というその形態から再嫁を忌む呪いと戒めの意味を説いている。
- 34、デイヴィッド・バイアロック「国民的叙事詩の発見―近代の古典としての『平家物語』」（ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典―カノン形成 国民国家 日本文学』一九九九年、新曜社）所 収。
- 35、ハルオ・シラネ「総説 創造された古典―カノン形成のパラダイムと批評的展望―」（ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典―カノン形成 国民国家 日本文学』一九九九年、新曜社）所 収。
- 36、「日本教科書大系 往来編 第十五卷 女子用」（一九七三年、講談社）解説・解題。
- 「婦女鑑」の本文を提供していただいた奈良女子大学電子図書館にお礼申し上げます。

虎と遊女たち

一、はじめに

室町期に広く流布したと考えられる女性に向けての教訓書『女訓抄』には、家女と遊女を「前栽の花」と「名所の花」とに見立て、その違いを説いたくだりがある。遊女に心惹かれ、熱に浮かされる男に憤り、別離に走る妻女の短慮を戒めるなかで、遊女の本性を次のように説く。

ゆふ女のおとこをおどらかさる、心のうちは、たゞ小袖直垂に心をかけて、や、もすれば、今はくれよかしと思へるいろ、忍ぶとすれどあらはれて、そこおそろしく成ぬれば、けうさむることほどもなし。

遊女が内心狙っているのは、男の愛情ではなく懐であると言う。中世期、一般に思い描かれていたこうした遊女像を思うとき、『曾我物語』が描く遊女たちは、その本性を越えた女性のありかたを体現している。

『曾我物語』は、虎をはじめとする遊女たちを通して、どのような女性像を提示したのか。本稿では「女訓」という視点から、とくに仮名本『曾我物語』の一面を考えてみたい。

二、遊女の身上

曾我兄弟亡き後、出家をした虎が手越の少将のもとを訪れたおり、少将は遊女の有り様を次のように語る。

人は、五障三従の罪ふかしと申に、おなじ女人といひながら、我らは、罪ふかき身なり。その故は、たゞ一生、人をたぶらかさんとおもふ計なれば、心をゆききの人にかけ、身を上下の輩にまかす。(巻第十二「少将出家の事」)

五障三従という女性に課せられた桎梏に加え、男を誑かす日々

の営みが、遊女たちをさらなる罪深き者へと追い込む。情愛よりも金銭になびく遊女の身上がそこに示される。こうした遊女観は、先の『女訓抄』、あるいはまた、化粧坂の遊女に会えない理由を、梶原源太への心変わりによるものと早合点した五郎の自慰の思いにも相通じよう。「ながれをたつる遊び者」である遊女を「たのむべき」ではない。にもかかわらず情をかけた己が受け入れられないのは、詰まるところ不如意ゆえであり、たしかに「貧は諸道のさまたげ」である、と五郎はその現実を受け止めようとする。

ここで留意すべきは、『曾我物語』が描く遊女たちは、男たちとの出会いと別れを通じて、遊女としての境涯に決別する道を選択した点である。五郎の嘆きの歌に接して、化粧坂の遊女は来世への思いを募らせ、出家へと向かう。虎もまた、十郎亡き後、他の男に身を任せねばならない遊女の身を疎み、出家し十郎の菩提を弔う。手越の少将は、虎の姿を「善知識」として同じく出家の道を選ぶ。大切なのは、金銭に執着する遊女という境涯から脱し、彼女たちがひとりの女性に戻る点である。結果、そのありかたは、広く女性たちに通じる普遍性をもつこととなる。もはや、家女と遊女という対立の構図をもとに、女性を二分し比べ競わすことはできない。彼女たちは等しく、「五障三従の罪ふかき身」を背負う女性であり、男とのかかわりあいのなかで、自らの生き方を思い定める存在となる。したがってそこに、すなわち彼女たちのありかたに、「女訓」という役割を付与することが可能となろう。

たとえば虎は、十郎との出会いによって、遊女としての身上を逸脱し始めている。ふたりの情交がすでに「三年」に及ぶことを、物語は繰り返し記す。本来「一夜の妻」であるはずの遊女のありかたに、それは納まらない。この「三年」という歲月

を、史実に還元して理解する必要はないだろう。おそらくそれは、「みとせの懸想」と称されるような、男女の情愛にあつてひとつの目安となる年数をふまえた表現と推測できる。そもそも、王朝の物語世界以来、男女の間にあつての「三年」とは、男の求愛の期間、あるいは、男の不在により改嫁が許容されるまでの期間として認識され、描かれてきた。「三年」という時の経過が、男の誠意を、あるいは心変わりを、さらには男への女の思いの度合いを明らかにする。虎と十郎の場合は、懸想ではなく、慣れ親しんだ期間として提示されてはいるものの、そこに示されるのは、「千代万世」を契るお互いの「心ざしのふかさ」である。「曾我物語」は、そうした王朝の物語世界における相思相愛の男女像を、虎と十郎の上に重ねようとする。

巻第六「大磯の盃論の事」の一場面はどうだろうか。敵討ちを前にして、虎に暇を告げようと大磯を訪れた十郎は、近国の大名たちの一行を目にして、虎の真情を疑う。遊女という「ながれをたつるあそび者」である虎が、他の男にも思いをかけるのではないかと不安になり、秘かに虎の様子を覗き見る。だが、そこで目にしたのは、十分な武具や装束を調えられない十郎を思い遣り、その調達に心を痛める虎の姿であつた。ここに至つて十郎は、改めて虎の情愛の深さを思い知り、さらなる深い絆を結ぶことになる。この、垣間見を経て女の愛情を再確認するという設定は、「風吹けば沖つ白波たつた山」の歌をもつてする『伊勢物語』二三段に相通じるものと言えよう。そして、同種の設定は、『源平盛衰記』における源義経と平時忠女の別れの場面などにも見受けられ、軍記物語の世界に王朝の色好みの要素を漂わせるのに一役買っていることについては、かつて指摘したことがある。『曾我物語』が描き出すのは、相思相愛の男女像であり、虎のなかに、貧しさを疎む遊女の本性は、疾う

に失われている。

後のものであるが、浅井了意の作かとも言われる近世初期成立の女訓書『本朝女鑑』は、生前の十郎と虎との情愛を物語るものとして、まさにこの場面をひいている。そして、十郎亡き後の虎の後日談を添えて、次のような評言とともに、彼女を「貞女」の項に配する。

遊君のならひ、往来の人にあひなれて、夜毎にかはる新枕、流る、水の定めなきものなるに、貞女の道を行ひける心ざしこそありがたけれど、みな人あはれに覚えしとかや。

遊女である虎に、「二夫に見えず」とうたわれる「貞女」像を見る。『曾我物語』における女性像の享受の一端がここに伺える。後述するように、男との出会いによって、虎は「貞女」の仲間入りを果たす。男を支え、男に尽くし、その本懐を遂げさせる。男の愛情を受けるにふさわしい女性像がそこにある。『曾我物語』の世界に、女性のあるべき姿を認め、そこから教訓を引き出そうとする享受の有り様を見逃してはならない。

三、教養

『曾我物語』は、遊女たちの美点をどのように描いているのだろうか。虎や化粧坂の遊女の場合、和歌の素養が特筆されていることに注目したい。化粧坂の遊女をめぐって、五郎の恋敵という役割を演じることとなった梶原景季が彼女を思い初めたのは、彼女の詠みかけた歌がきっかけであつた。刀を忘れた景季に、和歌をもつてそれと知らせた振るまいが、景季の心を捉えた。しかもここでの景季は、「歌道には、定家・家隆なりともおもひしなり」と、自らの和歌の才を誇る者である。その景季に「歌のおもしろさ」を認められたことで、彼女の和歌の才も、非凡なものであることが暗に示されていると言えよう。し

たがって、「もとより此女の心ざま、尋常にして、歌の道にもやさし」と評される彼女の出家は、景季を嘆かせた。

一方、虎の場合はどうであろうか。たとえば、なかなか訪れない十郎を思い、涙に暮れる夕暮れ、ふと耳にしたほととぎすの一声に、「夏山になくほととぎす心あらばものおもふ身に声なきかせそ」（古今和歌集・夏歌）の一首を思わず口にする場面がある。その場の情景と心情にふさわしい「古歌」を思い出すところに、彼女の「教養」の程を認めることができよう。

虎が心ざま、尋常にして、和歌の道に心をよせ、人丸・赤人の跡をたづね、業平・源氏の物語に情をたづさへ、春は、花の梢にちりまがふ霞がくれの天つ雁、雲あの上心に心をのこし、秋は、月の前にくもらぬ時雨の夜嵐に、あけゆく雲のうき枕、鹿の音ちかき虫の声、あはれをもよほす小田守の、庵さびしさまでも、心をやらぬ方はなし。

（巻第四「虎を具して、曾我へゆきし事」）
そして虎は、和歌のみならず、『伊勢物語』や『源氏物語』といった王朝の物語世界にも馴染み、季節の移ろいを捉える感受性に優れていたと言う。出家後に構えた庵室の描写にも、「浄土の三部経、往生要集、八軸の一乗妙典」の傍らに、「古今、万葉、伊勢物語、狂言綺語の草子共」もまた置かれていたと記される。

ところで、化粧坂の女、虎、いずれにあっても美点とされるこうした教養は、『にはのをしへ』に始まるとされる女訓書の世界にあつて、常に女性に求められてきたところと実は重なる。女訓書の世界が、女性にとつての望ましい教養として挙げる諸々は、たとえば『女訓抄』巻第四「第八 芸のあるべき事」の項によつて、そのおおよそを伺うことができようか。そこには、歌道、和歌の五意・四病・六義、八代集、連歌の式目、長歌、

伊勢物語、手跡、名筆、管弦といった事柄に関する基本的知識が取り上げられている。たとえば、『曾我物語』巻第五「五郎、女に情かけし事」において、五郎の残した一首をきつかけとして、化粧坂の遊女が述べる和歌の効用と、つづく「巢父・許由が事」「貞女が事」「鴛鴦の剣羽の事」の章段で展開される挿話は、『曾我物語』にみる女訓的要素を測る上で重要であり、『女訓抄』の世界にも実は重なる。

たとえば『曾我物語』には、「伊勢物語の秘事」という表現、あるいは、「家隆卿のいひけるなり」として示される「伊勢物語知頭抄」の存在が端的に示すとおり、『伊勢物語』そのものよりも、その古注釈が影響を与えている。この傾向は、『古今集』の場合にも、あてはまることは、すでに先学の指摘するところである。一方、『女訓抄』にも、『伊勢物語』の秘事に言及するくだりがあり、書名の由来や、「いせや日向の物語」という慣用表現のもととなった挿話が記されている。この挿話は、『伊勢物語』そのものではなく、「伊勢物語知頭抄」に見られるものである。このように、古注釈の世界をも取り込む形で、「教養」の内実を形作る傾向が両書に指摘できる。

加えて、『女訓抄』には、梶原景季にまつわる挿話として、その妻女が頼朝と歌を詠み交わし、頼朝が興を催したことがあり、後日、景季が妻女を放そうとしたおり、頼朝がその出来事を思い出して、ふたりの仲を取り持ったという歌徳説話がある。武士でありながら和歌に造詣の深い代表的人物として、梶原景季を登場させ、妻女は和歌の才によつて景季に見捨てられずに済んだと結ぶ。和歌という「芸能」の力が、いかに女性の身を助けうるか。その実践の場に登場する景季像は、『曾我物語』のそれに相通じよう。

四、貞女

巻第五「貞女が事」「鴛鴦の剣羽の事」の章段で、化粧坂の遊女が語る挿話は、実は『女訓抄』にも見い出せるものでもあった。『曾我物語』では、王が臣下の妻女に横恋慕をし、自分のものとしたものの、妻女は男を慕い続ける。怒った王は男を捕らえ、その面相を変えてしまう。しかし妻女はその醜を疎んじることなく、思慕の思いを抱き続けたので、王は男を淵に沈めてしまう。男の死を知った妻女は、最期の場を訪れたいと望み、衆目の中、淵に飛び込み後を追った。やがてこの淵に赤い石がふたつ生じ、それを見に出かけた王は、石の上のいたつがいの鴛鴦の剣羽によって殺された、という次第である。『拾遺和歌集』(別)所収歌「別る、をおしとぞ思つる木はの身をよりにくたく心地のみして」に詠まれる「鴛鴦の剣羽」にまつわる挿話である。小異はあるものの、ほぼ同種の内容を『女訓抄』が記している。

『曾我物語』はこの挿話に続けて、
貞女両夫にまみえずとは、この女の事なり。いかなる貞女か、二人の夫に見へし、いかなる身にてか、ひく手あまたにむまれつらん。さらぬだに、われら風情の者は、欲心にすまひすると、いひならはせり。

との化粧坂の遊女の言を記す。一方、『女訓抄』は、
貞女二夫にとつがずといふ、此ことほり也。かやうに心ざしふか、らん女をば、いかならん男か、おろかに思ふべきや。たとひ遠ざかる男なりとも、心ながくもみるべし、と覚ゆることあり。

との評言をもって結ぶ。いずれもが、「貞女両夫に見えず」という教えに収斂していく。ここに至って、『曾我物語』のなかに、女訓書の側面を積極的に読みとることの妥当性が理解され

よう。『女訓抄』は、男へのこうした深い思いを抱く女性であるならば、男に軽んじられることはないであろう。かりに、男がそのもとを離れたと言っても、女は気長に見守るべきであるとして、嫉妬を戒める。『曾我物語』では、化粧坂の遊女は遁世の思いを強くし、来世への憧憬から出家を果たす。いずれも、男への一途な思いに価値を置き、二夫に見える生き方を退ける。『曾我物語』の場合は、描く女性像が遊女であるため、家庭内の安寧を図る教訓へ向かうことはない。だが、十郎・五郎との出会いを経て、彼女たちはいわゆる儒教的思想を背景とする「貞女」へと向かうこととなる。

五、まとめ

『曾我物語』の伝本の一つである太山寺本には、先の剣羽説話は含まれてはいないものの、その伝来の経緯は、女性による享受という面から興味深い事実を伝えている。すなわち太山寺本は、明石長行の亡妻・善室昌慶禪定尼の一周忌にちなんで、太山寺に奉納された彼女の愛読書―一部の中の一とつであつた。しかもこの一部は、同一人の手にかかるもので、おそらくは輿入れの際に持参されたものと推測されている。残る一部とは、『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『玉葉和歌集』『秋篠月清集』『明題和歌集』『和漢朗詠集』『伊勢物語』『平家物語』であるという。歌集、および歌物語とともに、軍記物語の名をそこに見い出すことができる。後の史料であるが、寛政五年(一七九三)刊『婚礼道具図集』「書物寸法」の項には、『源平盛衰記』『吾妻鑑』『太平記』などとともに『曾我物語』の書名も見え、軍記物語の類は、婚礼にあふさわしい書物として広く受け入れられていた。

たとえば、婚礼に際しての第一の道具に「貝桶」が挙げられ

る理由を『貞丈雑記』は、「貞女二夫に見えず」という儒教的道徳を背景に、一対というその形態から、再嫁を忌む呪いと戒めの意味から説いている。そして、『平家物語』なかでも『源平盛衰記』が描く女性像に、手本として女訓のはたらしを担い、うる側面があることは、かつて指摘したことがある。『曾我物語』、とりわけ仮名本にあっても、そうした女訓書としての要素は十分に見いだせる。『曾我物語』の場合、遊女たちに、家の存続とその安寧に殉じる役割を与えることはできない。だが、男との出会いを契機として、彼女たちは「貞女」へと変貌を遂げる。男の情愛を受けるにふさわしい教養の内実と、「貞女」としてのありかたを提示することで、『曾我物語』の女性たちは、「あるべき女性像」の一端を体現していると言えるのではないか。

注

- 1、『女訓抄』の成立時期およびその内容については、青山忠一氏『仮名草子女訓文芸の研究』(『三女訓抄』(一九八二年、桜楓社)、美濃部重克氏「テキスト・祭り」そして「女訓―お伽草子の論―」(『国語と国文学』一九九二年五月)。
- 2、『女訓抄』本文はの引用は、徳国文庫所蔵本により、私に濁点・句読点を施した。
- 3、『曾我物語』本文の引用は、日本古典文学大系新装版(底本十行古活字本)による。
- 4、三角洋一氏「みとせの懸想―とはずがたり覚書―」(『高知大学学術研究報告』一九七七年一〇月)。
- 5、榊原千鶴「よみものとしての『源平盛衰記』」(『平家物語

創造と享受」一九九八年、三弥井書店)。
6、内容及び作者については、青山氏前掲書「八 本朝女鑑」。
7、『本朝女鑑』の引用は、日本教育文庫本による。
8、片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題一』「序 本書の意図、本巻の意図」(一九七一年、赤尾照文堂)。

- 9、『三國物語』一「第三 天竺の于名夫婦、ちぎり、ふかき事」にも同種の挿話のあることを、三浦俊介氏よりご教示いただいた。
- 10、村上美登志氏『太山寺本曾我物語』「解説」(一九九九年、和泉書院)。
- 11、榊原前掲論文。

『女訓抄』の本文を提供していただいた徳国文庫にお礼申し上げます。

徳国文庫所蔵『女訓抄』

凡例

- 一、底本には徳国文庫所蔵本を用いた。
- 二、底本は漢字・平仮名交じりなので、翻刻に際してはその表記に従ったが、変体仮名や異体字・旧字体は、原則として通行のものに改めた。
(例) 躰 ↓ 体 寶 ↓ 宝
- 三、歴史的仮名遣いは、底本の表記に従った。
- 四、通読の便を考え、本文には振り漢字を施した。その際、脱箇所への振り漢字は、() に入れて、誤りを正して振った。
- 五、句読点は、校訂者が加えた。
- 六、段落分けは、校訂者の私見によった。
- 七、和歌は二字下げとした。
- 八、本文中の不審な箇所、および、他意の箇所については、寛永一六年古活字版大東急記念文庫所蔵本、寛永一九年整版本、大阪女子大学所蔵写本を適宜参照し、①、②、③・

・・・の番号を付して、校異として巻末に一括して掲げた。略号は次の通りである。

(古) || 寛永一六年古活字版 (整) || 寛永一九年整版
(大) || 大阪女子大写本

『女訓抄』の本文を提供していただいた徳国文庫、大阪女子大学にお礼申し上げます。

女訓抄

女訓抄序

はしめ、てんしやう人ちうより、山野の鳥けた物、かうかのうろくつ、ろふきもんまうにいたるまで、子を思ふ道にまよはずといふ事なし。春の野への雉子は、すの内のかいこをいたきで、野火のために身をこかし、ふやうかうのさるは、いとけなき子をおしみて、れうしやの舟におつ。よるの鶴は、子を思ひてこの内に鳴。としよのひつしは、子の別を、奔のほかにかなしみ、しかのみならず、いへをうかつす、め、うつはりにすむつはめ、かるもをかくふすい、とくをひくくんきう、そうして、いきとしいける物は、かたちことなれ共、心さしはちかはさるへし。いはんや、人として、いかてかおろかならん。然るに、唐の太宗皇帝は、ていはん十二へんにのへ、藤原の兼輔の中なこんは、わこん三十一字あらはしき。

昔と今とは、ことにふんくわへたつといへ共、思ひは同じかるへきを、こゝに、花たちはなのかをり、やうやくおとろへ、谷のむもれ木となれる梢あるより、よはひ六十に成て、ひとりの子をまうけたり。しかれ共、五しやう三しうのかなしみを、備へたる身となれり。老の命こしかたければ、けうくんをき、しるまでのたのみなければ、せめて思ひのせつなるまゝに、きやうくう有へきことほりを、かきをかんとすれば、又けいせつこうあさく、筆のうみもそこしらす。いたましきかな、た、あひしのために、恥をすつるのみにあらず、物思ひを後代にのこさん事よ。たとい又、さもあらはあれ、国土をおさむる王位、

なを末代のとくを太子にをしへ給ふ。しやうゑんたへたるとんこうにんは、いかてかゑいねんのまよひを、やうしにしらせざるへき。心さしのもよほすにまかせて、をしへをくはかり也。人に上中下三つの義有。上こんの人は、をしへをまたすしてさとる。中こんの人は、教にしたかひてしる。下こんの者は、をしゆれ共さとらすときく。上智ならば申に及はず。下愚ならばいふにかひなし。中こんならば、つねにまなひて忘され。もし上智なり共、心にふかく入すは、然るへからず。又下愚なり共、心さしねん比ならば、心えつへし。ふかきことは、心とをれば、女の身として、こと／＼くしりかたき間、先四たいのくるしみを、はし／＼あらはして、世にしたかふ人に、ともなはん中立ちにせよ、とみる物きく物について、心をえさせんいろはとす。まかり木は、なわをかけてすくなをり、にふきかたなは、とくによりてたつ事をえたり。麻の中のものもきは、ためさるにをるならひあれは、ことはの内に、をのつからもちひる事なからんや。此うへひめもすに、心のひまなく、よもすから思ひにもねられず。いとけなきほとは、こくひやくの二しをわきまへす、心にいらね共、年たけ、成長せんについて、其あと、ゆかしく思ひ出ん時、ふるきほうこの中より、もとめいたして、めやすくみせんとして、しとけなきかなにかきをく。これをなつけて、女訓抄といふ。

- 第一 四たう八くの事
- 第二 五しやう三しうの事
- 第三 けいしをかへりみる事
- 第四 しようふちの事
- 第五 しんたいをおさむへき事
- 第六 しゆくんにつかふへき事

- 第七 友にましはるへき事
- 第八 けいのふあるへき事
- 第九 こけのふるまひの事
- 第十 こしやうせんしよの事

四たう八くの事

女訓抄卷一目録

- 第一 四たう八くの事の内
- 一 はんなんしん廿二さいにて老をさとり同詩哥の事
- 二 かんしんひはいしんの事
- 三 老子出生の事 付商山の四皓の事 并因果経を引事

第二 五しやう三しうの事の内

- 一 父母のおんふかき事
- 二 ひん女のきさきにまいる事
- 三 ゆきの中の竹のこの事
- 四 孝行ゆへに酒のいつみをもとむる事
- 五 かう／＼ゆへかねのかまをえたる事
- 六 ふかうゆへに天はつをかうふる事
- 七 けうやうのことはりをひく事
- 八 女はうの身もちの事
- 九 虫のかのかしらとらの尾のたとへの事
- 十 女はうに三つのさうの事
- 十一 天にめかへにみゝのたとへの事
- 十二 けこん経をひく事
- 十三 心の師とはなれ心を師とせされの事

十四 女の心水にたとへの事

女訓抄卷上

第一 四たう八くの事

それまつ四たうといふは、四てんたう也。しやうたう、らくたう、かたう、しやうたう也。

はしめのしやうたうとは、三かいはむしやう也。しきほうん／＼にしやうめつし、しんほうねん／＼にうつり、うゐのまうほうは、一つとして、つねに有ましきことにしうちやくして、いつもふたいに有へき事ぞ、とまよへるによつて、てんたうと云也。

つきにらくたうと云は、むをらくと名付、うへたる時しきもつを得、寒き時ころもをえ、さいしけんそく、きうはしさい、金玉れうけんとうをもてる。皆これらくと思へる也。しかれば則、たからはぬす人のためにうは、れ、さいしけんそくは、ゑしやちやうりのことはりなれば、わかれちる。いへは、ほうくはのためにやふれ、らくはかへりて、悲しみとなる事をしらすして、らくと思ふはまよひ也。

つきに、かたうといふは、五おんにわれなし、けしてわれとすといふを、ちやくして我と思ふ。そうして、我と思ふへからす。凡夫はむしいらひ、まうかをけとして、したのしうしんふかくして、六道四生にりんゑする間、もろ／＼のかたちにむまる、たひことに、我身と思ふ執心ふかし。或時は、ひさう天の八万ここの命に生れて、我と思ひし時も有。ある時は、あしたに生れて、ゆふへに死するふゆうの身と生れて、我と思ひし時もありき。かくのことくの身にても、思ふ執心ふかく、まよふ

をいふ也。

つきに、しやうたうといふは、人の身のきたなき事、一切の生類に過たり。大海の水をもつてあらふとも、きよかるへからず。せんたんとたきてくんす共、かうはしかるましき也。かくのことくの身に着して、清しと思ふはまよひ也。これを四たうと申也。

つきに八苦と云は、八つの苦也。其八つといふは、老苦、病苦、死苦、生苦也。これを、生老病死の四くと云也。又、あひへつりく、おんそうゑく、くふとくく、こしやうたう、合て八くと云也。

はしめのしやうくと云は、生る、時のく也。父母のしやくひやく二つのゐん和合して、たいたいにやとりて、二百七十日に生れいつる時、母子共にくをうくること、半死半生也。さんふのくるしみに、ふくいきは上十五の梵天にのほり、いきたるうしのかはをはきて、をとろの中におひ入るよりもたえかたくしてむまる。されは、はしめてなくこゑは、くなるかな、となく也。きやくしやうらうはうとて、前生のこと、かの時みな忘る、といふ也。

つきにらうくといふは、としのよるくなり。はんなんしんは、世二にして初て白きかみ二筋おいたり。是をらうくのはしめとす。齢さかんなるほとは、心もさかしく身もつよく、やう／＼としのつもるにしたかひて、あふらつけるはたへは、かはきて身のかはこはくなり、血のけうせぬれは、色くろく、し、むらうせぬれは、しはた、み、ほねあらはれて、つきめよはく、すちはこはくして、あしふるひわな、く。すくなりし腰はか、まはり、たか、りしまなふたはくほく、ひきかりしおとかいはとかり、くろかりつるかみは白く、白かりしは、きはみかけをち、た、ほねのうへにかははかり残て、おとろへはてぬれは、立

ゐについてもくるしく、日数かつつもりかさなるま、に、いよ／＼やすきことなし。老のねふりはやくさめて、よるを残し、こしかたのみ恋しく、行末とても頼まれず。身をくるしみ、心なやます事、老よりほかのかなしみはなし。されは、業平の朝臣は、

さくらはな ちりかひくもれ 老らくの
こんといふなる みちまかふかに

たかみねのうたに、

いつくにか 身をはよせまし 世の中に

おひをいとほぬ 人しなけれは

又、白居易かいはく、むかしはけいらくの花やかなるかくと成き。今はかふこにおちふれたる翁となれり、とゑいしられけり。そうして老のかなしひ、筆にはかきつくしかたし。

次に病苦といふは、やまひにをかざる、くるしみに、五さうといふ物有。かん、しん、ひ、はい、しん、これ也。たとへは草木のねのことく、かんのさうは春三月わうす。方は東、かたちは木、いろは青し。あちはひはすし。まなにとうす。しんはさうはなつ三つきわうす。方はみなみ、かたちは火、色はあかし。あちはひはにかし。したにとうす。ひのさうは、四季の土用にわうす。方はちうわう、かたちはつち、いろは黄也。あしはひはあまし。口にとうす。はいのさうは秋三つきわうす。方は西、かたちはかね、いろはしろし。あしはひはからし。はなにとうす。しんのさうは冬三月わうす。方は北、かたちは水、色はくろし。あちはひはしははゆし。かやうに五にわかつて、五体をたもつ。わう、さう、し、しう、らう、とて、時に従ひ、さうこくさうしやうする間、五さうのうち、二さうかならずわつらひ有。一さうもわつらへは、五臓やすき所なし。ゆひ一つもいためは、つうしんみなくるしむ也。四百四病、四きに百

一ひやうつ、あるゆへに、いたみなき月日有へからず。

次に死苦といふは、しする時のくるしみ也。しやうしやひつめつとて、生あるものはかならず死するならひ也。かなしかるへし。四百四病みなあつまりて、たんまつまのくとて、ふしをはなつ。やまひ身をせめは、五さうこと／＼くならんして、身心すてにさらんとす。命たえざる時のやまひ、しのひかたし。いはんや寿命とていのち也。此たひうせぬれば、共にめつす。みやうは、もとより有つるいのちにて、此身はつきうすれ共、なをのちのたいをうくるぬしにて、六道四生をめぐりて、又よろつのかたちをかはせ共、命はつくるへからず。此ふたつの命、さるさかいなれば、いかばかりかはたへかたかるへき。

次にあひへつりくといふは、いとおしきものにわかる、也。かなしき親、いとおしき子、おのこのさりかたきめ、たのしきしゆくん、つかひよきけんそく、みやうきやうのししやう、きんしゆ、はうはい、皆是、なからへてあらまほしき人には、わかる、くるしみ一つにあらず。おやは是、はどのつえにすかるまで、願はしき命も、一このかきりあるならひなれば、おひたるはさきたつためし也。子はと、まりぬて、かのほたいを期すれ共、老少不定のなけき有。又ふさいは、かいらうれんりの契りなれ共、うはのそらなる別有。琴詩酒の友は、おり／＼ことの思ひてに、なのみはかりはのこれ共、其ぬしはみえさりき。会者定離のならひなれば、あふものはさためてわか、ることはり也。

次におんそうゑくと云は、うらみをなしてかたきになる事、一つにあらす。其ためしおほしといへ共、ことに三ほんをもつてせんとす。其三つといふは、上てきちうをん下てき也。上敵と云は、身命をうしなはる、敵也。中をんと云は、しんそくをうしなはる、てき也。下敵といふは、財宝をうしなはる、敵也。

しかのみならず、わうとわうとは、国をあらそひ、臣と臣とは職を論する事、その数おほし。世に従ひ、人に交るならひ、我のみことなくふるまふといへ共、あしき物にあひぬれば、心のほかなる敵のみあり。此中に、悪王にあひぬれば、その国おさまらぬよりほかは、かなひかたし。

らうしは、くわいにんせられて、月日かきり有て、已に生れなんとし給ひけれ共、悪王に生れあはしとて、腹のうち八十年おはしまして、かの王、崩御し給ひてのちに、生れ給ひけり。はらの内にて、はくはつに成給ひけり。是を、赤子といはんとすれば、はくはつなり。老人といはんとすれば、今生れたり。されはらうしといはんとて、おひたる子とかけり。しんの始皇の乱をのかれて、商山に住し賢人は、とうゑんこう、きりき、ろくりせんしやう、かくわうこうの四しん、これをしやうさんの四かうとなつく。ゑんの世には、太公望はんけいさんにかくる。周の世には、はくい、しゆくせい、首陽山にかくる。かんのけいくはうは、こてい山にかくれにき。はおんそうゑくのたへかたきゆへ也。

次にくふとくといふは、もとむれ共えぬくるしみ也。人ことに、国王大臣の位にもほりたく、女は、女御後のほうにもあらまほしけれ共、かなふ事なし。其外、なみ／＼なる有様たにも、心にまかせて、うくるたくひはなかるへし。よきすみか、いつくしき衣、こきあちはひ、さま／＼のたからにいたるまでも、もとむる心は日夜おたらされ共、うくるたくひは、万にひとつもかたかるへし。えぬものは、又思ひもと、まらすして、いよ／＼のそみつくることなし。是をひとへに、くふとつこのもよほす所也。是則、前世に三宝供養をのへすして、けんとのこういんにむくひて、今此くるしみをうくる也。三宝と申は、仏法僧これ也。過去因果経に云、よくちくわこゑん、けんこけ

んさいくわ、よくちみらいくわ、けんこけんさいるん。此心は、過去のゐんをしらんと思は、その現在の果をみよ。未来のくわをしらんと思は、其けんさいの因をみよ、といふ心也。まことにほつかしきかな、前の世のくとくなければ、此世にまつしき身と生れたり。今又、善根をせすは、みらいにもかなしかるべきをや。

次に五しやうをんくといふは、身、よろつのうれい、くをなす也。五をんへつしやうのいはれなれは、身にふれ心について、もろ／＼の苦をなす。四たいわかうのかたちにて、事として、わつらはしからずといふ事なし。此身のうせさらんとは、くゝるしみもたゆへからず。心あらんとは、愁も失へからず。此身といふは、万のくるしみをあつめて、つくれる身也。これにやとれる心なれは、事として、煩しからずといふ事なし。いたみはほかより来らず、五たいしんふんになす所也。なけきはよそよりはなし。た、心のうちよりをこりたり。たとへすこし悦あれ共、なを終にとけかたし。た、闇にわつかにてらすいなつまのことし。今生の悦は、後生のかなしみなれは、それ又かへりてあたと成へし。人間のたのしみは、仏法のかなしみ也。とにもかくにも、さはりあるは、五をんのなす所の身たるへし。是を人間の八苦と申也。

第二 五しやう三しうの事

女人にかきりて此くるしみ有。五しやうといふは、五つのさはり也。三しうといふは、三つのしたかひ也。はしめの五しやうといふは、一つには梵天とならず、二には帝尺とならず、三には魔王とならず、四には天りんしやうわうとならず、五には仏とならず、と法華經にみえたり。かなしきかな、たいしやく

とならねは、にうなんのゆかにくたされず。ほんてんわうとならねは、六欲天の花をもてあそはす。てんりんしやうわうとならねは、りんゑをはなれず、常に地獄をすみかとするはかり也。三しうといふは、おさなき時は親にしたかひ、さかりに成ては男にしたかふ。としよりぬれは子にしたかふ所也。おさなき時は、身を心にまかせず、是をのかれんとすれは、ふけうのとかをまねく。さかんなる時は、男にしたかはねは、身をたつるに便なし。老の時は、子にしたかはねは、道路にた、すみ、かはねを道の辺にさらすへし。しかるに、此三従をよく／＼心へて、一期をくらさんにすくへからず。さる間、是をくはしくしるす。心をしつめて、あんすへし。

先おさなき時、親にしたかふ恩のふかきことをあんすへし。父よりは骨を得、母よりは肉を得て、はらの内に九つき、膝の上にて二三ねん、しとねのむしろをくたし、ゑしきには、身をさりてあたへられき。父かたをばないせきと云。ほねをえたるゆへ也。父の恩のふかき事は、しゆみせんにたとへ、母のをんのふかきことを、巨海にたとへたり。しゆみせんといふ山は、たかさ八万ゆしゆん也。一ゆしゆんといふは、つねのみち四十里也。此四十里を八まんまでかさねて、たかさにとへたる事、はるかに高きをや。こかいと云は、ひろくふかき海也。しゆみせんは高けれ共、八万の数にかきる。こかいは、そのふかきもかきりをしらす。是にたとへたる、は、のをん也。されは四恩の中には、二親の恩すぐれたり。二しんの間には、母の恩ふかしといへり。此四恩と云は、一には伯父⁵¹うは、二には父母、三にはおちきおはき、四にはあにおと、あねいもうと也。又一には天地の恩、二には国王の恩、三には父母の恩、四には衆生のをん也。天地の恩と申は、日月せいしゆくおはします。衆らを照しはこくみ給ふ。地にはけんらう地神おはしまして、衆

生をたすけ給ふ。国王の恩と申は、国土の恩、草木水火にいたるまで、国土の恩にあらずといふ事なし。父母の恩と申は、さきにしるす所也。しゆしやうのをんと申は、しのはう、しう、い、ふさい、けんそくは、みな是、たかひにをんをかうふらすといふ事なし。其中に、父母の恩は限なし。これをほうするものは、まんのとくをかうふりて、つるに浄土に生る、也。ほうせぬものは、わさはひしきりに来りて、地獄におつる也。

さいてんちくに、ゑつこくといふ国あり。まつしき女有て、母をやしなふ心さしねん比也。ある時、母をはこくまんに便なき間、らさんといふ山に入て、薪をひろひて、は、にたかせんとするに、かの国の王、かりし給ひて、らさんにきやうかうあり。かのをんなをみたまふに、天下にならひなきひしんなりとて、あひし給ひ、この山に入るゆへをとひたまふに、母のためたき、をひろふよし、こたへ申ければ、いみしくめてたきものなりとて、その日のかりをと、めて、くるまにのせてかへりたまふ。きさきにたてられて、いつき給ふ事かきりなし。なんこくの美人とは、かの女はうの事なり。けうやうのこ、ろさし、ふかきによりて、天のあはれみをたれ給ふゆへなり。

又はくゆふといふもの有。其母たけくして、子をうつ事たひ／＼也。され共、いさ、かなく事なし。それに、た、今なく事心へす、とは、いふ。子こたへていはく、わかとおはします時は、うち給しつえも身にしみしかは、御身のさかりにおはしまして、御命も長かるへき事を悦し也。今うち給ふに、御杖、そうして身にもしみ侍らす。御としのつもり、御ちからのよはく成給ひぬる程はしられて、今いくほとか親とも見奉らんと、かなしく覚えてなく也、と答へければ、母、限なく哀に思ひて、その、ちはうたすといへり。

又ていらんといふ人、母をわりなくやしなひけるか、は、死

、てのちは、名残おしくて、木にてかたちを作りて、あさ夕かむ事、いきたりし時のことし。珍しき物共は、先備へけるを、かの女となりける女、是をそねみて、おとこのものへ行たるあとに、かの木像をうちくたきてすてけり。ていらんかへりて是をみるに、かなしき事限なし。され共ちから及はず。かのくたけを取あつめて、はいにやきて、衣を染てきたりけり。今も親、しすれば、ころもをすみにそめてきる也。

又まうそうといふ人は、おやのやまひし給ふ時、たかんなを願ひけるに、十二月の事なれば、いふはかりなく寒かりし雪中に、竹のはやしをみけれ共、有へきにもあらねは、もとめかねて、天に仰てかなしむ所に、雪のうちより、むらさきのたかんなおひ出けり。是を取て、おやに奉りけり。孝養の心さしふかきゆへに、天のあたへ給ふ事也。

又、都に父をやしなふひんしやあり。かの父、酒よりほかに、このむ事なし。しかれ共、身ひんにしてかはりなし。日ごとに、雨風をもいとはず、おはら山に入て、たき木を切てうりて、酒をかふて父にのませけるに、ある時、山をふみくつしたる跡より、さけわき出けるを悦て、父をおふてゆきて、是を思ふ程にのませけり。此事、天下にひろう有ければ、国王、御幸なりて御らんあるに、ためしすくなき有かたき事なりとて、くにを給はりけると也。

又大国にくわつきよといふ人、母をやしなひてねん比成けるか、ちからつきて、我子を失ひて、母をたすけんとして、山へ子をあひくしてゆきて、あなをほりて子をうつまんとするに、めかなしみて、子のわかれなこりおしみて、共に山へ入て、子をか、へていたりけるか、父はあなをほる、めは子の名残をおしみて、一時もそは、やと思ひて、今すこしあなをほり給へ、あさくは、後にけた物のくひちらさんも浅まし、といひて、す、

ろに深くほりけるほとに、金のかまをほりいたしける。此うれしさに、子をうつまん事も忘つ、かまとりてかへり、母をゆたかにやしなひ、子をもうしなはさりけり。

しんたいはつふをふほにうけて、あへてそこなひやふらざるは、孝のはしめ也。身をたて道をおこなひ、名を後代にあげて、父母のとくをあらはすは、孝のをはりといへり。此比は、親の子をくわいにんするに、いかなる姿にてか生れんすらんと、心くるしく思ひて、うみをとしみれは、しんたいもはたへも、人にちかはすして生るれば、よに心やすくうれしく、物をも思はせざるを、けうやうのはしめとする也。おとなしく成て、ちゑもさとりもあり。神妙にして、みる人きく人にほめられけるを、かうのをはりとす。これらはみな、をのかためにこそ、やくある事なれ共、し、ての跡に、おやの心をやすく思はずへきをもつて、孝のみなもと、成へし。た、力のをよはん事に、親のめいにそむかんものは、其身亡へし。

されはゆうほうといふものは、父をうちたりしかは、いかつち来りて其身をさき、はんふといふものは、母をめりしかは、れいしやきたりて、その身をすう。されはふかうのとかは、諸仏ほさつに捨られたてまつり、いきたるほとは、わさはひおほく、しすれはむけんちこくにおちて、いつる事なし。かう／＼の人は、今生にはさいなんのかれ、後生には往生す。たとひもし、つらきおやなり共、ないりの苦のかれんかためには、父母に孝養をいたすへし。

けうやうにいはいはく、ち、父たらすといふとも、子もつて子たらすんは有へからず、といへり。此心は、おやはいふかひなく、子はいみしく共、父は父たるへし、子は子たるへしといへり。又父は、世のひか物、そしりありとも、子はいかにも親をこしらへ、なたむへし。せめては、教訓にかなはず共、かなしんて

も、もとかしき事は申なたむへき也。めうしやうこんわうの、二しのやうにそ有へき也。

又しうとにつかへんも、わかおやにすこしもちかふへからず。わか親の我を思はんよりは、すこし遠かるへき間、まことの親よりも、なをねん比に、けしきをみゆへき也。舅にふほうこうなれば、わか男にふかうのつみにあたるへし。ふかうのとかは、むけんちこくにをちなん事、いたはしからざらんや。すへて親にそむきて、ふかうならば、極樂のむかへあるへからず、としるへし。す、みても、けうやうの心さしあらは、弥陀のらいかうにあつからん事、うたかひなしと心得へし。

二に、おとこにしたかふへき事、それ人間の八くは、かなしみつ、もすこしてん。五しやうのなけきは、しやかたほうの二仏にたのみあり。女人の一この大事は、三しうなり。三従のうちには、男にしたかふ道よりほかに、くるしきはなし。いとけなき時は、おやにしたかふ事は、おんあひの心さしなれば、そはめる子をもかへりみる。老て後に子にしたかふは、つもりし恩の報なれば、もとよりあるへき事そかし。た、おとこにしたかふ事はかりを、わきまへしらすは、年月を、くりてそひかたし。もしすてられはてなは、徒にろかうにたえたる舟のこく、よるかたもなくあくかれて、ありなんほとは、よろつの人あなつりくさと成て、かなたこなたのみちのほとりに、おもてをさらさん。終には、かはねを野への薄につらぬかれん事、つ、しますんは、世にあるへからず。女人は、心けたかくして、身をおくふかくすみ、さいはひを天にまかせ、果報をうんによせて、心をむねのうちににおさめ、身を帳のうちにかくすへし。はしめてのそまん男をは、たとひいみしき主君なり共、おほみか、る事なかれ。まして、其したのことは、ことのほか也。もし、命と共にともなはん男をは、けんそくのことくいやしく共、

思ひあなつる事なかれ。是則、たかき男きらふにはあらず。なからへさらん事をいましむ也。いやしき男をこのむにはあらず。おはりどけんするゆへなり。いみしき人と云は、主君とひとしきたくひ成へし。賤しき男といふは、我とひとしき人也。虫のかのかしらとはなる共、虎の尾とはならされ、といふ本文有。かはいふにかひなき物なれ共、是かかしらと成たらんはよかるへし。とらは、ゆ、しくおこれる物なれ共、かれかおと成たらんは、然るへからず。其やうに、女はなみ／＼なる男にも、たくひなく思はれなは、さいはい成へし。是かのかしらとなるかとし。心よろ／＼しくふるまひなは、かけならふへし。おもしろかに、けに／＼しくふるまは、恥らるへし。はちられはあなとられまし。

或女、わがしうの、詞をかけらる、に、すへてうけかはす。され共、たへすしゐていひければ、かきりなく思ひて、

たかくとも なに、かはせん なよたけの

ひとよふたよの ふしはよしなし

といひて、切たりけるとかや。よき女は、かくこそ有へけれ。すへて女は三の事、さうする事有へし。一にはかたちよく、二にはふるまひよく、三には心つかひよく有へし。一にかたよきといふは、三十二相こと／＼く相応するは、むかしも今もありかたし。よのつねに申ならはしたる。身のたけひきく、いたけたいらかに、ひたいひきく、めほころひなかく、まなこのひかりあさやかに、鼻うるはしくさきさかりならず、口ひるお、いに、た、の時はせはく、わらふ時はひろく、は大きにして、きひしくならひて、色あさやかに、かみのすちほそく、たをやかにしてくろく、はたへうるほひ、ほねたか、らす。くひなからすして、ちふさいらかにして、かたかるへし。ゆひふとからすして、手のうへにこう有へし。つめすなほにして、も、

大きにあつく、物いふこゑはす、と、のほり、ことはあさやかなるへし。是をと、のへたるを、よき女と申也。

二に身のふるまひよき女といふは、いた、きより、あしのあなうらにいたるまで、さはやかに、かみも身にもあかあらず、けたかくしんしやうにおくふかくして、はしちかからず、すたれきはちかくよるへからず。こゑをはかへよりほかにもらすへからず。あかつきたる物をきす。夏は身をいきりほとをらす。冬はひやしこくやかさす。匂ひくさき物をしきせず。よその男のうへをいはず。人をいたくほめす。又そしるへからず。そのに我と口かましからず。又ことのほかにしめりつくるはす。おかしき事には、うちわらひてねふせず。あはれなる事にも、忍ひかたくうちまかせて、そこさはやかに有へし。ほいなきことにも、あまりしらぬかほなるも、中／＼心ふかし。されは、ぼしはかりをはあらはすへし。されはとて、かほをあかめて、ゆひしろふへからず。男の大事とせんことをは、わか身の大事といとなむへし。朝には男よりもさきにきて、夕へには後にふすへし。おきては、やうしうかひして、たのみ奉らんほとけ神を、念し奉るへし。神力けんこのかとは、わさはひの雲おこる事なし、念力かうしやうのいゑには、ふくゆうの月、光ます、といふもんあり。あふきても、おこたるまじきは三ほう也。うやまひても、又おそるへきは神明也。今生より後生まで、こする所は佛法也。よふせうよりらうもうにいたるまで、たのみをかくへきは神慮也。ゆふへにふさんには、うかひよく／＼して、身のありかをつ、しめ、いきくさきものよりも、心なきものくさし、といふ事有。此心は、ありかのくさきものも、つ、しめは人の鼻にいらす。ありかのなきものも、ひた／＼とは、かる所なきふるまひは、あさまる事も有へし。女はかり初の所にて、人も、人やみるらん、きくらんと、ようしんふか、るへし。

或人の、姫君三人ありけるか、あれたるいへの、物さひしき所にあつまりけるを、さかなかりける男、初秋のすゝろに、世の中のおろかなさに、たゞすみありけるか、此所へ立よりて、物のひまよりみけるに、十七、八かともえて一人、十六、七ともえて一人、十五、六ともえて一人あり。そのうちに、おとなしきひめ君のいひけるは、をの／＼た、今何事か思召けん、わか身にわさ、のさけのよからんと、あかきお物とやらんと云。其次の姫君、わらは、あゆのすしと、けのあるかたうりと思ふといふ。又おさなきひめ君は、物もいはず。いかに／＼とたひ／＼とひ給へは、何事も思ひいつへしとも覚えす。あてはてぬるやとなれば、軒端にさける萩のはなたにもなしといひて、うちなみたくみて、かへにうちむきぬ給ひける有さま、うせにしおやの事のみ、思ひいつるなめりとみえて、よに物哀にみえける。やかて立よらんと思ひけれ共、折からつ、ましからんと思ひて、かへりぬ。其あした、かのおのこ、なかひつ一かうをくりけり。いつくより共なく打をきて帰ぬ。是をひらきてみるに、あかのお物、かたうり、あゆのすし、さま／＼にいみしくと、のへて、萩の花に文を結びてそへたり。あけてみれば、

わさ、さけ あかきおものに はきはな

けあるかたうり あゆのすしなり

これを見るに、人はきかしと思ひつるに、浅ましともいふはかりなし。さるほとに、はきのぬしは、かの人にさいあひして、限なき事なり。あね二人はこれをたよりにて、心のまゝにありつきてけり。ひるは天にめあり、よるはかへにみ、ありといふ事、まことなるかなや。

三に心つかひよくて、男にみゆへき事、姿かたちは生れつきなれば、よきもあしきもなをすに及はず。ふるまひはもとよりさはやか也。人は懇にとりつくるはねとも、たをやかにして、

ほねなからず。心は身にしたかふやうにして、そむける事のみおほし。此けうくんのかんしん、めあした、是にあり。心はかたちなきものにて、よくもなりあしくも成物也。けこんきやうにいはいく、三界唯一心心外無別法、しんふつきしゆしやう、是三無差別とのへ給へり。此心は、三かいはた、一しん也。外に別のほうなし。心とほとけとをよひしゆしやうと、此三はまつたくしやへつなしとみえたり。まことに、身をほとけとなすも、凡夫となるも、心のもよほす所也。よきものとほめらるゝも、あしくある物とそしらるゝも心也。心の師とはなる共、心をしとせざれといふ事有。しとなるも、てしとなるも、心なるへし。かくいふ時は、あるに似たれ共、すかたはみえず。姿みえされ共、又一心かへんする也。心を師とせざれといふは、あしき事を思ひいつる時、よしなき心かな、是にしたかひなは、あさまなる事もうき名もたちなん、いはれなしと思ひかへす心あるへし。是を師とせよと也。心の師となれといふは、悪事を思ひ立ちぬへくは、いふにかひなき心かな。ふ道也。ゆめ／＼思ひたつましき事也といましむる。是を心の師といふなり。

女の心をもつへき事、水にたとへたり。水はまるなる物に入れば、まろくなる。かくなる物に入れば、かくになる事也。わか身の、女と生れたることを案すへし。世中に陰陽あり。めんは北、色はくろし、かたちは水也。女は是をかたとるゆへに、北の政所と云也。又水の性なるゆへに、月水とて月ことにさはり有。やうは南なり。おとこは是にかたとる。かたちは火也。いろはあかし。火のあた、かなるをもつて、北の寒きをあた、め、あきらかなるをもつて、北のくらきをてらす。女のさむきを、男のあた、むるは、女の便なきをは、おとこのはこくむこととはり也。又、男は天にかたとる。女は地にかたとる。天のあた、かなるをもつて、地の寒きをあた、め、天より雨ふりくた

り、地より草木おひいつるかことく、男のたねをくたして、女は子をうむ事、此ことはり也。此心をよく／＼心得て、男にそむく事有へからず。ふさいと云は男女也。ふの字をたすくとよむ。さいのしをはひとしとよむ也。おとこはめをはこくみ、女は男にひとしくあるへしと云は、男の心にちかふましき事也。女は心はせいみしくあるによりて、めてたくなりいつる事もあり。

女訓抄卷二目録

- 一 かのりふしんの事
- 二 琴の音をかんし天人あまくたる事
- 三 てい女をしのつるき羽の事
- 四 あるしの女はうの心持の事
- 五 孔子より一句つたへをうくる事
- 六 あしき女房のふるまひの事
- 七 さうふんかか、みの事
- 八 橋の右馬丞か女はうをいころす事
- 九 王照君こ、くへうつさる、事
- 十 太公望女にわかる、事 付位にのほる事
- 十一 玄宗后しやうようしんの事
- 十二 きさきを愛して絹をさく事
- 十三 后をあひして国中の武士をめしよせらる、事
- 十四 心ふかき王后の事 付はかりことを聞ける、事
- 十五 心あさき女房の事
- 十六 さる女に七つさらさる女に三つの事
- 十七 らうほは子にれんみんなあるへき事
- 十八 后王にあさまつりことをす、むる事

十九 大そうの太子出生の事 付母のきさきとふらひの事 女訓抄卷上の末

李夫人と云は、かんわうの後に成給ひき。いとけなきときは、たけたかく、色くろく、かみち、み、目くほく、鼻たかく、いきくさくして、つかはる、女、はなをふさく也。かやうにありければ、わか身のうたてしき事を思ひしりて、しん／＼をいたして、念比にやくわうほんを二十一日かうし給ひしかは、あしきすかたは引かへて、いつくしき姿になり、くさきいきはかうはしくなる事、こつせんたんのことし。いろもしろくなり、ち、みし髪もたをやかにして、天下にならひなき美人になり、則、漢の武帝の后と成て、てうあひ日にしたかひまさりつ、一たひかへりみれば、人のくにをかたふくといへり。けいせいといふ事、此よし也。我身一人いみしきにもあらず、しんるい一門みな朝恩にほこり、めてたくさかへけり。しかるに一こはかきりある事なれば、やまひのとこにふして、すてにかきりとなる時、かんのふてい、御なけき浅からずして、今一度、御たいめん有たきよし、せんし有けれ共、惣してもちい給はず。されは、親類一門さしよりて、此年月の御心さし、浅からずして、なを、さいこになこりを、しみ、今一たひ御対面とせんしをくたさる、に、いかてかそむき給ふへき、とけうくんありければ、りふしん答へての給はく、我、みかるとにわりなく思はれ参らす事は、すかたかたちいみしく有しゆへなり。されは親類一門、こと／＼くさかへ、今にたえず。今、やまひの床にふししつみ、ありつるすかた、引かへて見くるしき事限なし。此有さまをみえ奉るものならば、ふか、りし御心さしもあさくなり、わりなく覚しめされし思ひもさめ給は、名残もおしくおほしめすま

し。名こりおしくおほしめされすは、なき跡を忍ひ給ふ事、有へからず。なき跡を忍ひ給はすは、わか一もんはこくみ給ふ事も、有へからず。た、わかへいせいなりし時、御らんしけるを、かきりとあるならば、なからん跡をも思召いて、又わかしんるいをもかへりみ給ふへし、といひてつるにはかなく成にけり。まことに、此心はへはちかはす、後にも草のゆかりの御あはれみたへす、かなしみのあまりに、はんこんこうをたき、なき人のかけのみゆる、といふことはかりをたのみて、かの香をたかせ給ひければ、夜更人しつまりて、ほのほに其おもかけみえければ、かきりなき御思ひ、いよ／＼たえず。かのかたちを絵にか、せて、朝夕御覽しけり。李夫人さつて、かんわうの思ひといふは、かの御なげきの心なるへし。かやうに、心はへいみしきによりて、後の世までも忍はれ給ひけるそかし。いはんや、同じ世に有なから、うとまれん事、た、心のなす所なるへし。

又漢土にろくしといふもの、ことの上⁴手也。ことを引すましてけるに、かの曲をかんして、六人の天人あまくたりて、まひあそひてのちに、をの／＼天に生る、ゆへをかたるに、ある天人申けるは、我むかし女人たりし時、男の心にしたかはぬ事なし。此くとくによりて、天上に生れたりしと也。天に生る、くわほうをうくることは、戒行をまつたくして、あるひは大善根をしゆし、仏法しやうこんのちからによりて、生る、るに、た、おとこの心に従ひて、天に生れけるは、善根のくとくにおなしきかと覚えけり。まことにことほり也。心をしつめ、ちらさはち仏のしやうゑんのもとひなり。いかてか、むなしかるへき。はうこくにていちよといふ女ありける。天下のひしんなり。わかうしてより、あひ友なへる男に、いさ、かもちははず、と

し月ををくりけるに、かたちならひなく、いみしきことを聞召て、ていわうよりめしてきさきにたてらる。され共、ていちよいみしきことに思はず。た、わか男のみ恋忍ひて、露はかりも国王になひき奉らす。されはとて、はうしんなくあたり申へきにあらねは、さてのみすこし給ふほとに、いか、してか、心をとるへきといふ事を、公卿せんき有けるに、臣下、申されけるは、后の王にしたかひ奉り給はぬは、もとの男のなこりを思ひ給ふ故也。かの、もとの男のかほのかはをはきて、かたちをやつして、ちんをわたして、きさきにみせ奉らん、定めておとろき思ひて、うとみ給ふへし。さらんに取ては、いかてか従ひ奉り給はさらん、とかんかへ申ければ、此義しかるへしとて、かの男のかほのかはをはきて、ちんのまへを渡して、后にみせ奉りてのち、かうとて、山にふかき井有。かの井にしつめ、其後、今思ひきり給へと、かの男、すかたうとましく成て、終にかうに入ぬ。何に心のとまりてか、心つよくあるへき。今はしたかひ奉れ、とおほせありければ、ていちよ申やう、まことに今は、いふにかひなく成にけるかや。さもあらは、そのしつめし井のもとへ、我をくし給へて、まことをみんといひければ、けにもとて、てい女をかうの井のほとりへ、くし奉りてゆきたりけるに、われゆへに、かく成はてぬるにとかなしく、たえへきかたなくして、かの井にとひ入にけり。此よし王にそうしければ、人をおろしてかつき上へきよし、仰下さる、間、もとめけれ共なにもなし。水の底より、鳥一つかひいて、あそふ。ふしきのこと也とて、王、是を御らんしけるに、かの男はをとりとなり、ていちよはめとりと成て、ともに立けるか、をとりのはきより、つるきをいたしてきたりて、国王のくひを切にけり。かの鳥、今のをし是也。をしにつるき羽とてあるは、此ゆへ也。よの鳥よりもちきりふかきもの也。

貞女二夫にとつかすといふ、此ことほり也。かやうに心さしふか、らん女をは、いかならん男か、おろかに思ふべきや。たとひ遠さがる男なりとも、心なかくもみるへし、と覚ゆることあり。

あるおとこ、めをさひしめて、めつらしき女をおきにけるに、すこしも氣にかけたるけしきもなくして、日数つもりゆきけるに、秋のよのなかきにも、露はかりもまどろまず、あかしけるに、鹿のこゑかすかに聞えければ、

我もしか なきてそ人に 恋られし

いまこそよそに こゑはかりきけ

かやうに、忍ひこゑにてゑいしけるを、かのおとこ聞て、限なく哀に覚えて、かへりすみつ、ふた心なくして、過にけり。

男の心、定まらずして、うつる心を思は、家のめはせんさいの花のことし。山道を分てみるほとに、山風も身にしみて、行かふ道も岩根きひしくして、身もつかれ物うく成ま、に、いへちへさそはる、心いてきて、立かへりて、わか庭の花をみれば、めてたく身もくるしからず。た、わかせんさいの花にすきたるはなし、と思ひて、名所の花をわする、かやうにめつらしき遊女も、あそひたはふる、はしめは、おもしろく覚えて、いへのめをさひしめつるに、ゆふ女の、おのこをおとらかさる、心のうちは、た、小袖直垂に心をかけて、や、もすれは今はくれよかし、と思へるいろ、忍ふとすれとあらはれて、そこおそろしく成ぬれば、けうさむることほともなし。さて、家に立かへりみれば、いか、せんと、男をいたはしけにみければ、よしなくもうかれにけるものかな、と思ひさためて、又、ひるかへる心あるへからん。其時をまたすして、男の外心あればとて、かほ打あかめて、人めもしらす、いよ／＼うとましく成て、なかくわかれなは、その、花ちりぬる心して、たえはてなんこ

とくやしからすや。うからん時は、ことに心をしつめて、つく／＼とあんすへし。

ある人、孔子につき奉て学問して、ふるさとにかへりけるに、いへつとに、くさつつけ給へりし。其句にいはいはく、せんかう七ほ、ごかう六ほ、によせしゆひ、大とくちゑと。此心は、さきへ七あゆみ、うしろへ六あゆみしりそきて、物しゆひすれば、おほいなるちゑをうるといふ事、返々心をあたにすへからず。

つきにあしき女といふは、身のたけたかくかしら大きに、いたたきとかり、かみすちしこはく、ひたいたかく、かほにおもくさおほくして、めくほみ、はなさきさかりにて、くちひるうすく、はこまかに、おとかいふとく、のとのほねたかく、くひのほねほそなく、こゑふとくして、男のことし。かいなにもおきにもけおほくして、さめはたに、ふたつの乳ふさほそなく、かめはらにして、四つのえたほそく、これをと、のほらぬ女といふ也。

つきに女のふるまひわるく、心つかひあしきといふは、其心あら／＼しくして、はらたてまじきことにもいかりたけり、又、おかしからぬ事にも、けしからすわらひさ、めき、わか心にあはねはとて、人をもことのほかにそしり、万の人のうへをのみいひさたし、いふましき事をも口かましくいひ、わらひけるほとに、もれきこふれば、身のあたとなる。されは、口は是、わさはひの門、舌はこれわさはひのね、といふもんまことに此いはれ也。か、る女はありきを先として、物見をこのむ。みる事きくことをいはんかため也。おとこの所へ人來れば、ていのかたへ立よりて、すたれにかほをさしつけて、人を見るほとに、人又、これをのこりなくみる也。大こゑにてたかわらひして、人にこゑをきかせはやと思へり。いみしからぬすかたを、かくる、よしにてみえんとす。心けしやうをさしはさむゆへ也。耳

と目とはうれいをなし、舌と口とはわさはひをなす、と云ふも
んはこれ也。大さけのみて、男のいへのほろふることをもかへ
りみす、よいみたれ、我身の恥をもしらす、をのか心のと、の
をらさるまゝに、男にあひては空うたかいして、出仕のかへり、
狩場のもとりにおとこのつかれたるおりふしをもしらす、我
身のあきたるまゝに、人のうゑたることをしらす、口き、かほ
に詞かましく、万のことをいふほとに、おたしき男もはらを
たつ。かやうの女には、そひつかはる、ものまでも、ふるまひ
みなわろし。一つるなるにかうりのことし。姿、かやうにをん
など云字を二つかきて、かしましとよむ。姦、かやうに三字か
きては、かまひすしとよむ也。嫫、かやうにはねたむともそね
む共よむ也。かやうに、女の集りよる所は、よき事はなしと云
也。女はほかの人にともなふ事も、おなしからず。ことあた
しくむつふもあり。さるかとすれは、ほともなくのけて、かな
たこなたへうつる心は、日にかはりてきたまらず。はや川の瀬
に水か、みをみるかことし。やすくもなく、人をわつらはすよ
りほかのことはなし。男のいへにすみながら、万の男に思ひを
かけ、ゆくゑもしらぬ哥よみ、きしよくして、うかれる心して
有ければ、しのふとすれとあらはれて、すてらる、事ほともな
し。人数おほく見きたれば、おとこにあひての口たちに、有し
男のいとおしく、そこ成し男のゆうなりし、など、いひければ、
かしこよりもこ、よりもをくられ、身のうきことをもしらすし
て、男にあたをなす。たとひ心をいみしくつくろうとも、うし
ろめたくなくふるまは、天のあたふるとかあるへき也。
むかしこのくに、さうふんと云人、か、みをほうすんにつく
りて、其うらにかさ、きを二ついつけてけり。さうふんとなり
の国に行事有けり。すてに出ける時、めのなこりをおしみて、
かたりていはく、我かへりてみん事、としなかはあるへし。願

はくは、此か、みを二つにわりてをくへし。へちの男にあはん
時は、かの鏡のわれ、我もとへ飛きて、此かたはれにくは、る
へし。我、めを忘れてへちのめをともなはん時は、我もちたる所
のかたはれ飛かへりて、汝かか、みにくは、るへしとちかひて、
かさ、きのかたち、中よりふたつにわりて、かたはれをめにと
らせける。めはうちわらひて取にけり。男いて、のち、かのめ、
やくそくをちかへて、ひそかにへちの男にとつきける時、めか
もちける所のかたはれのか、み、かさ、きと成てとひ行て、さ
うふんかかたはれにくは、りけり。きたいふしきなりければ、
天下にかくれなくして、女のはちあらはれけり。わかれし時、
男の詞をかるしめて、わらひける事、後にこふれ共かひなかり
けり。ちんしか鏡にはにさりけり。
又、一条院の御時、かねひらの別当といふ相人有。天下にな
らひなきさう人也。物へ行ける道に、たちはなのむまの丞とい
ふ人、七、八きはかりのせいにて行あひけるに、道にてよひか
へして、これは何かしと申相人にて候。しかやうのことは、は
かりおほく侍れ共、みやうかのため申也。御へんはゆふへ
のうち、命うせ給はんちうようの相あり。つ、しみ給へと云。
右馬の丞おとろき、いかやうのいのりをしてかのかるへし、と
申せは、身にとりては、大事とおほさんたから物、さいしをき
らはすころしてそ、たすかるへき事もあるへしと申。いそきい
へに行て、大あしけと云ひさうの馬こそ、大事と思ひて候し、
とて、かりまたをさしはけて、いころさんとしけるに、ぬしを
みて、草打くらひ、よにもうれしけに、いはへて立ければ、矢
をいたつへき所も覚えすして、をしもとりける所に、れいにい
とおしく思ひけるめの、大きなるかわこによりか、りて、打
みてみたるかたへ、ひきはつしてはなちけり。あやまたす、此
矢かの女をいとをして、かはこにいたてにけり。浅ましきなど、

いふはかりなし。いそきはしりよりてみれば、女はいふかひなくしにけり。かのよりか、るかわこより、ちのなかれていてけるを、あけてみれば、たけ七尺はかりなるほうしの、こしのかたなぬきもちて、人よりはつかんと思ひしけしきにてあるか、かりまたにていられてしにけり。かのめは、かしこくてこそはからいぬ、と思ひけれとも、天のあたふる所の罰なれば、いかてかたすかるべきや。又させるとかなけれ共、身をたのむはかりにて、心はせあしさまにて、物のよりのきをも心得ず、わか身のすかたかたちふけりて、何事かあらんと、ひろくふるまはんも、すゑあしかるへし。

かんのけんていの御時、せんはとてよき馬をこのみ給ひける。ここのくにちうそん王とてわうおはします。せんはをけんていに奉る事、とし／＼つもりけるに、ちうそん王、申されけるは、后を一人給はらんと申間、たふへきに定まりけり。きさき三千人おはしましける中に、かたちのおろかならんをえらひいたし、つかはすへきよし定めらる。たやすくえらひ出すへきにあらず。三千人をにせ絵にかきて奉るへきよし、仰下さる。かた／＼、后よりゑしにこかねをたひて、わかかたち、よくうつくしく書てつかはすへきよし、めん／＼にゑしにの給ひけり。金おほくたひたるをは、ことにうつくしく書、すこしたひたるは、かたちをそれにしたかひて書けり。わうせんくんと申きさきは、三千人の中には第一の美人也。よの后たちは、かたちわろければよくかけとて、ゑしにこかねをたふなれと、我はもとよりうつくしければ、金をあたへす共、おろかにはか、しとて、すこしもたはさりければ、ことにかたちをあしく書たりけり。けんていゑつをひらきみ給ふに、王照君と申きさき、ことにあしく書けり。これをえらひ、ゑひすへあたへべきよし、せんしを下さる、うへは、ちうそんわう是を給りてけり。是は身を頼て、心

せはきによりて、見もならぬゑひすのめと成にけり。おやは是、かうとうわう也。かのちやく女なれば、くらも高きみしけれ共、こ、くにうつされし時のなけき、申もおろか也。身はけして、はやくこのきうこつたり。いへはとまりて、むなしくかんのくはうもんとなれり。はやくこちにおちなんことをしらましかは、ゑしに金をあたへてん物をとて、うちゑいしけり。

みるたひに か、みのかけの つらきかな
か、らましかは か、らさるまし

まことに、かたちよきをたのみて、ゑしをかたらはさりしにや。

又身のほうのしからしむるをしらすして、ホノマ

あるひんなる男、たいこうはうと申せし人、よるひる学問をこのみて、いへのひんなることをしらす。かのめ申けるは、なにとなくまつしき世をわたるに、さらにたえへき共覚えず。願はくは、我にいとまをゑさせ給へと云。太公望申ていはく、其事ならば、われ今年三十九。四十といはん時、いみじきことのあるへし。いかにもしてまつへし、といひけれ共、め申けるは、一日もかんにんしかたし。いかにいはんや一年をや、とおして立出にけり。そのあくるとし、太公望、周の文王にめされて、せいこの国を給りてるとき、国王のいらせ給ふとて、みやこをこしらへ作りけるに、出にし女は、かの国の民のつまに成て有けるか、身のほうなればひんなるあいた、人をもたされは、今の男と二人して、道をつくりけるに、かの女、道のかたはらに出、さめ／＼となく。太公望、車のうちよりみて、ゆへをとほするに、女、申やう、わかさきの男のいみしく成て、いてたりときく。心みしかくて、出にし事をこふるに、かひなしといひてけり。重てとはせけるやうは、さきの男を誰といひし、と有ければ、性はきやう、あさなはしかとそ申ける、とこたへける時、太公望、我こそきやうしかよといふ時、さあらは、もと

のことくめとならんといふ時、物に水を入れてきたれ、といひければ、悦て水をもちてきたりけり。その水を地に捨よといへは、ちにすつ。又、もとのことくとり入よ、といふに、女、申やう、いかにしてか、土にすてぬる水をは、もとのことくうつは物には入へき、とこたへけるに、たいこうはう、しかなり。汝か我をすてしは、おんあひのはやくへた^りぬ。いかにしてか、本のことくめとはなすへきといふに、恥て死ぬと也。うちきくには、男のなさけなきにたれ共、うちすてられし時のかなしさは、いかばかりかは口おしかるへき。心あらん女は、今もこふる事有へし。しゆはいしんと申せし人のめも、かやうにこそ、国を逃けり。又、心たか、れといへはとて、男の心をしらすして、ほれ／＼とあるもいふかひなし。

唐の玄宗皇帝と申せし王の后しやうやうしんは、十六にて后にまいりて、しやうきうにをかれてのち、みかとはやうきひと申后に、みゆきありておはしませは、しやうやうしんは六十になるまで、かの所にとちこめられて、春のなかきにもひとりなかくめくらし、秋のよの明かたきにも、露はかりもまどろみ給はすして、あかしくらしけり。秋のよなかし。よなかふしてねむることなし。天もあけず、かう／＼たるのこんのともし火、かへにそむける、せう／＼たるくらき雨の窓をうつ声、と白樂天は詠し給ひけり。参し時は十六、出しときは六十。いつるもいるも、いかなれは六をはなれさりけんといふ、此事也。又おとこの、わりなく思ふとも、あしくふるまは、おとこもほろひ、わか身も思ひのほかなる事あるへし。

いこくにきさきあり。かたちたうりのことし。いとおしきつきかたかりけり。わらひける時は、も、のこひあり。され共、おほろけのことはわらひ給はず。じやうけんとしてよきさぬを、さら／＼とさくをみて、是をあひしてわらひ給ひけり。此わら

ひをあひし給はんとて、こくちうのきぬを召あつめて、さきて捨られしほとに、國中の絹つきはてて、民もそんなせしかは、わうのたから共なかりしを、^りんこくのものき、ていくさをおこし、国をうはひとりてけるうへは、いみしかりし。后もちりうせにけり。こくかのつるへといふはこれなり。

又、ある后は、つはもの、よろひうちたるをあひしけるに、こくちうのふしをめて、みせられけるを、さのみはたえずして、せんしなれ共まいらぬ間、ちからなくしてすかしよせんかために、天下の御大事いてきたり。ふし共参るへきよし、仰下されければ、御さかなしことにて、まいらさらめ、おほやけ御大事出きぬるうへはとて、鎧甲をきて、いそき参りたれば、れいの后の見物のためなりける間、これも後は参らす。是をりんこくのわう聞て、やすくつめおとしてんや、とてつめけるに、国の御大事出きぬ。ふし共、参るへきよしの、しりけれ共、れいのすかしせんしなるらんとて、一人もまいらす。されはほとなく、国をとられにけり。あひせし后も山野にまよひしかは、いふかひなかりけり。こくとの后、なをかくのことし。いはんや、其ほかのめとなりては、たとひきやうさうのめなりといふとも、ついゑをこのむへからず。又、かやうのさかなき事なれとも、人のたはかりにて、わりなきなかも、かきたゆる事あるへし。

ある国王の、后おほくもち給へる中に、御心さしふかく、たかひに思召ける后おはしけるに、世のきさきたち、やすからずと思ひけれ共、ちからをよはす過行ほとに、あるきさき、はかりことに王に申給ふやうは、君のめてたうあひしおほしめす后の給ふやうは、わうはいとおしく愛し給へ共、御はなのよにみくるしくおはしませは、むかひたくもなし、と仰らる、也と申。又かの后にまいりては、王の仰らる、は、きさきはありか

のくさくて、はなをかへすと仰られ侍る、と申ほとに、たかひに心つくろひして、后のもとへいらせ給ふ時、王ははなをかくし口おほひして、いらせ給ふ。きさきは又、ありかの侍るよし、おほせらるゝなるものとて、うちそはみおはしければ、たかひに聞しことは、まことなりけりとて、心をへたて思召。后は又うらめしく、よのきさきにあひ給ひて、うき名をたてられける物かなと、たかひにうらむるほとに、かれ／＼に成て、浅からす思ひしことも興さめて、なかきわかれに成にけり。あまりに心ふかきも、よしなきことにこそ。

又ことのほかに心あさきも、あさまなる心ちして、わらはるゝ事もあり。ある女房、きよ水にまいりて、ふもんほんをよみけるに、妙法蓮花経普門品第廿四とよむ。かたはらなる人、これをきゝてとふていはく、御経は筆者のあやまりか。よの本は二十五と侍るに、是はたひことに、二十四とあそはし給ふこそ、ふしんに覚え候へ、といふ。かの女、申けるは、此経にも廿五と侍れ共、うはなりにて侍ものは、二十五に成、わか身は二十四になるほとに、もんしにまかせて、二十五とよみ侍らは、うはなりのいのりにや成なん、とこたへけり。是はこゝろあさくて、人にわらはれけり。心ふかき事もなく、又、心あさきこともなくして、しとやかに、男をも大事と思ひて、其めにちかはさらんには、過ましき也。さはしりなから、わつらはしくもあたり、心さしもうすくは、いとまをこふてはなるへし。あしきをは、しりそけといふことほり也。

めをさるに七つ、さらざるに三つといふこと有。その七つといふは、一には子をむまざるめ、二にはあんしつとてたはしきめ、三にはせうとにつかはれぬめ、四にはくせつとて、人といさかひかましきめ、五にはたうせつとて、ぬすみかましきめ、六にはしつとて、物ねたみするめ、七にはあくしつとて、わ

るきやまひするめ也。めをさらざるに三つといふことは、一にはわうちとて、男の父母し、たるいみのうちに、つかはれたるめをさらす。二にはしゆひんこうふとて、むかへたる時ひんにして、のちにいみしく成たるめ。三にはうしよし、むしよきとて、めの父母のいきたる時むかへつるか、ふもし、てのちは、かへすへき所なき間、さらすといふ也。た、し、あんしつとて、たはしきめをは、此りにか、はらす、さるへしとみえたり。かのりは、しかるへきおとこは見しりたれ共、我はしらすして、あらぬさまにふるまへは、こと／＼く、心と詞とさういして、いふかひなく思はれて、おりにふれことにしたかひて、さしもなき事共をもと、して、はなれん事はうたかひなし。そも／＼、男にしたかふ道は、あら／＼をしへをく。又男の人にそしられん事を、つゝみしらせさらん事も、うしろめたく覚えへし。

ちうわうの後は、朝まつりことをすゝめ奉り、夜をもつはらにし、しやうきやうををしへ奉り給ふ。これみな世をもたしむるさほう也。には鳥の時をつくり、暁なく事は、めん鳥のすゝめによりて也。おとこのおちとならん事は、心へさすへし。又されはとて、女のとりおこなふへきにはあらず。きけいなければさいなんおこるといふ事有。めんとりの時をつくるに、わさはひをこるといふ事有。おとこのかたくなはしき事、うたてしき事成へし。

中比に、ちうのそつの介なかさねとて、いみしきもの有。かんさきのゆふくんむめこうといふ女を、きたり。ある時、すいかんしやうそくいみしく覺たりとおもひて、かの女に、いか、あるといひければ、いみしくおはしますと、とこ共なくいひけるを、かさねてとふていはく、ふるすいかんしやうそくそ、よかりし物を。誰かあるといひければ、ひせんのかみしけいへこそみしか、とこたへければ、むねんなりとてぬかれけり。いな

かの人などの、かたくな、る事、いひつくしかたし。

三にらうほの子にしたかふへき事、三しうのおはりには、子にしたかふ所也。年よりおとろへて、立るにもたやすからず、日をまつほと命をは、願はずんはたれたすくへき。親の子を思ふほとこそなく共、ことのほかにつらからずは、うらみをなすへからず。皆是、のりのことはり也。されは経に云、諸仏念衆生、しゆしやうふねんふつ、ふもしやうねんし、しふねんふも、といふもんあり。此心は、もろ／＼のほとけは、衆生をおほしめせ共、衆生仏を思はず。ふもは子をおもへ共、子はふもを思はず也。かやうのことはりをしりたらは、をのつからなくさむ事もあるへし。親の子を思ふ心さしふかきことは、今更申に及はず。思ひしらん人は、めてたかるへし。され共、ほうのりをさそと思ひとるならば、うらむる事もや。

人は、としのさかんなるほとは、身もつよく、心も明らかなるま、に、物のよしあしをも分まへらる。おひほるれば、かた／＼かはりゆく事かくれなし。さきにいひつることく、くろかりしかみはしろくなり、白かりつるいろはくろくなり、たか、りしたけはひきくなり、つよかりつる身はよほくなり、あさやかなりしまなふたはかすみ、すくかりし心はひかむ。此ひかむ心を、心のす、めによりて、よろつうらむるほとに、子はふけうのとかにおち、わか身はしんいのほのほにもえなんとす。いかにもつ、しむへきは、た、老のこ、ろなり。此うちの子を思ふしひは、仏の御しひにひとしといふなり。

たうのたいそう皇帝は、后くわいにんし給ひて、六ねん迄子をうみ給はず。いろそんし、いのちあやうくみえさせ給ふ間、たいそうくはうてい、大きになけきありて、天下にならひなきいし、りとうといふものをめして、みせ給ふに、りとう申やう、男子にておはします、めてたき太子なるへし。但、母をきらひ

て生れ給はず。さうの手にて、母のちふさのほねをにきりておはします間、母子の間に、一人はさためいたつらに成給ふへしと云。後の給ふは、国のあるしとなるへき太子を、いか、ころすへき。はやく我をころして、子をたすけよ、とあなかちに仰ければ、ひとへのきぬを後にうちかつて奉りて、かたなにて、左右のわきのほねをかきわくる時、子はむまれては、はし、給ぬ。さるほとに、さま／＼をとなく成給ふ。ある時、ちかくめしつかはる、人をめしてとひ給ふ。わか左右の手にきすあり。いつの時よりしてありとも覚えず。いかやうの事にや、ふううの時にはいたむ、と仰らる。臣下の申さく、君の御たんしやうのとき、母の後の身を分て、たいしはたすけ奉る、と申とき、太子、天にあふき地にふしてかなしひ給ふ。われは五きやくさいのとかにん也。いかにしてか、母の後世たすけ奉らんとて、僧をめて尋給ふに、寺をたて、そうをくやうし給はんには、すくへからすと申間、てらをは大慈恩寺となつて、かのてらのひろさは一千三百九十七けん也といふ。は、のしひはかくこそ、いのちをすて、も、子をはたすけ給ひけれ。いはんや其外の事、心にかなはず共、しひをもつて、思ひなたむる心有へし。又かやうに、思ひしるほとの子は有かたし。おやのためにあしき子も、をんあひのしひなれば、すてかたき事もあり。

あるはらもん、は、を追ふせてうちけるほとに、けんらう地神いかりをなして、大地をやふりて、たちまちにむけん地こくに落入しを、うたれぬる母かなしみて、もと、りを取て引上んとすれば、もと、りぬけて、終にむけん落入ぬ。是ほとつらき子をも、たすけんとしけるは、親のあはれみなり。それともなからん子をは、思ひなためて、うらむへからすとなん。

女訓抄卷三目録

- 一 第三 けいしをかへりみる事の内
- 二 ちは万の虫の子をあつめて我子になすたとへの事
- 三 あいく生まれなる病有後のりやうちの子
- 四 同王の太子けいほのうつたへる事
- 五 しんのけんこうの太子継母うつたへころさずする事
- 六 同太子の弟本国へかへり入事 付継弟を殺す事
- 七 後家の女房いみしきふるまひの事

第四 しようにふちの事の内

- 一 後三条院蔵人あやまつて犬をころす事
 - 二 ちんたくとくすりをとへにひく事
 - 三 しんのれいこう賢人をうしなはるゝ事
 - 四 さうらんをたとへにひく事
 - 五 かうがかうそ国をあらそふ事
 - 六 かうの臣下あふをはかりことにてうたする事
 - 七 太そうのたとへをもつて臣下の徳をの給ふ事
 - 八 せいはいわうとりやうわうたからくらへの事
- 第五 しんたいをたもつへき事の内
- 一つかきあり
- 第六 主君につかふへき事の内
- 一 かのふんていにせいわうほ葉をさゝくる事
 - 二 しんのしくはうにふしきの鏡をさゝくる事
 - 三 頼光のつはものつなきんときやしんの事

- 四 せいわうにしようこうたんをうつたへる事
- 五 平五大夫むねよりのりうちの事
- 六 延喜のみかと御ようちの御時の事

第七 友にましはるへき事の内

- 一 あみにかゝる鳥釣はりをくうをのたとへの事
- 二 人中にすむ心得を孔子にとひ申事
- 三 きさつけんをしよれいにえさずする事
- 四 とんておこらすまつしくともへつらふましきの事

女訓抄卷中

第三 けいしをかへりみるへき事

おとこの家にすむならば、そのほと／＼にしたかひなは、みなさいはひなるへし。もしまゝ、子あらは、まことの子と思ひて、おろかあるへからず。男にそひなから、まゝ、子をにくむなん、夏の日のこかけにすゝむに、えたのしけるをいとひ、冬の夜、火の辺にありて、ほのほをそむくかことし。しかるに、まゝは、とは、つぎたる母とかけり。物をあはするには、よき物にあしきものをつかす。同じやうなる物をこそ、つく事なれば、まことの母ににたるへし。はちは、はらみて子をうめる事なし。あらぬかたちなるむしをとりあつめて、我にによ／＼といへは、おやのすかたにちかはさる也。いはんや、継子はすかたも同じかたち也。わか身、にせんとも、たゝ心さしの有なし計也。はちのくいあつむる時は、虫はあさましく思ひて、はちをはおそろしき物に思ひつれ共、あつめられて、我にによ／＼とかたへは、少もちかはす、かたらひにせられて、のちにはなつかし

き事、限なし。其やうにま、子は、まことの母は、あるひは死し、或は捨られて、はなれしかは、みなし子といひ、おんあひといひ、忘かたくして、今のけいほは、うとましき事に思へ共、さま／＼とし月をふるほとに、こまやかにあたること、まことの母にちかはす、二心も有へからず。虫の、はちにくひあつめられてのち、なつかしく思ふかことし。かやうに有へきを、よしなくも、あるひは、はしめてみるま、子なれば、をの、く心ちをもといとして、にくみそめければ、わかとかとは思はずして、かれかへたつる心の、うとましきに取なして、のちには人とはちと、よりあひたるかことし。たかひに、おそる、心よりほかに、なきま、に、やすき心有へからず。男ならば、たにん千人よりも、男のかたうと、たのむ心さしふか、るへし。女子ならば、三従のうちにおやにしたかふ所の苦を、わか身に引あて、思ひしりなは、其心をしるへし。或は、ま、子に心を懸て、其事むなしきによりて、かへりてあたをなし、あるひは、わか腹の末子を引たてんと、ま、子をうしなひて、あまつさへ、あたを我子にむすへるためしもあり。これ則、智恵あさく、おくねんふかきゆへなり。

あいく大王は、ふしきのやまひをし給ひける。ある時は、くちよりふんをいたし、或時は、しもよりいたし給ふ。これをれう治するに、天下のいしゆつ、其数をつくしけれ共、そうしていゑす。国中のなけきとて、禁中の男女、こゑをたつることなし。四千人の后も、袖をしほり給ふ。大王、仰にいはく、いたうのひしゆつ、つきはてぬ。后たちの中に、此れうちの子しつ、はからひ給へと有しかは、あるきさき仰けるは、国中にせんしをなし、使をつかはして、これにおなしやまひの人を、たつねいたすへきよし、申たまふ。これより、方々へつかひをつかはし、いちうより一人、尋出してまいりければ、後の給ふやう、

いかにしても、此病は、れうちのしゆつつきぬる間、此同じ病の人も、たすかるへきにあらす。是をころして、はらの内のやうをみるへきよし、仰らる、間、ころしてみるに、しろきむしの、かいまかりて一つあり。たとへは、我朝にこへむしとて、土の中にあるかことし。此むし、ひのさうのしたにある時は、ふんの道ふさかりて、口よりいて、むねにのほる時は、しもよりにくたし給ふ。此むしに、万のくすりをかけみるに、そうしてしなす。葉みなつきて、もろ／＼の草木の、数をつくして、せんとかくるに、ひともしのしるにて、かの虫、大きにひるむ。ひともしをせんして、きこしめすへきよし、申さる、時、十善のくらゐにて、五しんをくはすとの給ふ。後の給ふは、十せん位の、御いのちの有ての後也。た、きこしめすへきよし、有ければ、ふくし給ひぬ。すなはちなをりにけり。是によりて、四千人の后のうちに、第一のきさきにたてらる、也。天下のまつりことを、とりおこなひ給ふ。

さるほとに、大王たいしに、くならちうわうと申王子おはします。かたちうつくしくて、まなこすきとをり、くならちうの眼のことし。さて、御名をかく申ける。かの后、此太子に心をかけ奉りて、おり／＼けしやうすれ共、父の大王におそれて、用い給はず。惣して、あるへからすの事なれば、かなふましき色みえて、口おしきことに思ひて、いか、してか、此太子をうしなはん、と思ひけれ共ひまなし。しかるに大王、となりのくにをせめんとて、たひ／＼大將軍を、さしつかはしけれ共、国こはくして、其せいほろひぬ。此后、たばかり給けるは、たいしかしこへつかはして、うたせはやと思ひて、大王に申されけるは、なみ／＼の將軍をつかはさんには、いくたひもかなふまし。太子をわたし奉りて、大將軍としてせめられんには、いかなひかかなひかさるへき。さらはうちとつて、太子、かの国のぬし

になし給へ、と仰。めてたき后なればとて、太子をつかはすに、さき／＼は、將軍いけ、ふしをつかはす間、したかはす、これは、大わうの太子にてましますは、いかてかそむき申へき、とて、かの国みなしたかひけり。けいほの後、此よしをきいて、猶たはかり給ひけるは、大王のせんしとて書けるは、こくわうやまひをうけて、ちしゆつなき所に、太子の眼をもつて、治すへきよし、いしかんかへ申也。よつて、是を奉るへきよしを書て、大王の御はんのかたちをうつして、つかはしける。いこくのならひには、大王のせんしをなすには、御はんのかたちをうつしそへぬれば、たしかなるせうこととして、もちいるならひ也。よつて、王のひるねしておはしける時、御判をうつしてつかはす。太子、まこと、おほしめして、おやの仰のうへは、そむくへからすとて、りやうかんをぬきて、御使に奉りけり。その、ち、世にかくれなき事なれば、継母のはからひなるよし、太子きこしめし給ひぬ。かの国のもの共、まうもくの国王を、しゆくんにすへきならねは、おい出し奉る。百官みなすて奉れ共、た、きさき一人ともなひて、まよひ出、いつかたをさすともしらす、まよひありき給ふほとに、わか父の国に來りて、おはしましたしけるか、宿かすへき人もなければ、せいするものもなきまゝに、車宿りにて、よをあかさんとし給ふに、物あはれなる間、心をすまして、ふえをふき給ひけるに、折ふし大王、はしちかく御いて有けるか、此笛をきこしめすに、あやしきものかな、今聞ゆるふえのねは、くなら太子のふきし笛のねに、すこしもちかはす。此ふきぬし、みて参るへきよし仰ありて、人をつかはしけり。かへり参て申けるは、惣して人は侍らす。くるまやとりに侍るものは、人にては候しか共、まなこもなきものにて、おそろしきわらはにて侍るよし申。其わらはにゆへを尋て、しさいをさくへし、と仰ければ、くはしく尋るに、こたへていは

く。われは是、あいく大王の太子也。けいほのきさきのたはかりによつて、とかもなければとも、両かんをぬかれて、まよひありき候、とおほせければ、ことのしさいを、大王にそうし奉る。大王おとろき、いそきよひ入、み給ふに、見しやうにもなくやせおとろへて、こゑはかりは、むかしの太子なれ共、すかたはあらず。手に手を取くみて、なきなけき給ふ。大王、思ひのあまりに、仏弟子の御ところにまいり、たいしの両かん、いか、仕り候へき、ととひ給ふ時、仏てしの給ふ。かのりやうかんは、ち、のためにあたへたり。此けうやうによりて、われ法をとかんする時、ちやうもんの人々のなみたを、とりあつめてあらひ給は、もとのことくなるへし。此をしへによりて、仏てし、御説法、聴聞の人のなみたもつてあらふに、もとのことくなをりにけり。是によりて、八万四千人の後、ともにころし給へり。かのうかりし後は、あまりの口おしさに、はしらしはり付て、いへに火をかけて、やきころしてけり。此罪を、いかにしてか、しやうめつすへき、ととひ給へは、たうをたて、くやうすへし、と仰らるゝによりて、一日のうち、八万四千のたうをこんりうして、くやうし給へり。かのさんきは、にほんこくに飛來りて、則あふみの国、きのくに、有。かゝるめてたきはからひ、いみじき后も、はしたなき心ゆへに、やきころされて、つみほとしんいのほのを、まなこのまへにあらはれぬるにや。又しんのけんこうと申わうに、たいし二人あり。あにをはしんせいと申、つきをはてうしと申。かの母の後、し、て後、又ふしんありき。かのはらにも二人わうします。あにをはけいせいといふ。つきをかんしと云。ある時、けんかうゆめに、し、給ひし後のみえ給ふとて、かのはらのちやくし、しんせいに仰られて、母のはかに物をまいらせ、さて、けんかうかりに

出給ぬ。其あとに、今の后、かのまつりつるものに、毒を入れてをく。是、けいしをうしなひて、我はらの末の子に、くにのくらるをつかせんためなるへし。けんこう、かりよりかへり給ひて、后のはかにむけさせつる物をめしよせて、是を心みんと云。たとへは、なうらい也。これをくはんとするに、后の給ふやうは、われきく事あり。君のさきのはらのたいしたち、国をとくして、うけとらんとして、王の御いのちなかき事を、うしとす。此心みをは、人みさせずしては、めすへからすと申給ふ。しからは、まつ犬にくらはせてみるへし、とて、いぬにくはす。すなはち死する。つきに人にくはするに、人しする。又わう、大きにいかりて、太子しんせいをころしてんけり。其時、てうしおとろきのかれて、他国に行けり。此時、てうしやう、くほん、かいしさいとて、三人のしんかついてゆく。道にて太子、つかれておはします。其うちに、かいしさいかも、のにくをさきて、くほんをもつて、是をろくにくといひて奉る。これをしよくし給ひて、つかれをやすめて、りんこくにしんのほくこうと申王のもとへ、いたりぬ。けんこうほうし給ひければ、ま、母、思ひのま、に、我はらのわうし二人に、国を二つにわけてとらせければ、これをてうし、軍兵をそつしておしよせて、国をとつてくらゐにつく。うかりしま、母の二人のたいし、うちにけり。わか身は山野にまよひつ、立よるへきかたもなく、はてにけり。うかりしことのなかりせは、うかりしことはなからまし。たいしてうしは位につき、しんのふんこうと申て、かた／＼のけんしやう共をおこなひけるに、も、の肉をあたへて、たすけ奉りしかいしさいに、いまたをんをせさりけり。是をきいて、ふんこう大きになけきつ、めしけれ共、すてにまいらす。さてはとて、山に火をかけなは、出んすらんとて、火かけたりけれ共、にれの木に取ついでやけ死ぬ。ふんこう、是をかなしひ

て、賢人をころす物は火なり、とて、国中に火をたつ事、一月也。あつき物しよくせずして、つめたき物はかりしよくする間、年よりとおさなきものは、ひえしにぬるほとに、しさいか死せし日計、火をはと、めけり。三月五日、しさいか死せし日也。かやうの大事をおこすも、ま、母のあしきゆへ也。かやうのためしに引かへて、ふるまひ、いみしくなりいてたるせうこあり。

ある人、なんし一人うみたる。めにわかれてのち、あひかたらへるめのはらに、又なんし一人もちて、かの父死ぬ。その、ちかの女、わか男のありし時に、すこしもちかはす、二人の子をはこくむ心さし、ねん比なり。さるほとにこのかみ、おとなしくなりける。めを合てけり。此女、かたちなたらかにして、みるもの心をかけかよはしけるに、男ものへ行たる跡に、女のもとに忍ひて、人のかよふよし、おと、のしうし、やすからすと思ひて、かよふ男をころしつ。世にかくれなかりければ、せつかい人をめしいたしける。その、ち、このかみ、よそよりかへりきくに、弟めしとられてけるよしを聞て、浅ましく思へ共、かいなし。さて、上へまいりて申けるは、おと、にて候ものは、人を殺したれ共、わかめゆへのかたきなるうへは、とかふかきは我身に侍る也。されは、わか身をめしとりて、おと、をはたすけ給へと申。おと、か申やうは、あに、て侍るものは、此女のおとこと申はかり也。せつかいのゆへをはしらす。まさしく手をくたしたるは、それかし也。手をくたきて侍るうへは、某をは、さいくわにおこなひ給へと申て、たかひに、我こそとかにおこなはれめ、と申あいた、其母をめして尋よとて、母をめしいたしておほせけるは、せつかいのとかにおいては、一人死さいにおこなふへき所に、兄弟二人して、たかに論し申間、は、をめす也。いつれの子をうしなふへきそ、母の申にしたか

ふへし、と仰下さる。母、申けるは、あに、て侍るものは、わらはかけいし也。弟にて侍るは、わか子也。父は一人也。かのち、すてに限なりし時、申をきしは、兄をはわかかたみと思ひ、弟をは汝か身と思ひて、そたてはこくむへし、とねん比に申をきし也。し、てのちは、このかみをおとこと思ひ、弟を我身と思ひて、過し事は今にたへす。なきおもかけを、思ひ出るたひことに、いひしことのは、今更にあらためて、み、にきくかことし。た、おと、にて侍るものを、しさいにおこなひ給へ、と申せしほとに、三人共に、有かたきけん人もとて、ゆるしにけり。さて、他人のめをおかすものは、あしきもの、中にも、かたく死さいにおこなふ也。是より、めかたきをうつに、とかなしといふ事、はしまりけり。か、るよきものを失なはん事、国の恥なるへしとて、死さいをなため、かの国を給はりて、三人共にめてたくさかへける。か、る心はへこそ、あらまほしけれ。せうこおほしといへ共、よろつ是にて心得へし。

第四 しようふちすへき事

ていはんにいはく、うしをにるなへにて、鳥をにるへからす、ねすみをとるねこには、けた物をとらすへからす。百石の車に、とせうのあわをみつへからす、といへり。此心は、うしをいれてにるほどの、大きならんなへには、鳥ほとちいさきものをいれて、にるへからす。是は、大きな事につて、つかはんする物には、せうふんにつて、いとまをついやすへからす、といふ事也。又、ねすみをとらすへきねこには、けた物なんどの、おほいなるをとらすまじき也。人にしよさいをめしつかはんにも、ほと／＼にしたかひて有へし。ふんさいに過たる事をは、あてましき也。百石の車に、斗升のあわをみつへからす、とい

ふは、百石はかりつむほどの、おほいなるくるまに、一斗はかり、一升はかりなどの少分の物をは、いたつらかましく、つむへからす。其やうに、人に恩をすることも、おほいならん物には、せうふんの恩をは、すへからす。人をめしつかふ事、はんしやうの木を、つかふかことし。むねうつはりとして、みしかきはひち木、つかはしらとす。くるまをつくらんには、なか木をはなかへとし、みしかきをはくひ木、まかりたるを輪とす。かやうに、人のきりやうによりて、ふんけんに従ひ、心を見てあてかひ、めしつかふへし。されは、なす事もみちゆきなるへし。此ゆへに、りやうしやうは木をすてす、めいくんは人をゑらはず、といふ也。よきばんしやう、木をゑらはずとは、さきにいふかことし。明君はあきらかなる君也。ていわうとは、しかるへき人の事也。又とし比、召つかふもの、すこしのとあるをはゆるして、其身をすつへからす。本文にいはく、君子は、よきこと一たひしたるものを、百のとかあれ共、ぬしをすてす。下らうは、よきこと百たひしたれ共、一度のとかを大きにうらむ也。人を見るに、わかことくなる物は、すへてあるへからす。人につかはる、物も、かくのことく思ふへき也。是すなはち、主君となる人も、もとかしく、けんそくとする時は、もとかる、ならひ也。我、思ふ心をよくするものは、まれなるへし。

後三条の院の御時、たいりの大ゆかのしたに、いぬおほくあつまりて、かしましかりけるを御らんせられ、蔵人を召て、かのいぬとりすつへきよし、仰ふくめけるに、かの人、思ひけるは、当院は犬をにくみ給ふにこそ、と思ひて、かの犬共をつなきあつめて、かも川に行て、皆ころしすつ。是を洛中に申けるは、当院は犬をにくみ給ひて、蔵人に仰付て、みな殺さる、よしを聞侍りて、洛中にみなころさる、ほとに、次第につたへ聞

て、五畿七道に、みないぬをころしけるを、左大臣殿きこしめして、御まつりの大事小事は、おほせ合らるゝに、國中のいぬをころし給ふ事は、なと仰合ざりけるや、と思ひ給て、事のついでに申出されたりければ、院は大いにとおろき思召て、国々へはや馬をたて、仰下されて、いぬをころす事は、と、められき。かやうに、おつとならんものには、いくたひも、子細を申きかすへきにや。よきものは、鼻をつきては、しうのひかことにてはあらし、我身のあしきふるまひによりて也、とて、後悔の心ひまなし。ふへんにあたる時は、いよ／＼つゝ、しみて、忠をいたす。た、しかるものには、さまたくるもの有。これはしうのためにあしきものとしるへし。ちんとくは口にあまくして、命をたつ、よき薬は口にはかくして、身をたすく、と云文有。ちんとくといふよりは、うみを飛渡るに、け一つ落いれは、海の生類、みな死する也。是は口にはあまき物也。薬はにかけれ共、をばりには病をいやすやうに、主のためによき物は、しやうちき也。主のために、あしきやうなるをは、けうくんする間、き、たくもなし。薬の口にかきかことし。おろかなるもの、後あしかるへきは、主をたふらかし、すかさんか為に、うつくしくてなためて、心にこのむすちめを、心得て申せは、耳にき、よし。これはちんとくの、口にあまきかことし。

しんのれいこうと申王の御時、てうとんと申賢人有。王のまつりのそはめる事を、いさめけるを、御心にあはすして、うれへとし給ひ、しよしといふ兵にて、てうとんをうち奉るへきよし、仰下さるゝ。しうめいなれは、かの所へ行、ひそかにうたむとて、うか、ひみるに、てうとんは何心もなく、かりそめにきぬひきかつき、ふしたりけるを、しよし／＼とみて、くきやうする事おたらさるは、人のしう也。たみをころす王は、と、のほらさる也。とかなき賢人を、ころすにをよはす。又、

君のめいにそむけるは、ふしん也。せんしをそむくも、おそれ成へし。た、せんする所、わか身をころすにはしかしとて、しなき事をくはたて、てうとんは此事をきいて、国をさり出にけり。よしなき事をくはたて、二人の賢臣にわかれ給ひし事、ひとへに王のおろかなるゆへなり。そうらんしけらんとすれ共、秋の風これをやふる。めいくんあきらかならんとすれ共、さんしんこれをくらす、といふもんあり。これはらんといふものは、匂ひと、のほれるを、風ふけはやふれやすし。明王は、まつりことをすなをにせんとし給けれとも、いつはれるもの有て、あらぬさまにそ、ろかし申に、さも有らんと思へり。かれにかたとられて、政ひかさまに、せさせ給ふ事あり。されは、讒臣は国を乱し、とふは家をやふる、といふもんあり。此心は、物ねたむめは、いへをほろほし、人をそんするものは、国をほろほすといふ也。

かんの高祖とかううと、しんの国をあらそひしに、かううはたせいなるうへ、おちにあふと申て、ゆ、しき大將軍にて、かたふきかたし。かうそのの給はく、いかにしてか、あふをうたんといふに、かうそのうちに、ちんへいと申もの、いはく、是よりてをくたさすとも、はかりことにてかううにうたすへし、と申。ある時、かううのもより使のきたりけるに、うれしけなるけしきにて、はしりめぐりて、もてなすへき色みえて、の、しりつ、これへあふの御使にておはすか、といふに、さもあらず、かううの御使也、と申時、よにほいなけにして、もてなさんとすることも、心にもいれず。引出物せんとみえつるけしきも、思ひと、まりて、よにほいなけになるふせい也。其時、かの使、引出物とりはつしたる事、やすからず覚えて、かへりてかううに申やう、あふは、君の御親にておはしませ共、敵の高祖に心をかよはして、おはするにこそ、としさいしか／＼と

申。かうう聞て、さもあるらんと覺て侍り。一とせ、あふのす
てにしぬへき事有しを、かうそ、たすけられたること有。さた
めて心をよせたるらん、其儀ならはあふをうたん、とて、やか
てうたれにけり。是を聞て、ちんへい申やう、今はやすし、た
はかりおほせたりと。軍兵をと、のへて、かううを程なくせめ
おとして、かうそ位につきにけり。さんしん国をみたる事い
しるし。又、くんけんは、しんへつらひて、うつたふるに、よ
ん所なし、といふもん有。此心は、主君の、明らかに人のしや
うはつをもわかつたす、ほれ／＼として、いふかひなき間、うし
ろみの人は、いろをほしきま、にとりて、物の善悪をも分まへ
す。りにはよらずして、物による間、物もいたらざるたくひは、
道理あれ共、申ゑすして、うつまる、事也。いかにもして、よ
きものをかへりみて、もちぬれは、わかたぬによき事をのみ、
はからひ申によりて、つよく身となる人にも、心にくき事に思
はる、なり。

太宗皇帝のいはく、しうせんうみをわたるに、かならず、か
んとりかちのこうをかる。こうつるの、くもをしのか、うしや
うのゆふによる。ていわう国をたもつ事、かならず、きやうひ
つのたすけによる、といふと。此心は、舟の海をわたるには、
かちのちからによる也。こうやつるの、そらをとふ事は、はふ
さのゆうなる故也。帝王、国をたもつ事は、けんしんのはから
ひにて、よき事也。よき所領あり共、代官あしければ、そのと
くふん有へからず。

せいはいわうと、りやうの王と、くわいかうゆふるんして、
りやうわうのいはく、たからをもちたるや、ととふに、いわう
のいはく、我だからをもたす。りやう王のかさねていはく、万
乗の国をもちて、いかにむなしとの給ふや。我は車の前後を、
十二せうてらす玉、十二まい侍り、といふに、我、たからとす

るは賢人也。まさに千里をてらすもの也。た、十二せうのみな
らんや、といふに恥て、りやう王、物もの給はずといへり。千
万の金も一人の賢人にはしかしといへり。男も女も、かやうの
ためしをもつて、心へてつ、しむへし。

第五 しんたいをたもつへき事

人の身をもつことは、やうしやうのはうをもつてさきとす。
よくたしなみゑたる人は、仙人となる。たとひたしなみゑすと
も、心にかけぬれは、しよくふてうのやまひなし。世、末世に
をよふ物、せんうすきこうはくに、しん／＼もなし、けんもな
し、こと／＼しくなく共、心に忘れずして、よういあるへき也。
打まかせたるいたはりは、時にとりて、道のくすしに、れうち
せさするたより也。所により、物にしたかひて、は、かるほと
に、ことなきやうにて、にわかに出きたるわつらひ、なきにあ
らず。わつらはしくなりなんのちは、くゆ共、かひあるへから
ず。よのつねの身つくるひよりして、まれなるいたはりにいた
る迄、あら／＼しるしをく所也。

一にやうしやうのたいの事

しゆ、ろんにいはく、やうしやうに五のふんあり。名利をさ
らさる一の分也。是は名聞をはなるへき也、きぬをさらさる二
の分也。是はあまりよろこふこと、又いかること、いんしよく
をさらさる事、三の分。是は色にふけること、有ましき也。し
けをさらさること、四の分也。是はこきあちはひを、このむへ
からず、しんりよせいをちらす、五のふん也。是は玉しる、心
せるをちらすましき也。

二にしんをやしなふ事

けうしたうきやうにいはく、玉しるをやしなへは、命をのふ。

しきにいはく、ほんにんいける所は、たましゐ也。つける所はかたち也。玉しゐ大にもち、是はかたちもつよくなる。やうしやうようせうにいはく、めになをしからさる色を見、はなになまくさき香をか、され。口にとくみをなめされ、心にはあさむきいつわることを思はされ。又、ゐてつねにやすみ、朝夕うそふく事なかれ。つねに人をやはらけ、思ひをつ、めて、身をすつかにすへし。

三にかたちをやしなふ事

わうしやうようしゆにいはく、人は身をやすくする事なかれ、あしたより夕にいたるまで、常にしよさをする事、有へし。しはてぬると思は、やすみて又なすへし。なかる、水は、と、まれはあしくなり、とほそうこかされは、くつるたとへあり。

四に時にしたかひをきふ事

さうもん経にいはく、春三月は夜更てふして、朝はやくをきよ。夏三月は、日出るまで、ふす事なかれ。秋三月ははやくふして、鳥なかはおきよ。冬三月は、はやくふして、おそくおきよ。日出すことなかれ。ふさんには、春夏はひかし、西にむきてふせ、秋冬はにし、北にむきてふせ。口をあきてふすことなかれ。ひさをか、めて、そはさまにふすへし。男は、北かしらにふさす。ふして後、やかて火をけす事なかれ。あしを高さ所にかけて、ふさ、れ。ふしたる所に、火はちをく事なかれ。

五に目をやうしやうする事

やうしやうようせうにいはく、つめたき水をもつて、目をあらふ事なかれ。月日の光をまほる事なかれ。とをく物を見る事なかれ。四十にあまりては、目をふさくへし。

六にかしらかみの事

千金にいはく、朝、物くはて、かみあらひけつる事なかれ。おほくけつることを、よしといへり。くしをは、手をあらひて

取へし。かみをは、正月とらの日むまの日す、くへし。くこをせんして、あらふへし。つこもりにかみをあらへ、あくまで物をくひて、ふすことなかれ。あつきゆにて、かみをあらひて、水にてひやすことなかれ。よるかみをあらひて、かはかさるに、ふす事なかれ。

七にはの事

はをは朝夕にた、くへし。物くひはては、やうしをつかふへし。うかひをすへし。よるありかは、つねにはをならすへし。百きしんおそる、也。

八に爪を治する事

やうしやうようしやうにいはく、五月五日の朝、水をくみてあひよ。ひつしの時をよしとす。一年に正月二日、二月三日、三月六日、四月八日、五月一日、六月廿一日、七月七日、八月八日、九月廿日、十月八日、十一月廿日、十二月卅日、同じく又いはく、とらの日、あしのつめきるへし。うしの日、手のつめをきるへし。あしのつめは、さるの日もよし。

九にゆの事

又云、此月、よき日をもつてくこをとり、ゆに入てあひよ。あしたに身を清め、あせいたさて、もしはあらはにふし、ゆをあふることなかれ。冬あひて、あせを出す事なかれ。うへて、ゆあふることなかれ。ゆをあひて、そのま、ふす事なかれ。

十に人のほねふしを治する事

やうしやうようせうにいはく、朝ことに曲水をもちいよ。きよくすいと、口のうちのつはき也。いまたをささる時、はを十四とた、くへし。おきて、こゆひのつきの薬ゆひをもつて、すりあわせて、あた、かになして後、目をのこふへし。さして光を見よ。是をなつけて、そんしんくはうまんと云。又朝ことに、なかくあしをのへて、手をもつて、足をあけて、七度てを

足のゆひにつけて、やう／＼あしのゆひことに、いたらしめよ。きめて手をもみて、もちうへし。日ごとにかくすれば、身をやしなふ也。

十一にきあひの事

はくしにいはいはく、一人の身は一国のかたち也。むねはらのくらゐは、なをいゑのことく也。四のえたは、つらねたるさくい也。ほね筋は、百くわんのことし。心は君のことし。ちはたみつのことし。かるかゆへにしんぬ、身をつくろうことは、国をおさむるかことし。其民をあひするは、身をまつたくせんかため也。たみちりぬれば、国めつはうす。きつきぬれば、其身死す。又ひめもすに、つわくをはく事なかれ。

十二に物をいむ事

やうしやうようせうにいはいはく、人は物語しわらふ事、すくなかるへし。よつてしつかなるへし。にわかにかたかくいふ事なかれ。冬は人のとふことあらは、こたふへし。我としけくいふことなかれ。おきてうたうたふことなかれ。うそふくことなかれ。又夢物語することなかれ。

十三にきよしよの事

わうしやうようしやうにいはいはく、天地にたかへる物はあしき也。天の、時にしたかふものはよき也。春夏はたかき所にたのしみ、秋冬はふかきにおさまるへし。きよしよをいみしくおさむる事を、このまされ。又いゑにても旅にても、にわかには、大風大雨霧をすこして出へし。

第六 君につかふる事

世界に国土あり。国土に帝王おはします。是十かいちりつちからによつて、くにのあるしとなることをえ給へり。此十か

いといふは、身にきて三のとかをつくる。せつしやう、ちうたう、しやるん也。口にきて、四のとかをつくる。まうこ、きこ、あつく、りやうせつ也。心にきて、三のとかをつくる。とんよく、しんぬ、くち也。此十かいのつみを、十あくど名つく。いはゆる、しん、く、ゐの三とうこれ也。ふかくおかすものは、ちこくにおつる。ゆるくをかすものは、かきたうにおつ。あさくおかすものは、ちくしやう道におもむく。是すなはち、人の物をあやまりむさふる。物をおしみ、はちをしらす、かやうにある也。くしやるんにいはいはく、一に殺生、二にちうたう、三にいんよく、四にそらことこはく、五にりけんこ、是みな、人の中をいひくらまして、とうしやうをおこすなり。六にさうえこ、是は、しよせんもなき事をいひ、ふしやうの口をして、とかをなす也。八にしんほうをたて、もろ／＼のつみをつくる。九にしやそうして、物の善悪、おんくわをもしらす。十にけんあくこ、是せけんの せきご、これらの十悪をつくらすして、十善戒行のむくひて、生れ給へる国王なれば、かけまくも忝くも、おはします事なるへし。みかと、申は、明らかなる徳を、天地にはふく心なり。わうと申せしは、三をいたしかきて、中をつらぬる。いはゆる天と地と人と也。王 ていこれなり。うへにひけるは天也。中にひけるは人也。下にひけるは地也。三かなかをつらぬる間、ものたる物なし。国王の政は、かくのことし。是は王をやまふものは、天地わかうして、人の望をかへる事也。ていわうきにいはいはく、かんのふんていの時、国中に大やくひやうおこり、しするものなかは過たり。長安城の人、おほきになうす。せいわうほ、薬を三五七くはんもちきたりて、王に奉る。其くすりのせい、梅ほしのほとなり。これを一丸やふりてやくに、そのか三千里に薫す。其香のをよふ所の人間、みなこと／＼く、ひやうなうへいゆうす。

せいぎ、に云、しんの始皇のそくるの時、一のか、みをたてまつる。わたり三尺也。此か、みを、病人にむけてみるに、六ふ五さうすきとをりて、やまひのある所、かくる、ことなし。よてつくるふに、すなはちなをりけり。しんほうし給ひて、この鏡うせにけり。帝王以下、主君も、しな／＼、ほと／＼にしたかひて、主従となる事、戒行の我にまさる前生のしゆくゑんなる間、礼義をたかへす、うやまふへし。礼儀にちかへは、やくそくやふるへし。やふれは、ほうをんたえぬへし。報恩たえなは、ほろふへきゆへ也。かくれたるきやうあれは、あらはれたる徳あり。此ゆへに、人ありて心さしふかし。ふか／＼きによりて、へたてなし。へたてなければ、内外はおこなふ。おこなふゆへに、したかふ事、風の草木をなひかすかとし。是すなはち、わかにはあらず。君の恵の我にあれば也。た、かかる内には、そねむやから有。いかにもして、なきやうにはかからふへし。是をつよくまぬかれんとすれば、世みたる、也。よはくもてなせは、したひちかふへし。すくなるなは、まかる木にそねまれ、せいむはかんしんにうれへらる、といふ本文有。此心は、まかれる木を、番匠か、すくになさんとて、なわをわけてけつる間、もとよりまかりたる木は、すくになさる、をいたむ。又、政道すなをなる人をは、主君は悦給へ共、ほうはいの中に、かたましきものは、是をうれいとする事有へし。中比、らいくはうと云人のうちに、つな、きんとき、さたみつ、ときたけとて、かうのもの有。是を四天王にたとへる。頼光の四天王といふは、これらか事也。此うちに、つな、きん時、二人はことにすくれたる物にて、二人か間には、いつれもをとりますりはなし。よりみつか心には、つなは猶、すくれたりとみえて、ことにふひんにあたりけん。きん時か思ひけるは、つなは今いてきたるもの也。きん時は年来の事也。しかるに、ら

いくはうのけしきをみるに、つなをは、しやうしたり。しよせん、是にこらんとするつなををては、うしなはんと思ひて、折をうか、ひけり。つな、この色をみて、とかうちかひて、すへてかきあはす。去ほとに、あはひよく、よりあひてける時、公時、つなをうたんとて、さしよるに、つなはかいふして、にけにけり。公時、詞をかけていひけるは、いかに、つなはかうの者とて、頼光のめしつかふもの、敵にうしろをみするそ、きたなし、といふ時、つなか申けるは、其事しか也。但、頼光の内には、四天王ありといへ共、ことにたのもしく思召たるは、和殿原とつなとなり。しうの大事にはあはずして、わたくしにうちあふて、二人うせぬるものならば、頼光の御敵、た、是に有へし。さてにくる也、といひてのきぬ。此りにはちて、おいかけるに、と、まりぬ。次のあした、きん時、梅のしもとの、きはめていきかちなるをもちて、つなかもとへいきけり。つな、此よしいかんと、ふ。きん時、申ていはく、昨日、和とのはらの仰られし事、我身の恥、のかれかたし。此ほとは、とのはらを敵にせしか、物に覚えぬ身也。わかせなかを、此しもとにて、あくまでうてと云。日比のしゆくい、みなうちとけてのちは、よの人よりもことにむつみけり。かくこそ人はあるへけれ。よきもの一人あれは、あしきものも、をたしくなる事、これらの心はへ有へし。すへて、主君にしたかふよりほかの事、有へかからず。神明仏陀の冥罰は、さんけのちから、頼あるへし。しゆくんの重恩のかんきは、たすくるやからまれなるへし。かくれてもあらはれても、同じ心也。ふるまふはしめは、ことあたらしき心さしもみえね共、ありへんのちよりは、よきものそと思ひとられぬれば、はてまでもうとまれぬもの也。たとひ、そねむやからのわさにて、一たんたゆるといへ共、おはりとしては、なたむる事、有へし。

むかし、しうこうたんとて、いみしき賢人有。しやうわうにつかへて、朝の御たからにて有けるを、したしむによりて、王の臣下たち、是をめさましく思ひて、或時、てう／＼うつたへ申に、ことのしつひをた、さすして、則、関よりほかへ追へしとて、家内をついふくするに、こかねの入たる箱有。これをしやうわうめしとりぬ。そのほかのしさいさうもつ、こと／＼くてんちやうしめされぬ。此金の入たる箱を、ひらきてみ給ふに、しやうわうの御惱、大事におはしましける時、しうこうたん、願くは、我命をめしとりて、しやう王をたすけ給へ、とさいもんをもつて、梵天帝釈にいのり申されたるさいもんあり。是を見給ひて、かなしみの泪、おさへかたし。まことに、わか病、大事なりしか共、たすかりしは、しうこうたんか祈のむくひたるゆへなり、と仰られて、かへりてその、ち、ことに大切に思召けり。されは、かくれたるおこなひあれは、あらはれたる徳有、といふことはりにかなへり。人たる人は、我にしたかふもの、心さしのありなし、心ねの善悪を見しる事、水のそこなるものは、見すかすかとし。

中比、丹波守保昌といふ人、こくしにてかのくに、下りけるに、よさまにて、はくはつなるふしにあひたる。道のかたはら、木の下にうちよせて、馬ひかへてたてるを、す百よきの者共、かのおきな下馬せぬ事、ふれいなりとて、とかめてせめおとさんとするを、大將軍ほうしやう、せいしてはいはく、此人た、のものにあらず。一人当千といふ馬のたてやうなり。さうなく恥をみすへからすと云。三町はかり行て、お、やの左衛門尉むねつなといふもの、大勢引くして出きたり。国司に色代してはいはく、た、今こ、に、老若一人まいりあひて候はん。むねつねか父にて候。ことのほかなるいなか人にて候。さためて無礼をけんし候ぬらん、と申てうち過ぬ。国司、されはこそと仰ける時、

諸人したをふりけり。かのお、やの左衛門尉むねつねか父は、平五大夫宗頼、父はむさしのかみきんすけ也。か、る人なり、とみられける事、賢人也。是に恥をみせたりせば、お、やのさへもんは、国司をはのかしなんや。主人たる人は、あたる事なし。

延喜のみかとの、御とし四さいの時、内裏に夜更てのち、身のたけ三尺はかりなる男、いつかたともなく出きたりて、わうしに向ひたり。人めをすまして、是をみるに、わうしはこれにらみ給ふに、あまりに久しくにらまれて、かの男あくひをして、わひし、あすは雨ふりなん、といふに、王子は心得て、の給ひけるは、こうかんは風をいはひ、やかんは雨をうれうと云。汝はきつねなん、との給ふ時、こう／＼となきて、きつねしたかひて出にけり。おとなしききんたち、其数おはしけれ共、四さいの君には、おとり給ひにけり。こ、をもつて、きは百さいになれ共、当年のたかにとらる、ためし有。ひんかてうは、がいこのうちにてなくこゑ、もろ／＼の鳥にすくれたり。かうけんしゆといふ木は、土のうちよりおひ出さるさきに、根はまつ八十里さすといへり。しゆくんのいきほひ、かくのことし。君、君たらずといふとも、臣もつて臣たらずんは、有へからず、といふもん有。此心は、君はかひなくとも君たるへし。臣はかしくとも、君にはまさるへからず、といふもんの心也。君はまつりをおろかにして、いかにそはめるとも、臣はいかにもこしらへて、政をた、しくせさせ奉るへし。代、おさめんするはかりことを申へし、といふなるへし。

第七 友にましはるへき事

琴詩酒の友は、身のおはりまで、たゆる事なきためしなれば、

竹をうへ、池をた、へても、あらまほしき物也。か、れはにや、小人はたからをもつて財とす、君子は友をもつてたからとす、といふもん有。又くわりんは、てにしたかひて、かちをあらため、りりんは、ともにしたかひて、身うんふをなす、といふもん有。論語にいはいはく、あみにかゝる鳥は、たかくとはさること、をうらみ、つりはりをのむうほは、うへをしのはさることをなけ、といへり。よき友にあひぬれば、名をあげ、いみしき覚えをとり、あしきともにあひぬれば、かのすゝめによりて、うき名をとる也。まんのこにはあふとも、ひとりのあく人にはあはされ、といふもんあり。とらは、もろ／＼のけたもの、なかに、いみしき物なれ共、一たひもいかれる人には、まさらずといふ事也。世間には、まと云ものあり。そのかたち、おほしといへ共、つねには四魔也。天魔、煩惱魔、五をんま、てんしま、是也。天まといふは、よきことをなす所には、かならず、しやうけをなす也。五をんまといふは、われらかうたかひのさはりをなして、やふれ行事也。てんしまと云は、しやうてんとまのまとなして、しやうけをなして、むしんのわさはひをおこす也。これ則、わさんする人成へし。四まのうち、第一のなん也。かくのことくともからは、きたうにもおそれず、悪事をのみ、たくみいとなむ也。ひたすら、ことなるかたちにもあらず。かたをならへて、かたらひまはるたくひよりして、おこる成へし。昨日までことなきやうにて、けふはかはり、今かたらひて、末たゆるは、人の心也。されは、かうせうさんかうの山有。道さかしくして、車をおす。これも人の心にならふれば、たいらかなる道也。ふうかうの水よりも、舟をくつかへす。是も、人の心にくらふれば、又しつかなるなかれ也、といふもんあり。たとひ人のため、わかため、心をうつくしくする共、人の心、さたまらぬにつゝて、身のいましめをなせ。いみしくあひする

共、そのわるき事をしれ。わるしといふ共、其よき事をわするな、といふ文有。いかによきとも、其わるき事のありしを、忘るましき也。又、よにわるしと思はん物をも、よき事をも忘るましき也。

孔子の御弟子、学問して古郷へかへりける時、抑、人の中にすみ侍るおもむき、いかやうにかと、とひ奉れば、御したをうちふりて、みせ給ふ、心得候とて、かへりけり。よの人は是をしらす。かの人の心へけるは、人の口に齒といふもの有。うへしたをあはするに、あたる物の、くひきらるゝに、舌のやはらかなる物なから、はにくはれぬ事は、齒の心あるにはあらず。舌の心得たる也。其やうにわるきもの有共、心得てたにふるまは、舌のはにくはれぬかことく、なんも有へからず、といふもん有。此心をやかてさとて、心のうちにてたかりし人也。此ゆへに、齒はかたしといへ共、かけやすく、舌はやはらかなれ共、損しかたしといへり。とりわきて、きやうゆうかましくもなく、いふことをちかへましき也。さやうにふるまふものは、ことあたらしく、人に、いみしきものともいはれず、それられす。人はさしたることなけれ共、そらことせぬ物ぞ、とされぬれば、身のなんはなかるへし。

呉のきさつといふ人あり。せんしにより、ろの国へ行。しよれいくんと云人、きさつか持ける劔を、ほしけに思ひたれ共、詞にはあらはさず。きさつも、其いろ見しりたれ共、いまたやくをもとけぬ間、かへりてこそとらせめ、と思ひてたちぬ。ろこくよりかへりてきけは、しよれいくんはしにけり。かのつかの上に、松の有けるに、此劔をかけて、とをりにけり。せうしや問てはいはく、しよくんはし、けり。何ゆへに此つるきをは、かけおはします、といへは、きさつわらひてはいはく、ろこくへ行時、此つるきを、ほしけに思ひたりしかは、かへりてとらせ

んと思ひて、立はなれにき。かれは死するといへ共、わか心のうちにしたりし約束をは、いかてかちかふへし、といひければ、せうしや共、恥をそれけり。物を人にとらす事も、水におほれたるものには、めいしゆをあたへんよりも、つえなわをおろして取上、うへたるものには、金銀をあたへんよりも、飲食をもつてたすくへし、といふ文有。

又小人は、物をうしなるて、せん人をうたかひ、君子は物をうしなひて、三たひふところをさす、と云もん有。此心は、よき人は物を失ひても、さうなく人をうたかひ、はちをみする事なし。よく／＼あんして、はからふ也。下臆はきよきをしらす、思案もなくしきり也。此心あるをもつて、なんもいてきたり、身もほろふる也。又、こくちうにいむへきものは、物のけ、家のうちにいむへきは、火こと、くひ物にいむへきは、わさはひ也。此わさはひと云は、ほかにはなし。へちのすかたにもあらず、心より出きたる物也。人はそうして、物もしらす。わか身は、かしこしと思ひなりて、人をいふかひなく思ふよりして、大事は出きたるへし。つ、しみの門には、わさはひきたらす。た、人の心のしりかたき事を、思ひはかるへし。

白楽天のいはく、天をもは、かりつへし、地をもはかりつへし、わらふうちにつるきある事、よく／＼おそれよ。賢人の大臣殿と申て、いみしき賢者おはしき。人のせせうを申かなへて、給りけるによりて、悦にこかね千両奉けるを、いかてかさやうの事有へき、ひろうあしかりなん、と仰ければ、只今は夜も更ぬれば、たれかしり侍るへきと申に、天も知、又地も知ぬ。汝もしりぬ、又我もしりぬうへは、たれかしらざるへきやとて、終にもちひ給はず。ことに其いはれ有や。天に日月せいしゆおはします。まつたくかくれ有へからず。地にけんらう地神おはします。わか身に一つに思ふ事なれ共、かくるかた有へからず。

いかにいはんや、かたらひていふくうしをや。

又、人に楽しみある時は、心もほこり、ひんにしては、心もすほむ。たとへは、夏はあなあつやといひ、冬は寒やといふ事、や、もすれば、いふかことし。まつしきものは、人をうらやみ、わふるよりほかのことなく、たのしみとめるものは、人をあなつらしく思ひて、くはうりやう也。とめれ共おこらず、貧なれ共へつらはされ、といふもん有。此いましめ、よく／＼心にかくへし。木はまかりたるかたへふし、はしはおもきかたへひく。人の心は本心にひかる、いましめすんは、その身ほろふへし。正直は、いくたひもちかひめなし。まうこは、たひことにちかひめあり。いつはるものと見ては、したひに遠さかれ、まことあるものには、やうやく近づけ、あしきをきうにのかれは、あたをなす事あるへし。よきをにはかにとりよれば、うちつきなる覚え有。人の心は、人にしたかひてあらはる、也。しかるへき人の心ねは、久しくみて、其おもむきをしる。よく／＼思ひはかるへし。

女訓抄卷四目錄

第八けいのふあるへき事の内

- 一 人は一言をもつて其賢愚をしるたとへの事
- 二 ふんしよの事 付かんかうの二りうの事
- 三 錦に詩をおりつけて男にかへりあふ事
- 四 哥道の事 付かいたうの桜の返哥の事
- 五 五五七七七七うたの心得の事
- 六 哥に四病の事
- 七 哥の六儀の事
- 八 八代集の事

- 九 連哥の事 けふしものゝ事
 十 長哥短哥の事
 十一 伊勢物語の事
 十二 しゆせきの事 けいき手しゝ手の事
 十三 いろはのせうの事
 十四 おさなき女ひわの上手に名をえたる事
 十五 しんのしくはうのふしん琴を引事

女訓抄卷下

第八 けいのふあるへき事

車に三すんのくさひなければ、らくちうにめくる事をえす、人に一つのうなければ、世間にすみかたしとみえたり。必ずそのことをみちとせね共、世にすみ、人にましはるならひは、さしあたりたるとき、人にもなはる、事も、時によりては、いふかひなきふせいもあるへし。み山木は、冬の梢なるとき、いつれ同じ色なれ共、春に成ぬれば、やうはいたうりの、とり／＼に匂ふ。心は、四方のこすゑは、めにもたつへくもなし。うちまきれて、ならひみたる時は、よしあしもみえね共、身に能ある人の、しるへきにつらなりて、わかゑたることにか、りて、其けいのうをなす時は、鳥のこくうをとひ、うほの水にかふかことくに、たやすくふるまふ時は、つらなるかひなかるへし。のふある人のめには、ほくせきとみゆへき。たとひ、そのけいのうをあらはさね共、物にと、こほるけしきもなければ、みくるしくもなし。されはにや、蛇はかしら一すん出たるに、そのたけをしる。人は一けんをいたせるに、其けんくを見るといふ事有。よて、あら／＼うか、ふへきことのはを、しるし侍

る也。ふん、かたう、手跡、ひわ、こと、せかいこんりう、仏神、一ねん中のな、五節句、ひかん、かうしん、仏名等なり。ふんと云は、しよしやくのかす、つきかたし。是みな、よにすむ人の目あし也。よの中に、智恵もなく、礼義もしらすして、ほくせきのことく成し時、孔子、老子、世に出、ふんをひろめ給ひしより此かた、まなひえたる人は、かならず賢人の名をあけ、国のまつりことを、た、しくするによりて、君のため人のために、あやまりなし。此ゆへに、国土おさまりて、風雨の時にしたかひて、かんしにおりをあやまたす。わかてうに、かにかうの二りうと申は、かんけとは是せん也。そさのおのみこの、五たいの孫、左京の大夫かんはうのきよひとの子也。かうけと申は、平城天皇の御子、あほう親王の御子、大江の何かしなり。此二人をふんのとおりやうとして、たゆる事なし。

北野の天神の御事は、申におよはず、天神の御まこ、すかはらさんひんふん時と申人、おはしましけり。文にたえたる人なり。ろうさん雲くらし、李將軍かいへにあり、ゑいすいなみしつか、さいせいりよかいまたつかへす。此詩をつくり給へり。ある人、きやうやく人の、ふんしのまへをとる。先陣したるものか、門にうち入を、大將軍と覚しきか、せいして云、ろうさん雲くらし、と云詩をしたる人のいへには、いかてかなさげなく入へき、とて、うち過ぬとみえけり。

又唐土に、とうたうといふ人有。家まつしくして、有はつへきやうもなくして、めに申けるは、同じすまひもかひなし。かく／＼にわかれ過ゆかんに、もし、たのもしくなる事もあらは、かへりすむへし、と約束してはなれぬ。其後、しかるへくして、かのおとこ、りやうしうといふ国のしゆこになされ、めてたく成いてけり。有し妻、これをき、て、おほいに悦、今や／＼と相待ほとに、おもひのほか、よの女にあひ契りしことを、うら

みて、くわいふん詩を作りて、錦の紋におりつけて、八月十五夜に、おとこのもとへつかはしけるを、詩の心、まことに哀なりければ、今のめを捨て、もとのつまをむかへけり。是、文をしらすは、詩をもいかてか作り侍るへき。詩をつくらすんは、錦の紋にも、いかてかをるへき。便なくは、かへりみなんや。身をたすくる便と成しも、有かたかりけり。

孔子の給はく、朝にまなひて夕にしすとも、かなり、といへり。まことに、智恵は玉しるにしたかひて、ゆくものなれば、いのちおはるまで、たしなみまなふへきこと也。

次に哥道と云は、いこくの詩、我てうのもてあそひ也。そざのおの尊、はしめて三十一字の和哥を、詠し給ひしより此かた、もて遊ぶたくひ、おほしといへ共、人丸、赤人をかせんとして、まなひつへし。いらい、身は神国にうつみながら、思ひを雲のうへまで、姿は帳のうちにかくれ、心はみよしの、志賀に、あそふのみならず、身をはこくむ便ともなるにや。

右大将殿の御時、ある女はうの、かいたうのさくらをおほるかにおりて、めのわらはにもたせて、御門のすゑをとをりけるに、御中間をもつて、

のこりなく手おりてみゆるさくらかな

又こん春は なにをなかめんと、仰つかはしたりければ、とりあへず御返事に、

いつるいきの 入をもまたぬ 世の中に

又こん春のたのまれはこそ

と申たりければ、はしたなくいひつるものかな、宿をみよとて、みせられけるに、梶原源太左衛門かめなり。その、ち景季、めのゑんやつきたりけん、はなさんとするよし聞召て、桜の時の返事したりし女房こそ、ふひんなれ、さるへからすのよしを、仰下さる、によりて、思ひと、まりけるとかや。面目といひ、

時にとりては、いみしかりしこと也。此道におこりて、のほる事は、しらぬにはおとるへし。心得てはくるしかるへからす。よてしるす所也。

和哥に五るといふ事あり。これは、五七五七七と、五句にわくるに、句ことに其心あるへし。五といふは、大意、所、名、心、意趣、是也。これを五句にあつるには、ほの／＼と、いふは、たいいとて大体の心也。次にあかしの浦のといふ句は、所とて所をさしたり。第三の句に朝霧といふは、名とて名也。第四の句に嶋かくれ行といふは、心とて心也。舟をしそ思ふとあるは、いしゆとて、此哥のしゆ也。五るにかなへる哥は、いすれもかやうにこそ、あるへけれども、たらぬ哥のみおほし。たとへは、みめよき人の、すこしみにくき所はあれ共、ことのかけぬを、ひなんひ女といふかことし。哥は山の木、浜の真砂の数よりも、おほけれ共、五るにあひかなへるはまれ也。

され共、和哥に四病といふ事有。きせんかしきにいはく、四病と云は、一にはかんしゆひやうと云は、句のはしめの文字と、第二句のはしめのもんと、同じき也。たとへは、てる日さへ、てらす月さへと、句のはしめことに、文字のあるを云也。二には、ふうしよくの病といふ事は、風にむかへるともし火のことし。あやうき也。句ことに、第二の字と第四の字とおなじき也。三に、なみふねのやまひと云は、はしめの句の、四はん五はんのもんしと、第二の句の、六はん七はんのもんしと、同じき也。たとへは、草のはの、わかれにしもの、四にらくくわのやまひと云は、句ことに、おなじことのあるを云也。但、つ、けよめは、くるしからす。たとへは、身をすつる、すつるわか身は、すつるかは、捨ぬ人をそ、すつるとはいふ。句ことに有。かやうに、おほきはくるしからす。是を四病と云也。

又哥に六儀と云事あり。哥の品六にわかれたり。古今集にみ

えたり。しよのことくは、そへ哥、かすへ哥、なそらへ哥、た、哥、た、こと哥、いはる哥、此六也。一つにそへ哥と云は、なにはつに、咲や此花、冬こもり、今を春へと、さくやこの花。おほさ、きの宮の、くらむにつき給へと、す、め奉る時よむ也。此心はへある哥を、そへ哥と心得へき也。二にかそへ哥と云は、さく花に、思ひつく身の、あちきなさ、身にいたつきの、いるもしらすて。三になそらへ哥と云は、君にけさ、あしたの霜の、おきていなは、こひしきことに、きえやわたらん。四にたとへ哥と云は、我恋は、よむともつきし、ありそ海の、浜の真砂は、よみつくととも。五にた、こと哥といふは、偽りの、なき世なりせは、いかはかり、人のことのは、うれしからまし。六にいはひ哥といふは、此殿は、むへもとみけり、さき草の、みつはよつはに、とのつくりして。むへもとみけり、と云は、道理にてたのしかりけりと云也。さき草とは、ひの木也。これらを六儀といふなり。

惣して、和哥をもちうる事、撰集をほんとするかゆへに、あら／＼きする所也。万葉集一部廿卷、哥の数四千三百首。同じく、長哥、三百五十九首。平城天皇の御時、えらはる、也。ならのみかと、申、是也。古今和歌集、一部廿卷。哥の数千九十九首也。されとも、序に千哥、はたまきとみえたり。是は延喜の帝の御時、えんき五年あつこ四月十五日にせんし上、せんしやはしよにみえたり。後撰和歌集一部廿卷、哥のかす千三百十六しゆ、せんしや源のしたかふ、大中臣能宣、清原のもとふさ、紀の時文、坂上のもちき、此人々に仰つけて、せんせられける也。拾遺和歌集、一部廿卷、哥のかす千三百五十一首。これは、花山の天皇の御勅撰也。みつからせんし給へり。後拾遺和歌集、一部廿卷、哥の数千二百十八首也。治部卿みちとし、せんする也。おうとく三年九月十六日にそうする也。寛治元年八月十日

に、目錄を奉る。金葉集、一部十卷、哥かす六百五十四首。此ほかに、連哥十六しゆ有。白河の法皇の仰にて、さきのむくのかみとしよりか、せんする也。天地元年に奏する也。詞花集一部十卷、哥のかす四百九首也。崇徳院、仰にて、左京大夫藤原の顕輔、撰する也。千載集、一部廿卷、哥数千二百八十四首、後白河院の仰にて、入道俊成せんし、文治三年にそうする也。新古今和歌集、哥千九百七十八首、後鳥羽院の御時、せんせらる、也。八代集と云これ也。

連哥の事、代々の式目ある上は、あたらしくしるすに及はず。たいていはかり、しるし侍る也。昔の連哥は、うた一首、もつて二人してよみて、うちすて、し侍りけるを、或人の云、連哥といふは、つらね哥とかけり。つらねあつむへしとて、いくらともなく、つ、けあつめけるを、かの人の、いひつ、けたるはかりにては、めつらしきふせいもなければ、むけにみくるしければ、いましむへきこと、もありとて、はしの句のおはりのもしを、又うちこしにするを、是をかしましとてきらふなり。又、題をさためて、山なと人なと賦物をするに、山の字をはいはて、里と詞あれば、山里の言葉也とて、里の字をもちひ、何人と云に、秋人冬人などいふことはあれば、秋人と心得て用る。又、人といふ事あれば、山人ととるへき也。此句の内に、水といふ事あれば、山水と云事有。たいの二つあれば、是を傍題ときらふ也。又同じ詞、いくらもつ、け集るは、めつらしからずとて、是をりんゑときらふ。春秋をは、其心は、五句なるへし。近代は、あまりきらひ物きひしくすれば、連哥のふせいもつまりて、おもしろくもなければ、せう／＼ゆるすへしとて、式目をかきかへり。しきもくにまかせて、其さたあるへし。

哥に、長哥短歌の間ろんあり。長哥は、なかうたなれば、いくらともなく、いひつ、けたる哥こそ、ちやうかなれ。三十一

字の哥は、詞すくなければ、たんか也といふき有。又、ちやうかとは、三十一しの哥也。其ゆへは、五七七と五にわくる事は、五ちの如來にあて、五かい五しき五き、一としてもる、事なし。もんしの数は、如來の三十二相にあて、よめは、しかるへしといへ共、わつらはしくあるによりて、三十一字、卅二三し、ことの次第よみあくるに、みなと、のへて、いひはてたれは長哥也。いくらも、いひつ、けたる五七七と、うちかへ／＼、万の事を取つ、けあつめ、よろつにか、りて、いひすへらかして、おはりに七七とをきたれは、わかか五あには、はつれたりとて、せんする所、せんしうを、よく／＼心得へき也。伊勢物語の事、源氏はむらさき式部といふ女はうの、かも大明神の御告によりて、しるすといへり。よみやうにならひある物也。けいつをよく／＼みて、口伝大事有。かの師をもとめて、秘事をつたへし。

いせものかたりと申は、ひしはいつれも同じこと、申せ共、まつ名について、さま／＼の義あり。在中将なりひら、伊勢大神宮のかりのつかひのために、くたりしとき、斎宮をおかし奉りしによりて、伊勢の国の物語といふ義もあり。又、伊勢のかみけつかいかむすめ、せんしたりしによりて、いせ物語也。又いせやひうかといふ義もあり。そのゑんゑんある時、すいこ天皇の御宇にや有けん、ひうかの国に、さへきのつねもと、いふもの有。一期のをはり来りて、四十一にして身まかりにけり。又伊勢の国、いす、川のほとりに有ける文屋のよしやすといふものあり。是も四十一にして、道を行ほとに、あしき事するかみに行あひて、はからざるに、道にて身まかりにけり。是も同じ日時也。二人のもの共、同じくゑんまのくに、いたりぬ。たしいやく、此めしうとをみるに、一人は定業、一人はいまた、しやはのゑんつきす。是をかへすへしとて、くしやうしんにふ

たをさ、けの給ふ。かのめしうと、ひこうなりといへ共、はやちやうこうになりぬ。其ゆへは、しやはにと、まる所の玉しゑ、みな火にやけてはいと成ぬ。されは、玉しゑ入へき物なしと申に、たいしやく、や、久しく有ての給ふ。かのめしうとをみるに、同じとし同じ性のもの也。さらにかはる所なし。すみやかに、よしやすか玉しゑを、つねもとかやからに入てかへすへし、との給ふ時に、くしやうしんよしやすをかへしぬ。こ、につねもとかめ、ことにわかれをかなしみて、朝夕かのつかのまへに來りて、かへり／＼するに、四日といふにみれは、此あたらしきつか、四つにわかれて四方にくつれけり。あやしみて取出してみれば、し人よみかへりて、ゑたるさいし、兄弟、あやしみなから悦で、ことよしをとふに、し人、見めぐらして、引かつきて物もいはず。いかにや／＼と、しゑとひければ、我はさらに、汝か男にはあらず、いせの国いす、川の辺にすみし文屋のよしやすといふもの也、とて、有しことのはしめより、たいしやくの給ふ事、くしやうしんのいひしこと、も、かたるにこそ、ふしきの思ひをなして、やかて舟を仕たて、いす、川のほとりを尋るに、かしこにあたらしく、男にをくれたる女あり。尋あひて、かう／＼のことなん有、といひければ、女、まことならず思ひながら、わか男の、いきで出きたると思へは、なつかしくて、やかて三人の子を引くして、此つかひにつれて、かの国にこしてみるに、さらによしやすにあらざるに、女もおほつかなく覚えけれ共、よみかへる人、是をみて、涙をなかけて、これこそわかさいしよ、といへ共、なをさいしはもちいす。死人、かのいせの国の女をよひて、かたはらにすへ、手をとりくみ、なく／＼いふやう、我はこれ、まさしき男也。としいくつのとしより、心さしふかくしてかよひ、はては又めと成、男と成て、子を三人もちたり。兄をは何かしと云。今年はいくつに

なる。二郎は何かし、三郎はおと子にて、今年はいくつに成そかし。出し時は、かゝるへし共しらすして、とくかへりこんなといひて、出し事のはかなさよなど、ことのよしをかたるに、一つもいつわることなし。かのさいし、かたちはことなれ共、玉しゐになつかしまれ、むつまじきことかきりなし。我男にはあらずときけ共、まさしく我男の玉しゐなれば、いかにもなつかしき心有。こゝに、國中せんきして云やう、およそ、玉しゐにしたしむも、ことはり也。いづれもいはれ有。此二人の女、五人の子、ひとつになりて、男と思ひ、おやと思ふへしといふ。をの／＼へたつる心なく、明しくらす。おり／＼、いにしへの事をかたるに、かの国の女の云やうは、まことにあることなれ共、死人のためには、つや／＼なき事に覚えぬ。死人のいふ事は、いせの国の女のためには、みなある事なれ共、かの国の女のため、すこしもたねなき事と覚けり。それより、しんしつたある事のおもてによこさまに成て、さたかならぬを、いせやひうかのこと、云也。いせ物語にある事は、みなたねなきことにはあらず。ある事なれ共、所かはり、ぬしかはる時、一もた、しからぬことなれば、いせ物語といふ。

次に手跡の事、むかしくはうていと申王の時、さうけつと云人、千鳥のあとをみて、もしをつくりいたしてよりのち、かんしとて、かきあらはす事也。天ちくには、ほんしとてかく。漢土には漢字とてかく也。かんと、云は、唐土の事也。唐土より日本へつたへたり。かんの六儀、我てうの六やう、あはせて十二ちやう也。日本のしやうすには、弘法大師のことく、北野の天神の御筆は、こんけの人なれば申に及はず、ほんふには、ないくらのすけひろ、たうふう、ひやうふきやうすけとし、大なこんゆきなり、宮内の大輔さたのふ、中比は法性寺殿ともたか、ともかた、つねともとて、とり／＼に其名をえ給へる御こと

也。もんしに、しん、きやう、さうとて、三つのかたち有。真と云もんしは、へんもつくりも、まさしく、てん一つもおとさすかく也。又行といふは、てんをせう／＼と、めてかき、さうと云は、おうすかたはかりを、へんもつくりもた、しからず、のひとかく也。手跡に、いき手し、手といふ事有。いきてといふは、手ほんにむかひたるに、ならはする師、かいそふてとかくをしへ、ならはするはいきて也。た、手ほんはかりにむかひて、をしゆる人もなきは、し、てと云也。そうして、心に入てならはんに、師なく共、かきあかるへし。

道風のもとへ、人の手本をこひたりけるに、まき、はまて、まひたるふる筆を入たる箱、一つつかはしけるに、ふる筆の望みにあらず、てほんの事也、とかさねて申ければ、道風のいはく、せんする所、かやうにふるふてのつもるやうに、よく／＼心に入てならふへし、と申されければ、弘法大師、むちのものゝ、ために、かなといふ物をかき出し給へり。是はまなを草にかき、さうのうちより、又さうにかき出し給ふ。た、し、徒にも、つらね給はず。いろはといふは、ほんこ也。四十七をもつて、四くのけを説給へり。其詞にいはいはく、いろはにほへと、ちりぬるを、わかよたれそ、つねならむ、うゑのおくやま、けふこえて、あさきゆめみし、ゑひもせず、といふもん也。其心は、いろはにほへと、ちりぬるをとは、花の色はにほへ共、ほとなくちりうせぬれば、かひもなし。人もかくのことし。わか世たれそ、つねならんとは、しやうらくかしやうの四てんたう也。その事かみに申ぬ。うゑのおく山、けふこえてとは、世間の無常を、おく山にたとへたり。此無常とは、つねになしと書けり。此つねにといふ事は、仁王経には、たいはつねのあるしなし、と、玉しゐつねのいへなし、ととけり。あるしとは、玉しゐ也。たいとはいへ也。玉しゐは、体をいへとし、体は玉しゐをある

しとすれば、みなともにあたにして、光の露にやとるかことし。露落ぬれば、やとるひかりもうせぬるかことし。たいにやとる玉しゐるは、此たいうせぬれば、やとる玉しゐるも、ともにつきて、うせぬるかことし。けふこえてとは、めくらの酒によひて、おく山へまよふかことし。あさき夢みし、ゑひもせずといふ事は、われらかしやうをうくる事、わつかにあさき夢をみるかことし。若、此夢さめては、本地しやくくはうのみやこへ、かへるへし、とあそはしたること也。

つきに、ひわ、ことの事、くはんけんは、なん女をゑらはす。ふきものは、女のわさには、はしたなかるへし。然るを、つねにはひき物もちいる也。かのちやうあんしやうか女は、十三にしてひわを引、みかとよりかつけ物を給りて、名をあげ、身のおはりには、舟をまほる江の、鳥のすみかに、白楽天のみ、にと、まりて、なを後の世まで、しるしをかれたり。けんたつは王は、わうこんのはちをとりて、りやうせんのみきはにひさまつき、たいしゆきんならば、又るりのことをよこたへて、一しつのきよくをしらへて、かやうのためしあけて、かそふへからす。

しんの始皇のふしんは、琴をひきて、男のいのちをたすけたるためしも有。ゑんのたいしたんと云人、始皇にとりこめられ、のかるへきかたなくして、天にあふき、きせいしていはく、我、老母一人あり、ろめいすてにつきなんとす。願くは、我を本国へ、今一たひかへし給へ、ときせし。しくはうのいはく、汝、からすのかしらの白く成たらん時、かへすへし、との給ふ時、老母の孝行をいのる間、天の御哀みをかうふりて、かしらのしるきからす、出きたり。りんけんあせのことしとて、帝王、仰出されぬる事は、偽りなし。本国ゑんの国へかへされけり。その、ち、ゑんのたいしたん、今は、しんのしくはうを、うつへ

きはかりことをめくらし、けいかといふふしをかたらひて、うたんとす。けいか、いはく、はんゑきといふものあり。しんわうをそむきしかは、いきとをりふかきなり。かのかうへを切て、もちて、向ひたらは、さためて心をうちゆるすへし。そのときうたん事、いとやすき事なりとて、かのはんゑきをよひていふは、しんの始皇をうたんことあり。かうへをかし給へと云。はんゑきかいはく、我、しん王にいきとをりふかし。本意をとけんとするに、便なし。命をすて、も、かたきをうたんこと、本望なりとて、みつからかうへをはねて、けいかにあたふ。此くひをもちて、ゑんの国のさし図の中に、つるきをまきこめて、しん王のすみ給ふあはうてんといふところへ入ぬ。此はんゑきは、ゑんのたいしに、すかた、ことから、年のほど、すこしもたかはす、にたりける也。さてけいか、ことのをしを申入たりければ、心をゆるして入ぬ。さしつをひけんし給ふ時、つるきあらはれて、あしかるへき間、しくはうのたもとをとりつめて、すてにうたんとするに、千万のふしはあれとも、けいか、うちによりなは、やかて、しくはうをさしころすへきによりて、さうなく人もよらす。さるほどに、しんわうのいはく、今はなんちにうたれんことは、あんのうち也。た、し、我ふしんの琴を、いま一度きかんとおもふ也。願くは、一時のへよ。ことをひかせん、との給ふに、近つかさるほとこそあれ、今はのかれ給ふへからす。ひかせ奉らん、といふ時、かのおしん、七しやくの屏風をたて、そのかけにて、ことを引給ふに、かのきよくにいはく、七せきのへいふうは、おとらはこえぬへし、られうの袂は、ひかはきれぬへし、とひくを、けいかは聞しらす、た、おもしるしとのみ思へり。しくはうは、聞召しりて、けいにもと思ひて、とらへる袖を引きりて、ひやうふをとひこえて、うつへにけ入ぬ。けいかは、たしぬかれて、つるきをもつて、おつ

さまにきりしか共、ひたりのみ、はかり、すこしきりて、はつる、かたな、あか、ねのはしらを切にけり。かのはしらより、火いてけり。さて、けいかをは、ふし共よせ合てうちにけり。その、ち、ゑんのくにへ、ふし共をさしつかはして、たいしたんをはうちにけり。是則、ゑんのたいしかはうおんにて、本国へかへされたりし恩を、わする、間、うんつきにけり。けいか、はんゑきは、ふうんの友にくみする間、いのちほろふ也。ともにしたかいて、身のうんふを、さたむること。是也。しんわうのふしん、琴をひいて、男をたすけける也。

女訓抄卷五目錄

- 一 しゆみさうかいの事 付四州の人の命の事
- 二 日月のめぐりをする事
- 三 大せん世界の事 付四しうのしゆこ仏の事
- 四 四季のしゆこ神の事 付三年ふさかりゑとしかんの事
- 五 曆中段木火土金水の事 付地水火風空の事
- 六 十二月異名の事
- 七 五節供いみやうの事
- 八 正月元日 付七草子日の事
- 九 三月三日 付桃の花りうしんけんてうか仙女に逢事
- 十 五月五日よもきしやうふちまきの事
- 十一 七月七日 付七夕つかうまつり次第の事
- 十二 九月九日 付菊水をのみいのちのふるたとへの事
- 十三 ひかんの事 付金神の事
- 十四 仏名の事
- 十五 物づくりはしめるのふしやの名の事

第九 後家のふるまひの事の内

- 一 しゆんわうの二人の後の事
- 二 はうふ石の事
- 三 めん／＼女の事

第十 後生善所の事

- 一 やうしをたとへの事
- 二 八宗の事
- 三 ほけきやうの事
- 四 いたいけふ人の事
- 五 刀、宝、ふくろ、かたき、いつれもたとへにひく事
- 六 伊勢の齋宮成仏の事
- 七 三部経の事

女訓抄卷下ノ末

せかひこんりうの事

われらか生前をしらすは、人界に生れたるかひもなし。さらんにとりては、仏神のしさいも知へからず。しらすんは、しんする心もふか、るへからず。しんあさくは、祈りもむくひも、かたかるへき也。まつ一世界と云は、しゆみせんと云山あり。たかさ八万由しゆんなり。此まはりには、八の海あり。これを九せん八かいと云。此世界のうちは、第八のほかのうみ也。しゆみせんの四方に国あり。東はとうしうとて、人の命二百五十さい也。南はなんしう、今われらかすみか也。人の命、定まらす。西はせいしうとて、人のいのち五百さいなり。北はほくしうとて、人のいのち千年なり。

此はうに、今の日月めぐり給ふ。日のひろさ五十一ゆしゆむ

也。たとへは、道ののり二千四十里也。月のひろさは五十ゆしゆん、道の、り二千里也。日月のめぐり給ふしたは、とうしうあしたなる時は、せいしうはゆふへ也。ほくしう日中なる時は、とうしうはゆふへ、とうしう日中は、せいしうやはん也。せいしうあしたなる時は、とうしうはゆふへ、なんは日中也。ほくしうはやはん也。ほくしうあしたなる時は、なんしうはゆふへ、せいしうは日中、とうしうはやはん也。是みなせかい也。これを千合て、せうせんせかいとなつく。このせうせんせかいを千合て、ちうせんせかいとなつく。中千世界を千合て、大千世界となつく。これを千合て、三千大千世界といふ。此せかいはむりやうむへん也。これみなふつと也。

よて、五ちの如来と申は、ちうたいは大日如来、ほうかいたいしやうち。とうはう、あしゆく仏也。大ゑんきやうち。南方、ほうしやう仏、ひやうとうしやうち。さいはう、むりやうしゆ仏、めうくはんさつち。北方は釈迦如来、しやうしよさつちなり。

五しんと申は、はんこ王は、せかひのはしまりしさいしよのわう也。五人の王子おはします。一には東方のあるしにて、春をりやうす。二には南方のあるしにて、夏をりやうす。三には西方のあるしにて、秋をりやうす。四には北方のあるしにて、冬をりやうす。五にしゆいのあるしにて、四きの末の土用をりやうす。大しやうくと申も、此はんりう也。みのとしよりひつしの年まで、三年ひかしにすみ給ふ。さるのとしよりいぬのとしまで、三年みなみにすみ給ふ。いのとしよりうしのとし迄、三ねん西にすみ給ふ。とらのとしよりたつの年まで、三ねん北にすみ給ふ。これを三年ふさかりといふ也。天王頂有牛、此五のものしは、妙法蓮華経也。是は牛頭天王をうみ給ふ。さうくはんてん、まわうてん、くま、てん、とくたつ天、りやうし天、

たつにかんてん、し、んさう天、たくせつしんてん、此八わうしと申は、おんやうたうには、たいさい八しんと申。大弁才天女、十二神の子をうみ給ふ。是は、いぬ、ぬ、の十二神これ也。み、むま、ひつし、さる、とり、いぬ、ぬ、の十二神これ也。此神たちの御事なり。くはんひら大将、本地釈迦、はさら大将、本地普賢、めいきら大将、本地こんかうしゆほさつ、あんちら大しやう、本地やくわう、あんちら大将、本地文殊、さんちら大しやう、本地ちそう、いんたら大将、ほんしせんたんかうほさつ、はいら大将、本地まりしてん、まこら大将、本地勢至、しんたら大しやう、本地みろく、しうとら大しやう、ほんち観音、ひきやら大将、本地無量寿、此仏菩薩、ちうや十二時に、しゆしやうをまほり給ふ。ふたうてんしんと申は、こんきによと申かみをめとして、十二の子をうみ給ふ。きのへきのと、ひのへひのと、つちのへつちのと、かのへかのと、みすのへみつのと、これ也。しやとくけんしんは、きつによをめとして、十二の子をうみ給ふ。たつ、のそく、みつ、たいら、さたむ、とる、やふる、あやふ、なる、おさむ、ひらく、とつ、これ也。大しやうくん、九しき女をめとして、五の子をうみ給ふ。木火土金水これ也。われらか五しやうといふは、此五にこもれり。五戒となつく。衆生の五ない五ふんこれ也。五りんといふは、地水火風空也。人のたいにあるに、ちはあし、すいははら、くわはかた、ふうはひたい、くうはかしら也。五は土も水も、風も空も、みなともにけんあひなし。くはうたいにして、しやへつなし。

一年中に、十二月、いみやうの事、

正月 たいそく まうしゆん まうしゆ 上しゆん けん春

二月 けんさい

かうせう ちうしゆん ちうやう

三月 こそん きせい きしゆん なんうんせい ほしゆん
 四月 ちうりよ まうか すいか しゆか くわか
 五月 すいひん ちうか
 六月 りんせう きせき
 七月 いそく まうしう しよしう 上しう しゆしう
 八月 なんりよ ちうしう はつき
 九月 むしや きしう
 十月 おうせう 十一とう やうけつ まうとう
 十一月 くはうせう ちうとう
 十二月 たいりよ ひとつ
 又正月むつき、これはとしのはしめなる間、むつましき人に、
 ことにしたしみ行かよふ。むつひ月といふを略して、むつきと
 云也。二月はきさらき、是は年あらたまりぬれは、あた、かに
 成ぬと思へは、二月ことさらにさむき間、きぬをさらすしてき
 れは、きぬさらぬ月と云を、略してきさらきと云也。三月はや
 よひ、三月になれば、あた、かに春めきて、よもの草いよ／＼
 おへるをもつて、いやよひ月と云へきを、かく云也。四月は卯
 月、うの花さく月なるゆへに、うの花月と云へきを、かく云也。
 五月はさ月、さなへとる月なれば、さなへ月と云へきを、かく
 云也。六月はみな月、夏の末に成ぬれは、水もすくなくなるゆ
 へに、水なし月と云へきを、かく云也。七月はふみ月、これは
 七月七日に、ふみのむしをふるひぬれは、むしのくはぬ間、文
 ふるふ月と云へきを、かく云也。八月ははつき、秋風たちて、
 八月と成ぬれは、風はけしくして、木のはおつる間、はおつる
 月といふへきを、は月と云也。九月はなか月に成ぬれは、こと
 に夜なかくなる間、夜なか月と云へきを、なか月と云也。十月
 は神無月と云、日本国の神たち、出雲の大やしろにおはします
 間、よの所には、かみおはしまさず、神なし月と云を、かく云

也。十一月はしも月、此月は霜ふる月といふへきを、しも月と
 云也。十二月はしはしる月と云、としのはてに成ぬれは、僧を
 請して、仏名をおこなひ、師をしやうするあいた、しはせ月と
 云をかく云也。
 せつ日の事、一年中五節句と云は、正月一日、三月三日、五
 月五日、七月七日、九月九日これ也。此うち正月一日は、こと
 にいわふ事は、正月は一年中のはしめ也。一日は三百六十日
 はしめ也。これによりて、此日うちはしめて、十二月のつこも
 りまで、めてたくあるへきよしを、いはふ事也。其いはれをし
 らすんは、しんも有へからず、其次第、あら するし侍る
 也。
 正月一日はにはとり、二日はいぬ、三日はあ、四日はひつし、
 五日はうし、六日はむま、七日は人の日也。かやうに一日より
 六日にいたるまで、六ちくの日也。けい、けん、ちよ、やう、
 きう、はとて、人のたから也。六ちくの日をいはひたるに、七
 日は我身の日にあたる間、ことにいはふ也。此七草のわかさを、
 あつものにする也。これを七種と云也。せり、なつな、こきや
 う、たひらこ、す、しろ、ほとけのさ、す、な、七くさのなは、
 人の身に三こん七はくと云玉しる、天にて七星とあらはれ給ふ。
 北斗と申も是也。地にて七草と云也。是七さうの名をしきすれ
 は、其としのうちの、はるのきひやう、なつのゑきひやう、秋
 のりやう、冬のわうひやう、かくのこときの、四きの病におか
 されぬ也。ほくとの本日は、七仏葉師、又六くわんをんにこく
 うさうをそへたり。しんかういたせは一期の間、ゑしきゆたか
 にとほしきことなし。又子の日の事、正月七日のうちのねの日
 に、のへにいて、三すんの小松をひいて、こしをなつれば、
 千年のいのちをのふといふ事有。松は千年ある物なれば、それ
 までさかへしと云なり。かならずねのひもちいる事は、ほく

と、申は、北にまします所は、ねのはう也。此ゆへに、ねの日をはしめとす。

三月三日の事、くわくこといふ物有。三月三日のかみのたつに、二女をうむ、みに一女うむ。二日の間に三女をうんで、なからへてやしなはするゆへに、此日もろ／＼のさいけには、東へなかれたる川に、はらひする也。三月三日に、も、の花のひらきたる時、いこくそくらんをとりて、松根のまつり事をして、ふしやうをのそくといふなり。

又も、の花のめてたき事は、かんのめいていの時、ゑいへい五年に、りうしん、けんてうといふ人、二人つれて天台山に入て、薬をとる。道にまよひて、らうまいつきて、せんかたなかりけるに、も、の木一ほんみつけて、も、有。とてくう。身すこしす、やかになりぬ。又山よりくたりて、谷の水をのむに、いよ／＼ちからつよく、又あをなの葉、なかれていつ。又こまのすりくつ、なかる、あいた、人里ちかしと心得て、此水に二人なから入ぬ。水のふかさ四五しやくはかり也。又山ひとつわたりして、大きな谷に女二人あり。すかたいみしき事、よにならひなし。此女、りうしん、けんてうか、しやうみやうをよふ事、とし比しれる人のことし。さて、いかにおそくきたれるそといふ。事心を見るに、ひかし西にも、の木あり。八まん七ほう玉をみちて、めてたきことかきりなし。めのつかふ女も、いみしき事限なし。しかれ共、なんし一人もなし、みな女也。こまのいひ、せんへい、ほしし、を、くふにあちはひめてたし。又もろ／＼の仙女、三五のも、をもちて、これらかきたること悦、をの／＼たのしみをなし、哥をうたふ。おもしろき事、つくしかたし。日暮ければ、来るせん女みなかへり、ありつる仙女二人は、此りうしん、けんてうと、一人つ、めと成て、たのしみなのめならず。さて十五日有てのち、今はふるさとへか

へるへきことをいふに、仙女申やう、いまきたれる事、みなしゆくふくのまねく所也。これによりて、仙女にまはる事をえたり。なんしかへる事を、なんぞ願ふへきや、といふ間、半年と、まりて、此ところのあた、かなることは、一三月のことし。せん女のいはく、はくてう、あはれみさへつるそ、かなしみ思はざるへきやといふ。され共、しきりにかへるへきよしを申とき、もろ／＼の仙女をよひて、ともにうたをうたひ、かの者共ををくりにけり。ひかしのかたの口より、はるかにゆきて、大きな道に出て、わかふるさとにゆきて、いへをみるに、もとのいへもなし。さいしもなし。くはしく尋るに、惣してさる事をしれるといふ人もなし。され共、いかてかするものなかるへきとて、人ことに尋れば、ある人のいはく、つたへきく、我七代のそうにてありける人こそ、山に入てうせにけりときけ、といふて、しれるもの一人もなし。もとの仙宮へかへらんとしければ共、道も覚すして、やかておひにけりといふ。これはかう八ねんの事也といふ。是よりして、桃のいみしき、めてたきあいた、さけに入てのむといふ也。

五月五日はむまの月也。五日はむまの日也。此ゆへにたんこといふ、はしめのむまとよむ也。此日かくしよをす、む。いまの千めん也。この日くつけんは、水に入てしぬる。よねを水に入て、これをまつる。

又くまたまの事、ある人の測に入て、かうりうのねむるにあふて、おとかいの下の玉をとる、かうりうとはたつ也。かの人、たつよそひきたるを、かうふくすへきはかりことをめくらすに、あふちのはをまきて、つらふさきて、五色のいとを、くひにまとひぬれば、たつをそれてよらすといへり。又くすたまはつくるに、百さうの花をもつてつらぬくに、五色のいとをもつて、草のむしのかたちをうつつして、其草にすまする也。この

いのちをつくのいとをかけぬれば、人のいのちをます也。

又此日、よもきをとる事有。五月五日のには鳥のなく時、よもきの、人のすかたににたる所をとりて、やいとふをするに、かならずしるしあり。又五月五日百さうをくみて、よもきをとりて、人のかたちにつくりて、かとのうへにかけぬれば、毒けをぬくといへり。此ゆへに、しくわう、うらによもきをさきたつといへり。又菖蒲をかつらにして、おひにする事有。むかし、へいしよ王にしんかあり。天下をうらみてしにけり。とくしやと成て、国をほろほす。かれを、かうふくすへきしゆつをせんきするに、あるしんかのはからひ申されけるは、かの蛇のかたちはあをく、かしらはあかし。しやうふににたり。されは菖蒲をもつて、かしらにまとひ、おひにし、あるひは、きさみて、のみなんとして、是をしたかふるものならば、かの蛇、わかたいをかやうにせらる、と心得て、おそるへしと申。此義についてかやうにせしかは、おそれてよらす。是をまなふなり。かの蛇の名をは、あやめといひき。是よりして、しやうふをあやめ草といふ也。

又ちまきの事、しゆうかもととりといふ義も有。くはうていの御時、これをうしなはんとし給ふに、そうしてほろひす。かのかたちおにのとし。さる間、わうもかなひかたきによりて、天道に祈給ふに、天より金のひつふりくたりぬ。是をひらきてみるに、一てうの書有。人のさうこくさうしやうの事を、しるし侍る。こかねのひつに入たる間、こんしやく経となつく。此せつによりかんかふるに、かのしゆふはかねしやう也。くはうていは火しやう也。くわこくきんとて、さうこくしたる間、火をせむへきにこそとて、しゆうを野にさかし出して、四方に火をかけてやきころしぬ。此かたちをもと、りのなりにして、糝にしていくい、めのかたちをまるとにしている。かわのかたちを、

くさもちにしていくい、すちをうつして、さうめんにしていくい、しやくにくをあかいひにしていくい、はくにくをもちいにしていくいと也。

七月七日の事、七月はしめ七日、其夜、ていろをしやさうして、さけをなけてもつて、かこくをまつる。かこくとはけんきう也。けいやうしやうのふていに山道あり。たちまちに、そのおと／＼にふれていはく、七月七日しよく女まさにわたる。ていとひていはく、しよく女、何事ありて川をわたるや。こたへていはく、しはらくけんきうにとつくといへり。よの人いまにいたるまで、しよく女、牽牛にとつくといへり。

そへいの事、七月七日そへいをもちいる事は、かうしんといふ王の子に、一そく王とて、あし一つある王の、し、てきやひいしんと成て、とうしにやまひをせさするかみ也。此かみはしるきもちいを、このみ給ふ間まつる也。七月七日は一そく王のしする日也。又七月七夕をまつる。是をきつかうと云。よしみをこふとは、よき事をこひ願ふ也。是はいとをもつて、さうにかけて、七夕をまつる也。たいりにさつかうせらる、やうは、せいりやうてんのつほにて、六しやくのつくゑ、四あしにしてたてまつり、具をおきて、ともし火を九ほんとはす。是を九しといふ也。さてくはんけんのかををく也。御か、みそへる也。ないしはかうをたきて、かちのはに七み、のほりを、五色のいとにつけてさしつらぬく。あの一てんより、とらの四てんにいたる也。いこくには、ふしん、色々の糸を結びて、七み、のほりにつらぬく。こかね、ちうしやくを、はりにつくりてする也。ていちうにをきて、きつかうちてうと、つめの上に、事成就したりと悦ふ也。

九月九日の事、重陽といふ也。其ゆへは、九月をは陽の月として、九日をやうの日とす。やうを二つかさねたるを、てうや

うと云也。此日、菊の花のさけをのむ。

同じく、しゆゆをかくる事、しよなんくはんと云人、ひちやうはうにしたかひて、学問する事すねん。しかるに、ひちやうはうのいはく、九月九日、汝かいへに、火災あるへし。すみやかにさりて、いへの人には、あかきふくろをつくりて、しゆゆを入れて、ひちにかけて、高き山にのほりて、きくの花の酒をのまは、わさはひはうすへしといふ。その詞にしたかひて、山のほりて、ゆふへにかへりてみるに、家にと、まるには鳥、いぬ、ゐのし、ひつし、皆しにけり。ひちやうはうか云、ほんたいにもかやうにせよ、といふによりて、此日しゆゆをかけて、菊の花のさけをのむ事、今にたえず。しゆゆは其みあかし。あかきしゆゆといふ。

又はうそと云仙人は、七百さい也。され共、よはひ十七八ばかりとみえてけり。是はきくの花をふくしてける。又なんやうくんに菊あり。しもにれうすいあり。かのなかれをくむもの、上すを得たりといへり。かのなんやうくんに、しやくくといふ谷有。かしこよりなかる、水は、はなはたあまし。山のうへに菊あり。谷のうちにある人、世あまりの家は、井もほらすして、山の頂をあふひて、水をのむに、命皆、仙人のことし。又れうしやうと云仙人は、白菊のしる、蓮花のしる、ちみやくのしるを、たんに合て、むしてつねにのめは、五百さいのよはひをのふといへり。

ひかんの事、やま天のうへさうてんの下に、てんしやうしゆといふ木あり。梵天、帝釈の諸天、二月八月のししやうに、此所に集りて、ゑんまわうは、まい月つこもりことに来りて、衆生の善悪をかんかへ給へり。くしやうしんは、五日に二たひ来りて、しるし給ふ。ひかん七日のちうもん、三たひふくし、八たひけうかうする間、ひかんの一の名を、三ふくはけうといふ

也。

次に、かのへさるの事、こんれいきそく、これ人の身のこんれいきのたくひ也。人し、てのち、此鬼、天にのほりて、かの土にいたりて、人間のとかをしるすといへり。此よ、た、しく南にむきて、はうこうしめいし、しつにうしやくめつし、んこりしん、ととなふれば、此おに悦、なんをはらひ、ふくをあたふる也。その夜は、ねふらすしてあかすへし。もしねむらは、わさはひをあたふる也。北斗、此方に一行阿闍梨のめんやうのしよにいはく、かのへかのとの日にあく事をすれば、長命のふたをけつりて、たんめいのふたをつくる也。善事をなせば、死するふたをけつりて、生のふたをつけらる、也。此日、諸天、一所にあつまり、一切衆生の善悪をひやうちやうし給ふ。

仏名の事、十二月の末に、三世の諸仏の御名をとなふるなり。仏名にいはく、もし此三世の諸仏の御名をきかは、あるひは生る所、あるひは、かうけきかくをもつて、供養するくとく、無量也。生る、所には、つねに三宝にあひ奉りて、はちなんにおちすといへり。我てうに、にんみやう天皇の御とき、しやうあんにつし、是をそうする也。承和五年に、はしめて内裏に是をおこなふ。仏名三かよ也。近年は一夜にこれをおこなふ。せいやうてんに、ひるの御座に三千仏をかけ奉りて、御たうしには三人、是をちやうかくそうすとなつく。したひの僧三人あり。これをのうしとかうす。かつげ物あり。にしきをこの僧にかすけらる、也。是は天暦の後、やす子の皇后と申、かつげはしめ給へり。それより公卿以下、みなこのことし。

そうして、身のふのある人の、末の世まであたなるはなし。ふつき八卦をつくり、又ひわをつくる。しんのふは五こくをつくる。くわてきは舟をつくり。いふんはうすをつくる。きねをつくる。ぎばは薬をつくる。さうけつはもんしをつくる。し

ゆうつは物のくよろひをつくる。くはうていはまつをつくる。又かんむりをつくる。同じく弓箭をつくる。さいりんはかみをつくる。もうてんは筆をつくる。てんしつはすみをつくる。しろはすゝりをつくる。けいちう車をつくる。はくゑき井をほる。かうたうはこくをつくる。はゆうはよこふえをつくる。しんのほくこうは、つゝみをつくる。けふしはつきかねはしむる。しやうのふえは、ふくきのいもふとちよくわかづくる。り、うはしをつくる。はんけんふはあふきをつくる。たんしゆはごきをつくる。しけんはすくろくをつくる。かんのめいていは寺宮をつくる。みな是のふある人なり。

第九にこけたる人のふるまふべき事

男にわかる、めは、さしあたりなけきのあるにつきて、かみをそり、衣をそむるたくひ、おほかるへし。しかるに、日かす、やう／＼つもりゆくほとに、なけきをさかり、ほんなうは近づく。悪ゑんにひけて、うき名を亡父の跡になかし、恥をかはねにあたふる事、かなしかるへし。思ひやれ、いきたる時、ていしんつきすして、しぬる、何のうらみによりてか、心さし忘るへきや。たとひ又、うらみに有し中なりとも、我身のはちをしらすや。さらんに取ては、身をあらぬ人によすへからず。枕をならへしなこりのみ忘す。かた／＼さひしき小筵にかたしく袖のしつুকたえすは、かの後の世をいのりて、ほたいをとふらひて、同じはちすにすまん事を、いそくへし。

けうわうに二人のひめ君まし／＼き。あねをかくわうといふ、いもとをはしよゑいといふ。これをしゆんわうにあはせ奉りけり。その、ち、しゆんわうほうし給ひしかは、わかれをおしみてなく涙、しやうかいふ川のきしにある竹そみて、またらにな

れり。なみたす、さのみは、いかてかしほるへきや。いはんや、竹またらなるまでつきさるこそ、ふしきの事なれ。今のしちくこれ也。

又、いこくにはうふさんといふ山あり。かの山にはうふせきと云石あり。人のことし。男の、せんしにてをんこくへゆきけり。名残をおしみて、はるかなるまで見をくりて、立なから石となりて、たてる事あり。今にありといへり。

又ちやうしやうしよといふ人有。そのめにめん／＼といふ女あり。おとこ死、てのち、かの男の、つねにすみけるゑんしろうといふ所に、十二年までかなしひ、終にかの所にて、はかなく成にけり。ことほりや、一しゆのかけにやとるちきり、猶さきの世の宿縁ふかし。いかにいはんや、ひとつむしろにして、年月を送りし、いかはかりか、さきのよの契りなるらん。一樹のかけといふは、夏木のもとによりあひてす、み、又人もとをるか、よりにやすめり。我も立やらんと思ひて、ともにやすみて、わか所の物語して、ほとなく立さりぬ。それもさきのよに、此木のもとにて、よりあひて、物語すへきとちきりしゆへ也。一河のなかれをくむも、かくのことし。いはんや、なれこし事のみ、むつまじき事いかはかり。此なさけをもつて、ほたいのゑんとして、終のすみかを願ふへし。

第十 後生ほたいをいのるべき事

人の一期をすこす事、しろきこまのひまゆくよりもはなはたし。はくはといふ馬は、一たひむちにあたれは、千里をすくる物なり。かやうに、よはひたけゆくこと、ゆくほとなし。か、る世のなかに、こせのいとなみおろかにして、もとのすみかにかへらん事、た、ちこくへひく心なるへし。こせをしらぬもの

、法のことはりをき、て、たちまちにこせのいとなみをするは、たとへは人の子の、いとけなき時、他人にかとはれて、そたてられる、ほとに、しかるへきたよりにて、そらこともせぬ人のいふ、なんちかおやは、しか／＼の所にある也。たうしおのれかおやは、うはの空にて、まことのいとおしみにてはあらず。いかにしても、まことのおやのもとへゆけ、とをしへられて、うれしき事限なし。まことのおやある所へゆかん、といそくかとし。ほんうのさんいんふつしやうはありながら、第六天のまわうにかとわれて、生死を出へき事を思ひよらずして、よの中にすむ事を、いみじきさいはひと思へるほとに、法のことはりをきいて、今のわれらかすみかにあらざるへき所也、とかたりて、仏法をしんして、いそきほとけのみ所へいらん、と思ひたつ。これ、まことのおやにあはんといそくかとし。人の一こは、むかしは八万さいをかきりしか、その、ち、したかひに命つまりて、しやかによらい御在世の時より、八十年をもつて一期とす。しうのほくわう、五十三年みつのへさるのとし、しやか仏、御にうめつよりこのかた、しやうあん三ねんかのこのうしにいたる迄、二千二百五十ねん也。世は末代になりぬ。命はいよ／＼つ、まりて、当時五十三さいを二ことすへきにや。此うちを生れて、十五年は人数にもあらず。ようせうのふん也。又五十二以後は、らうもうのふんにて、いとけなきに同じかるへき也。さかんなる事、わつかに三十六なり。これ又ちうやの間に、よるはぬるによりて、うつ、なる事、わつかに十七八年也。そのうちもしやうみやうしりかたし。あしたに生れて、ゆふへにしする、夕へに生れてあかつき死する、生れてやかて死するも有。物の心をしるまでに、いけらん事あらは、善悪の二法をわきまへて、すみやかに生死をはなるへし。此うちに、人間に生をうくる事は、梵天よりいとをくたして、大海の底にし

つめるはりのみ、を、つらぬかんよりもまれ成へし。仏法にあふ事は又、め一つもちたるかめの、うき木のあなにあへるかことし。有かたき事也。命のかりなる事は、朝かほの花の、日影をまつは猶たのみあり。草葉にをく露の、風を待よりもあたなり。されはほとけ、せけんは無常をしるやいなやと、御てしたちにとひ給ふに、きのふあるものは、けふはなし、又いはく、あしたある物は、ゆふへになしと申されけるに、なをしらさりける、とおほせけるに、あなん尊者のいはく、いつるいきは入息をまたすと心得て侍る、と申給ふ時、しか也、との給ひけり。かゝる道理をきくについても、よるをひるにして、いそくへきは来世のすみか也。しやうしをいつる道理は、しんこん、仏しん、てんたい、けこん、さんろん、ほつさう、ちろん、せうろん、とて、是を八しうとなつく。そうして、八万四千のほうもん也。これ衆生の心のまち／＼にして、定まらぬによりて、その心ねのものは、そのもんよりしんたうをえしめんと、仏の、凡夫にきをはかりて、説をき給ふ所也。是一として、あたる事なければ、いつれもしうを一つとりつめて、かのもんより、生死をいつるほとに、つとめていとなむへし。仏は、きさんまといふちゑをもつて、その衆生、そのもんよりほとけになるへきものぞ、としろしめしてあるを、くちのほんふにて、おのか身の心をたにもしらぬもの也。人の上まては思ひもよらず。うちまかせて、つとむる事は、眞言、禪宗、法花、念仏、これをまことなる事にも、とり／＼につとめらる、事なれば、此四つの中に、其一つを尋へし。眞言教のめてたき事は、其数つくしかたし。ほたいしんろんにいはく、にやくにんくふつゑ、つふたつほたいしん、父母しよしよしん、そくせうたいかくいと、説給へり。此心は、若、人、仏の智恵をもとめて、菩提心につうたつせは、父母のむめる所の身、すなはちさとり位の位に

おなし、と給ふ也。たいかくいといふは、ほとけになる所也。た、是おこなふ事は、其身、精分して、手にいんけいを結び、口に神しゆをよみて、心にくはんほうおこらして、生死をはなる、事なり。せんといふは、心にもろ／＼のわつらひをはなれ、うむの二けんをはなれて、まとへる事を、さは／＼とあきらめて、万法みなくうの道理を、すく／＼とさととりて、せうとくするきやう也。上根の人も、ゑかたきもの也。くとんの人も、得る事有へし。た、心のかしこきを、たのますしてあんする、賢愚にもよるへからず。

法花といふは、ほとけの出世し給ふ事は、た、此ほけきやう、当時ほとけになり給ひてのち、よく／＼しゆしやうのきをこしらへて、き、しる所を待給ひしほとに、四十余年はむなしく過にけり。その、ち、きこんをこしらへおほせて、説給へり。諸仏の世に出給ひしもとは、一切衆生の仏に成へき直道は、法花経よりほかは更になし。無量寿経には、四十よねん未顕真実、ととき給。法花経には、ゆひい一大事いんゑんこ、しゆつけんおせ、とも説、あるひは、にやくいせうしやうけ、ないしお一にん、がそくだけんとん、じ、いふか、とものへ給へり。此文の心は、ほけきやうよりほかの経には、しんしつをとかす。或は、法花経よりほかの経にて、一人もほとけになるといふことありといは、我、餓餽道に落ぬへしと説給ひて、わか世にいつる事は、た、是、一大事のいんゑん、ほつけきやうをとかにかためなり、との給へるほうなれば、申も中／＼おろか也。念仏と申は、あみた仏の名号をとなへて、わうしやうするなり。此行、た、口にてあみた仏と申よりほか、き、える法なし。女のためにも便有へし。其ゆへは、いたいけふにんと申せし人は、あしやせ王といふあらしき子のために、取こめられて、ほしころされんとせし時、手をあらひ、口をす、きて、はるかに仏

の御かたをねんし奉りしかは、仏のそらよりけんし給ひしに、此所は、ちこく、かき、しうまんせり、願くは、おもむくへき所ををしへ給へ、と有しかは、光のうちより十方の浄土をあらはして、みせしめ給へり。西方極楽といふめてたき所也とて、ゑらひとりむまれ給ひし。かれも是も女人たり。かれはあしき子のゆへに、願ひて生る、これは慈父のをしへにまかせて、念仏申して、極楽に往生せん事、うたかひ有へからず。

近比、法然房源空と申せし上人は、いみしきちゑましますちしやにて、諸宗にわたりて、出離のようたうをもとめ、しうことに行をたて、行ことにれいすいをかんとするに、しやうたうは、猶われらかふんにはあらずとて、のちには浄土もんに入て、ねん／＼ふしやのもんをはいして、歎喜落涙して、一すちにいよ／＼念仏をとなへ給へり。是によりて、衆生平等に往生せさせんと、我、仏に成給し時、名号をとなへさせんといふ願をおこし給へり。四十八願の中に第十八の願にいはいはく、せつかとく仏、十方衆生、ししんしんきやう、よくしやうかこく、ないし十念、にやくふしやうしや、ふしゆ正覚、ゆいちよ五逆、ひはうしやうほう。此心は、われほとけをゑたらんに、十方の衆生、心をしたしてしんけうし、わか国に生れんと。ないし十念せんに、もし生れずといは、正覚をとらしとちかひ給へりと。しやか如来とき給へり。もし衆生ありて、我国へ生れんと思ひて、三しゆの心をおこさは、即往生すへし、なにをもつてか三しゆといふに、一にはししやうしん、二にはしん／＼、三にはゑかうほつくはんしんなり。三心くそくするものは、かならずかの国に生る、といふ也。此三しんは、本願のししん、しんきやう、よくしやうかこくのもんを、しやうしゆせるもん也。しかれば、念仏せん人は、かならず三しんくそくして、念仏すへき也。一にししやうしんと云は、あみた仏をふかくたのみ奉る心也。

二にしん／＼といふは、つねに名号をとなへて、往生うたかはさる心也。三にゑかうほつくはんと云は、往生して、一切衆生を利益せんと思ふ心也。たとへをもつて此心をあらはすへし。ある人、一つのかたなをもつて、人にとひていはく、其もち給ふかたなは、御身のつくり給へるかとふに、かの人こたへていはく、わか身は手つゝにて、なに事もえせず、人のしてたひたり、と云に、たとへをあらはすに、刀をまふけるはししやうしん也。此かたなは、大事のもの也、あたにせしと思ひてもつは、しん／＼也。さて、はれにもち物をさるは、ゑかうほつくはんしんなり。二に、かくのことくの本願にあふ事は、かたなをもうけたるかとし。又たとへをとりていはく、ふくろ一つまうけたらん、此ふくろをひらいてみるに、中に万のたから入たり。ふくろをまうくるは、ししやうしん也。大事のたから入たるを、あたにせしと思ふは、しん／＼也。中に入たるたからを、とり出し／＼つかふは、ゑかうほつくはんしんなり。されは、本願にあふ事は、ふくろをまうけたるかとし。此名号の中に、阿弥陀のはしめて発心し給ひしにより、ないし仏に成給ふまで、六度まんきやう、一切のくどくをつくりあつめて、名号におさめ給ひて、衆生にあたへ給へる念仏なれば、おろかにせしと思ひて、へちきやうの人にも、いひやふられずして、一筋になむあみた仏となふれば、ふしきの本願によりて、かゝる罪人も、浄土にむかへられ参らせんうれしきよ、と思ひかためて、手ふさがる事あらは、ねんしゆをとらすとも、口にとなへて、命おはるまでたいでんなく申を、深心といふ。袋をあたにせしと思ふかとし。ふくろの中にある物を、とり出し／＼もちひ、ことにしたかひてつかふは、回向発願心也。又たとへは、人のかたきもちたらんに、敵はたけきもの也、我はよはき也、うつ事をえさらんに、わかかたきをうちてとら

せん、と云を、悦てたのむへし。扱、念比に奉公せは、わかかたきをは、うちてたふへし、とふかく頼て、奉公すれば、約束ちかへす、敵をうちてたふへし。此たけきものをたのむは、至誠心也。奉公するは深心也。てきをうちたふは、ゑかう発願心也。しかのことく、我らはむしよりこのかた、悪業煩惱のかたきにせめられて、六道四生にりんゑして、生死をはなるへきやうもなきに、あみた仏の、我をたのめ、煩惱のかたきをはうちてえさせん、と御ちかひあれば、仏を頼奉りて、念仏するは、至誠心也。名号をこたらずとなふるは、深心也。来迎に預りて、生死をはなる、は、かたきをうちてたへとたのむは、ゑかう発願心也。此ゆへに、三身具足するは、へちのやうもなし。阿弥陀仏の本願にいはく、我名号を念せんものは、かならず来迎せんと仰られたれば、決定して、いんせうせられ参らせんすると信心して、心に念して、口にとなへて、をこたることなく、さいこの一念にいたるまで、たえずは、しねんに三心くそくするなり。此ゆへに三心くそくする也。又いはく、かきなきもの、三心と云名をたにもしらね共、一向専修の念仏者に成ぬれば、みなこと／＼く三心くそくして、往生せん事うたかひなし。ゆいかく一かうせんしゆと号するにはなし。しんしつに、一すちにみた仏をたのみ奉る所の、一かうせんしゆのこと也。一向仏をたのみ奉るは、ししやうしんなり。ねん／＼そうそくして、命おはるをかきりとして、念仏するはしんしん也。此くどくによりて、往生せんと思ふは、ゑかうほつくはんしん也。たとへは、手つゝなるもの、手きゝたるものを、えたるかとし。衆生は手つゝ也。くどくはつくりえされ共、あみた仏のくどくをつくりあつめて、なむあみた仏といふ六しにおさめて、衆生にあたへ給へる也。人の子のいとけなきか、親のしひにて万のたからをからけて、ゆつることし。三心の経もん、おほしとい

へ共、かくのこたく、心へへし。とかくに、あみた仏を頼奉りしよりして、人、いかにそしるとももちぬすして、ねんふつふたひにとふるならば、決定して、往生せん人也。念仏の数は、一日一夜に三万へんは上品上生の人、三万返以下は上ほん下生、とせんちやく集にはとかれたり。是も事かまし、定めたる数なればとて、さう／＼と申て、其日くらさん事、心さしのうすき所也。三万返なれ共、一日一やの間に、常にたえずとなふれば、さうそく念仏とて、往生のこうと成也。又四十八願のうち、第十八の願に、十方衆生と御ちかひのあるは、男子女人、みなこと／＼くこもりたり。

第三十の願に、女人往生の願とて、へちにこれあり。ほうさう上人、たいきやうのしやくに、第十八の願をしやくしおさめ、へちに女に約束して、願をおこして云、たとひ我、ほとけをえたらんに、その女人有て、わか名号をきく事をえん。くはんきしんけうして、ほたいしんをおこして、女身をいとはんに、命已におはつてのちに、女人のたいとならば、正覺をとらしとの給ふ。女人は、とかおほくしてさはりふかし。たうたん、きやうのしやくにいはいはれたり。にうしやくきやうをひきていはく、十方世界に、女人のある所にちこく有といへり。五しやう三しうの事は、此かみに申おほりぬ。かくのこたく、つみふかき間、へつして願をたてたり。善導のしやくにいはいはく、女人、仏の名号をとなへて、まさしく命おはる時に、女身をあらためて、男子となる事をえたり。あみたの手をさつけ給ふ。ほさつの身をたすけて、ほうれんのうてなにし、仏にしたかひて往生して、仏のみもとへ参て、むしやうをしやうする也。一切の女人、もしみたのくはんによらすは、千こう万こうにも、終に女身をあらたむる事をえへからず。ほうさうのいはく、此弥陀の本願にすかり、浄土に往生せすは、無量劫にも、女しんをははなるへ

からず。是よりこのかた、六道四生にりんゑせんほとは、かたちをかへす。かたちをあらたむとも、女の身と成て、よるつもの事、心にまかせず。かなしかるへし。いはんや、これのみならず、三つ八なんに落て、くるしみをうけん事、後にうらむとも、いつれの人かたすくへきや。此みた如来の大願にあふて、名号をとなへて、さいこの時なんしとなり、観音ほさつのたな心に、こんれんたいにせうして、みたの来迎に預りて、ほさつしやうしゆのいねうし給ひて、しゆゆの間に往生して、むりやうのけらくをけんし、悦にあらすや。此ゆへに、ゆめ／＼、念仏に物うき事、有へからず。念仏と申は、ほねをくつすこともなし。悪道にかへりて、万の苦をうくるによりて、やすき念仏申、わうしやうせよとありければ、此をしへにしたかひて、ねん仏を一すちに申て、往生する女人の数、あまたありといふ也。此事をふかく信して、念仏一すしにとなへて、うたかひなく往生し給ひし。たとひかうちの人のそしりをなして、せいすれ共、きにしたかひて、名号をおこたるへからず。もし別行の人、いかりをなしてやふらんとする共、余行しつめつ、みた一行のものゝを忘る、事なかれ。しゆみやうもんねういん、此たひみたの本願にすかりて、生死をはなるへきよし、御しん／＼ふかくして、他事なし。しかるに、伊勢の齋宮になりて、御くたり有けるに、称名念仏をは、当社の例として、きんぜいす。さいしゆを始として、一の称宜にいたるまで、みやうと一とうにこしらへ申ければ、ちからにおよはすして、まい日のすへんのねん仏を、とめられけれ共、御心中にわする、事なく、おはしましてければ、とし月つもりて、御命かきり有ければ、御りんしうになりて、天にをんかくひ、き、しうんたな引て、いきやうくんして、しやとうこと／＼く香はしくなる間、あやしみをなす所に、さいくう御ほそんにむき、西にむかひて、一首よみ給ふ。

詞には いはずときけは にしのそら
ありとはかりぞ おもひやらる、

とあそはしけるを、さいこの詞にて、ねむるかことくして、お
はり給ひぬ。御さしきもたしろかす、かつしやうの御手もたか
はす。行住坐臥わすれず、西方の御心中、ふかくおはしけるゆ
へに、往生をとけ給へり。かれをもつて是を思ふに、おとこに
はしたかへと申たれ共、もし、いきやうしやけんのもからに
あひとつくと、此ゆひこんたかへすして、ふかく忘すは、往
生のそくわいとけん事、うたかひ有へからず。本願をうたか
ふましき事は、たとひけふつ、ほう仏あらはれて、御舌を三千
界におほひて、そらことせぬしとして、ほうさうはうの、
みた念仏のきをたてらる、なるを、いひやふらんと、よの宗共
あつまりて、もんたうせられけるに、如来のせつきやうは、み
なこと／＼く、生死のしゆつようの王にて、いかにも、ひやう
とうに侍れ共、時もすき、きもかけぬれば、とくとしかたし。
しかるに、西方こくらくのけうきやうは、末法まんねん、よき
やうしつめつ、みたいつけう、りやくへんそう、とこたへられ
ける。此道理におれて、かへりてみな弟子になりければ、日本
国へ念仏あまねくひろめてたえず。又ある人、法然上人に参て
ありけるか、何事をきかんとてか参り給へり、ととひ給ひけれ
は、かの人申けるは、無智の罪人、極楽世界に往生する事を、
ならひ奉らんとて参たり、と申せば、仰られけるは、こくらく
のあるしにておはしますあみた仏こそ、なに事もしらぬ罪人を、
たすけすくはん、と云願をおこして、十方の衆生を来迎し給ふ。
されは、かしこく思ひより、極楽にまいらん、と思召たる心を
しすめて、より／＼き、給へ。とうとより日本国へわたる一切
経は、五千余巻おはします。そのうち、往生こくらくのために、
さうくはんきやう上下二巻、觀經一卷、阿弥陀經一卷、是を淨

土の三部經となつく。此うちに、むりやうしゆ經と申は、むか
し、ほうさうひくと申人、四十八願をおこして、眞実わうしや
うせんと思はん衆生をむかへをきて、極楽世界をこんりうしま
します也。かのほうさうひく、一さい今は念仏往生すへからず、
との給ふとも、もちいへからず。そのゆへは、しやくそん、ね
ん仏往生の事、極楽世界めてたきを説給ふに、六万こうしやの
諸仏、をの／＼なかき御舌を出して、をの／＼三千世界におほ
ひて、そら事せずと、せう人として、今しやかによらいの説給
ふこと、まこと也、とせう人にたち給ふ。せんたう、念仏わう
しやうのそらことならば、六万こうしやの諸仏、出し給へる御
した、一度口をいて、又かへりいらすして、うせなましとの
給へり。あみたの衆生をむかへとらすんは、しやうかくをとら
しとちかひ給へり。釈迦は、此願うたかひなきそ、ととき給へ
り。六万のほとけは、しやかの詞はうみとたかひなし、そらこ
とせぬしるしの御舌をいたし、せう人に立給へる。今ほとけと
て、けんしての給ふとも、六万のほとけよりほかに、別にほと
け有へからず。ほんふなどの事は、申に及す、たとひ、きこん
まち／＼にして、せいするとも、たけんのあさけりもちあて、
おやの教訓をすつる事、あるへからず。あとにのこせることは
を、ちきにきくかことくせよ。

校異

序

- ① (古) おり (整) 穿 (大) おもひ
- ② (大) なれは
- ③ (大) うつて
- ④ (古) 思ふにもねられす

卷上 第一

- ① (古) た、 (大) たゞ
- ② (古) ふして
- ③ (古) 我思ふと
- ④ (古) ごしやうおんく
- (整) ごじやうおんく (大) ごじやうおんく
- ⑤ (古) 此くは
- (大) 此くは
- ⑥ (大) くるしみ
- ⑦ (古) いはん (整) いはん
- (大) いはん
- ⑧ (古) 筆にては (整) ふにては (大) ふにては
- ⑨ (古) たのもしきしゆくん (整) たのもしきしゆくん
- (大) たのもしきしゆくん
- ⑩ (古) おさまらんよりほかは (整) おさまらんよりほかは
- (大) おさまらんよりほかは
- ⑪ (古) されはにや (整) されはにや
- (大) されはにや
- ⑫ (古) みなこれ

第二

- ① (古) たいほんかうだいのかくにもきはれ、ほんじゆほんふのくにもそかれ、ほんわうとならねは (整) だいはんかうだいのかくにもきはれ、ほんわうとならねは、ほんじゆほんふのくにもそかれ、ほんじゆほんふのくにもそかれ、ほんわうとならねは (大) たいほんかうだいのかくにもきはれ、ほんじゆほんふのくにもそかれ、ほんわうとならねは (古) 四しゆのりん王のそのみかなはず、ほとけならねは (整) 四しゆのりんわうのそのみかなはず、ほとけならねは (大) 四しゆのりんわうのそのみかなはず、ほとけならねは (古) したかひ (大) したがひ
- ④ (古) きりて

- あたへられ
 - ⑤ (古) おふち、うは (整) おふち、うは (大) おふち、うは
 - ⑥ (古) 給ひき
 - ⑦ (古) たくひなし (整) たぐひなし (大) たぐひなし
 - ⑧ (古) 今うち給ふつえ (大) 今うち給ふつえ
 - ⑨ (大) まつそなへける
 - ⑩ (古) 此ゆへに (整) 此ゆへに (大) このゆへに
 - ⑪ (整) みなと、なるべし (大) みなと、なるべし
 - ⑫ (古) いはんや (大) いはんや
 - ⑬ (古) けうぎやうにいはいく (整) けうぎやうにいはいく (大) けうぎやうにいはいく
 - ⑭ (古) ありかんほとは (整) ありかんほとは (大) ありかんほとは
 - ⑮ (古) うたかひなし (整) うたがひなし (大) うたがひなし
 - ⑯ (古) かけなふるるへし (整) かけなふるるべし (大) かけなふるるへし
 - ⑰ (古) さりたりけるとかや
 - ⑱ (古) すみと、のをり (整) すみと、のをり (大) すみと、のをり
 - ⑲ (古) さりたりけるとかや
 - ⑳ (古) しんりき也
 - ㉑ (古) あれはてぬれる宿 (整) あれはてぬれるやど (大) あれはてぬれるやど
 - ㉒ (大) みつのしやうずるゆへに
- 卷上の末
- ① (古) 人の都をかたふけ、二たひかへり見れば (整) 人のみやこをかたふけ、二たひかへり見れば
 - (大) 人のみやこをかたふけ、二たひかへり見れば
 - ② (大) かたふけるといへり
 - (古) かくしきといふもの
 - ④ (整) じやうずあり (大) じやうずあり
 - (古) ちんの前をわたして
 - ⑥ (古) 見うとみ給ふへし (整) 見うとみ給ふべし (大) 見うとみ給ふべし
 - ⑦ (古) われをくしそへ給へ (整) われをくしそへて
 - (大) われをくしそへて
 - ⑨ (古) かなしや (整) かなしや (大) かなしや
 - ⑩ (古) 此ゆへ也。ことに (整) 此ゆへに (大) このゆへに、ことに
 - ⑪ (古) いみしくひらきたれとも、あさ夕

ある間、めをおとろかす程になし。ゆふちよは、みよしの、しかの花のごとし(整) いみじくひらきたれ共、あさゆふあるあひだ、めをおとろかすほどになし。ゆふぢよは、みよしの、しがの花のごとし(大) いみしくひらきたれども、あさゆふあるあひだ、めをおとろかすほどになし。ゆふぢよはみよしの、しがのはなのごとし ⑫(古) かやうに書て、ねたむと読也 ⑬(古) 男又あひてのくちたちに ⑭(古) となん(整) となん(大) となん ⑮(古) われは今年三十九なり(整) われこんねん三十九也(大) われはこんねん三十九なり ⑯(古) はぢてしにぬと云也(整) はぢてしにぬといふ也(大) はぢてしにぬといふなり ⑰(古) 六十になり給ふまで(整) 六十に成給ふまで(大) 六十になりたまふまで ⑱(古) 「うえは」ナシ ⑲(古) こくかのつゐへとは、是也(大) こくかのつゐへといふは、これなり ⑳(古) めこそといふ女を(大) めこそこいふをんな ㉑(古) かたわなる事(大) かたはなる事

卷中 第三

①(古) さんしうのくのうちに(大) さんじうのくのうちに
②(古) のち(整) のち(大) のち ③(整) ち、のたいり共
しらずして、かのくるまよせに、人もなければ(大) ち、のた
いりともしらずして、かのくるまよせに、人もなければ ④
(古) 大王、おほきにおとろき、いそぎよひよせ、見たまふに
(整) わう、大ききをどろき、いそぎよびよせ、み給ふに(大)
わう、おほきにおどろき、いそぎよびよせ、見たまふに ⑤
(古) こ、ろ見させすしては(整) 心みさせずしては(大) こ
ろ見させすしては ⑥(古) 人もしするあひた、わう、おほ
きにいかりて ⑦(古) これをうらみて、きんしやうさんとい
ふ山に、かくれけり(整) これをうらみて、きんしやうざんと

いふ山に、かくれけり(大) これをうらみて、きんしやうざん
といふ山にかくれけり ⑧(古) うみたり ⑨(古) おとなし
くなりける間、めをあはせてけり ⑩(古) うへ人に参りて、
申けるは(整) 上人にまいりて、申けるは(大) うへ人にまい
りて、申けるは

第四

①(古) 人にしよさいをあて、めしつかはんには(大) 人にし
よざいをあて、めしつかはんにも ②(古) あつるへし(整)
あつるべし(大) あつるべし

第五

①(古) よて(整) よて(大) よて ②(大) そもんきやう

第六

①(古) もれたる物なし(大) もれたるものなし ②(古) 一
のか、みを奉りたり。二しやくなり ③(古) やくそく(整)
やくそく(大) やくそく ④(古) あたりけり(整) あたりけ
り(大) あたりけり ⑤(古) これにこえんとするつなにお
ては(整) これにこえんとするつなをては(大) これにこ
えんとするつなをては ⑥(古) さためてふれいとそんじ
候ぬ、と申てうちすきぬ(整) さためてふれいをげんじ候ぬら
ん、と申てうちすきぬ(大) ぶれいをげんじ候ぬらん、と申て
うちすきぬ ⑦(古) まつりことをおろかにして

第七

①(古) なげくといへり(整) なげくといへり(大) なげくと
いへり ②(古) まんのまうごにはあふとも(整) まんのまう

こにはあふとも(大)まんのまうこにはあふとも ③
(古)思ひなして ④(古)せいしゆうおはします(整)せいしゆうおはします(大)せいしゆうおはします

第八

①(古)ある人の(大)ある人の ②(古)もんじと(整)もんじと(大)もんじと ③(古)ある(整)あり(大)あり
④(古)さいこちうじやうなりひら(整)さいちうしやうなりひら(大)在中将なりひら ⑤(古)かりのためにくたりし時(大)かりのめにくだりしとき ⑥(古)けつけいかむすめ(整)けつけいかむすめ(大)げつけひがむすめ ⑦(古)たいしやくのけふはこのめしうとを見るに(大)たいしやくのけふはこのめしうとを見るに ⑧(古)きけばなつかしくおもひて(整)きけばなつかしく思ひて(大)きけばなつかしくおもひて ⑨(古)あらざる間(整)あらざるあひだ(大)あらざるあひだ
⑩(古)子三人を(整)子三人を(大)子三人を ⑪(古)こうほうだいしの事と(大)こうほうだいしのこと、 ⑫(古)くないのたゆふさたのぶ(整)くなひのたゆふさたのぶ(大)くないのたゆふさたのぶ ⑬(古)これまことなるかなといへり。まなとはかくのごとし。又(整)これまことなるかなといへり。まなとはかくのごとし。(大)これまことなるかなといへり。まなとはかくのごとし。 ⑭(古)かならず(整)かならず(大)かならず

卷五

①(古)なんしうは日中なり(大)なんしうはにつちうなり
②(古)これをあはせて(大)これをあはせて ③(古)上と(整)上とう(大)上とう ④(古)この月は霜のふる間、

しもふる月と云へきを(大)この月はしもふるあひだ、しもふる月といふへきを ⑤(大)これを七くさのいわるといふなり
⑥(整)も、有。とりてくう(大)も、ありとてくう ⑦(古)そぶ(整)そぶ(大)そぶ ⑧(古)花の(整)花の(大)はなの ⑨(古)すかし出して(整)すかし出して(大)すかし出して ⑩(古)きつかう(大)きつかう ⑪(古)これを九しとうと云也(大)これを九しとふにいふなり ⑫(古)か、れは(整)か、れば(大)か、れば ⑬(古)みなもの、(整)みなもの、(大)みなもの、 ⑭(古)さんふくはつけうといふなり(大)さんふくはつけうといふなり

第十

①(古)又五十三以後は(整)又五十三いごは(大)又五十三いごは ②(古)てうみやう(整)ぢやうみやう(大)ぢやうみやう ③(古)しやうじんして(整)しやうじんして(大)しやうじんして ④(古)しんしんけう(整)しんしんけう(大)しんしんけう ⑤(古)しやうかくをとらしといへり。しやうかうとは、仏になりたるなをとらし、とちかひ給へりと(大)しやうかくをとらじといへり。しやうかくとは、ほとけになりたるなをとらじ、とちかいたまへりと ⑥(古)しんけう(整)しんげう(大)しんげう ⑦(古)しやうじをはなる、也 ⑧(古)たのみ奉るよりして(大)たのみたてまつりし ⑨(古)の給ければ(大)のたまひければ ⑩(古)たうさん経(整)たうさんきやう(大)たうさんきやう ⑪(古)みやに(大)みやに ⑫(古)則(大)すなはち ⑬(古)御本そんにむき ⑭(古)ほうさうぶつと申人(整)ほうさうぶつと申人(大)ほうさうぶつと申人

類話一覽（内容の類似度が高いものを中心に挙げる）

序

一 四たう八くの事

四顛倒

八苦

生苦

老苦

潘安仁の白髮

在原業平の歌

たかみねの歌

白楽天の詩

五臟

病苦

死苦

愛別離苦

怨憎会苦

老子の名の由来

賢人たち

求不得苦

過去因果経

慈元抄下

因縁抄五五

孝養集上・宝物集二

孝養集上・宝物集二

孝養集上・宝物集二

朗詠注

古今和歌集三四九

宝物集一

白氏文集「晏坐閑吟」・和漢朗詠

集「老人」・宝物集一

口遊・宝物集二・塵添壺囊鈔一〇

・撮壤集・節用集

孝養集上・宝物集二

孝養集上・宝物集二

孝養集上・宝物集三

孝養集上・宝物集二

三国伝記一二・下学集上

朗詠注

孝養集上・宝物集三

孝養集上・五常内義抄・平家物語

「大原御幸」

五盛陰苦

二 五しやう三じうのこと

三従

父母の恩

四恩

えつ国の貧女

伯瑜

丁蘭

孟宗

貧者（養老の滝）

郭巨

孝養集上・宝物集三

口遊・世俗諺文・明文抄三・女訓
・女学範

孝養集上・宝物集六・仲文章・童

子教・君子集・五常内義抄・慈元

抄下

下学集下・塵添壺囊鈔一七

列女伝六・蒙求古註・今昔物語集

三・蒙求和歌三・十訓抄五・私聚

百因縁集三・三国伝記一〇・榻嶋

暁筆九・因縁抄四四・内外因縁集

・新語園三

孝子伝・注好選上・蒙求古註・今

昔物語集九・蒙求和歌三・宝物

集一・十訓抄六・内外因縁集・寢

覚記

孝子伝・二十四孝・注好選上・蒙

求古註・今昔物語集九・宝物集一

・内外因縁集・月庵醒醉記

孝子伝・二十四孝・注好選上・今

昔物語集九・宝物集一・童子教

・五常内義抄・源平盛衰記一七・

因縁集・内外因縁集・月庵醒醉記

続日本紀七・古今著聞集八・十訓

抄六・寢覚記・謡曲「養老」

孝子伝・注好選上・蒙求古註・

孝

ゆうほう

はんふ

なよたけ

女の心を水に喩える

男女 陰陽

李夫人

貞女（劍齒）

「われもしか」の歌

悪しき女の容姿
かささぎの鏡

相人かねひら

王昭君

今昔物語集九・宝物集一・二十四

孝・慈元抄上・内外因縁集・童子

教・月庵醒醉記

孝経・世俗諺文・明文抄三・慈元

抄上

注好選上・宝物集一・仲文章・童

子教

仲文章・童子教

鳴門中将物語・古今著文集八・因

縁抄四・

比売鑑七

比売鑑七

白氏文集「李夫人」・注好選上

・朗詠注・唐物語・古今著聞集

八・十訓抄九・唐鏡四

拾遺和歌集三二五・曾我物語五・

三国伝記一・三国物語一

大和物語一五八・今昔物語集三〇

・新古今和歌集一三七三・十訓抄

八・沙石集七

衛生秘要抄

綺語抄中・注好選上・今昔物語集

一〇・百詠和歌一・朗詠注・唐物

語一〇・榻嶋暁筆一八

今昔物語集二四・古事談四三八

白氏文集「王昭君」・和漢朗詠集

「王昭君」・朗詠注・今昔物語集

一〇・宝物集三・教訓抄六・曾我

太公望と妻

朱買臣

上陽人

白楽天の詩

七去、三不去

なかざねと遊君

大慈恩寺建立

三
けいしをかへりみるべ
きこと

継子と継母

くならちうと継母

八万四千基の塔

献公の后と継子

物語二・唐鑑四

蒙求和歌七・十訓抄八・因縁抄五

・比売鑑四

蒙求古註五・蒙求和歌五・十訓抄

八・唐物語一九・比売鑑四・鑑草

二

白氏文集「上陽白髮人」・和漢朗

詠集「秋夜」・朗詠注・今昔物語

集一〇・宝物集二

白氏文集「上陽白髮人」

戸令・口遊・明文抄三・十訓抄五

・東齋隨筆「礼儀」・比売鑑四・

鑑草三・妻に与ふる書

明文抄三・口遊

古事談一四五

内外因縁集

本朝女鑑「継子をはごくむ式」

今昔物語集四・宝物集五・三国伝

記七・直談因縁集二・法華直談鈔

五末・因縁抄六・

今昔物語集四・法華直談鈔五末・

因縁抄六

列女伝七・今昔物語集九・宝物集

六・朗詠注・十訓抄六・太平記一

二・唐鏡二・鑑草五

三月五日、火を止める
継子を大切にする母

朗詠注・唐鑑二
列女伝五・注好選上・今昔物語集
九・発心集六・私聚百因縁集九・
沙石集三・三國伝記一・比売鑑一
三

四 しようふちすべき事

後三条院と犬
遣遁

中外抄下・古事談六八
因縁抄八・朗詠注

五 しんたいをたもつべき事

やうじやう
しんをやしなうこと
かたちをやしなうこと
ときにしたいをきふすること
めをやうじやうすること
かしらかみのこと
はのこと
つめをぢすること
ゆのこと
ほねぶしをぢすること
きあひのこと
ものをいむこと
きよしよのこと

医心方二七
医心方二七
医心方二七
衛生秘要抄
医心方二七・衛生秘要抄
医心方二七
医心方二七
医心方二七
医心方二七
医心方二七
医心方二七
医心方二七
医心方二七
医心方二七
医心方二七
医心方二七
医心方二七

六 きみにつかふること
丹後守保昌

宇治拾遺物語一三五・古事談三一

醍醐天皇
君、君たらずといふ
とも

七 友にまじはるべきこと
季札

白楽天 天可度

八 げいのふあるべきこと
菅原・大江

回文詩
頼朝と梶原妻女
和歌の四病
六義
撰集
連歌 式目
長歌・短歌
いせやひうがのこと

九・十訓抄三・本朝語園二九八
因縁抄四七
古経・世俗諺文・明文抄二・宝物
集六・君子集

注好選上・今昔物語集一〇・蒙求
古注「季札桂劍」・朗詠注・宝物
集五・十訓抄六・平治物語中・源
平盛衰記一五・東斎随筆「詩歌」
榻嶋曉筆一六
白氏文集「天可度」

和漢朗詠集「將軍」・本朝文粹五
・朗詠注・江談抄六・十訓抄一〇
・古今著聞集一一七
列女伝・朗詠注
和歌威徳物語・烈女百人一首
和歌知頭集・和歌童蒙抄・因縁抄
四六
和歌知頭集・塵荊鈔下・節用集・
女学範
撮壤集下・塵荊鈔下・因縁抄二・女
学範
因縁抄二
慈元抄上・塵滴問答
和歌知頭集・冷泉家伊勢物語抄・

いろは歌
 咸陽宮
 せかい
 五しん
 十二神
 月の異名
 異名の由来
 六ちく
 七草
 三月三日
 桃の花（劉阮説話）
 五月五日
 屈原
 くす玉
 よもぎ
 しようぶ
 ちまき
 七月七日
 そべい
 きつかう
 九月九日
 費長房
 はうそ

因縁抄四八
 宝物集一・十訓抄六・平家物語五
 口遊
 簞篋内伝二・榻嶋暁筆一・因縁抄
 三・塵滴問答
 口遊・簞篋内伝二・榻嶋暁筆一・
 因縁抄三・
 因縁抄一・下学集・節用集・撮壤
 集・塵荆鈔・月庵醉醒記・
 掌中歴・節用集・撮壤集
 節用集・女礼
 掌中歴・朗詠注・節用集
 荆楚歳時記・朗詠注・女礼
 蒙求・朗詠注・女礼
 公事根源愚考七・女礼
 朗詠注・下学集・女礼
 朗詠注
 朗詠注
 朗詠注
 朗詠注
 荆楚歳時記・師光年中行事・公事
 根源愚考八・女礼・女学範下
 公事根源愚考八・女礼
 荆楚歳時記・江家次第
 下学集・節用集
 師光年中行事・因縁集・公事根源
 愚考九・女礼
 荆楚歳時記・和歌童蒙抄七・朗詠

彼岸
 庚申
 仏名
 ものつくり

九 ごとけたる人のふるまふ
べきこと

後家
 紫竹

望夫石

めんめん

十 ごとしやうぼだいをいの
るきこと

第一八願

三しん

女人往生の願

注・太平記一三・三国伝記一・下学
 集・節用集・塵添瑳囊鈔一
 榻嶋暁筆二二
 口遊・朗詠注
 朗詠注・塵添瑳囊鈔
 朗詠注・節用集・榻嶋暁筆一・月庵
 醉醒記・女学範

本朝女鑑「後家の式」
 朗詠注・唐物語一三・下学集・塵
 荆鈔一九・塵添瑳囊鈔・榻嶋暁筆
 二二・月庵醉醒記
 唐物語一三・十訓抄六・古今著聞
 集一七九・榻嶋暁筆
 唐物語八

無量寿経・三部経大意
 観無量寿経・三部経大意・選択本
 願念仏集
 無量寿経・無量寿経釈